

モモン・ザ・ダーク

テイクアンダー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

漆黒の戦士モモン。

それは誰もが憧れる英雄で、誰もが縋る英雄。

英雄の中の英雄——英雄という名の偶像。

ただそれだけの存在ではなく、彼はいまアインズ・ウール・ゴウンの前に立ちただかった。

- ・アインズ様ではないモモンという存在が現れてしまったというお話です。
- ・設定は原作一三巻までに公開されているものに準拠していますが、二次創作ゆえ独

自設定、独自解釈も多分に含みます。(物語の根幹に独自の設定が関わります)

- ・ 原作七巻終盤より大きく分岐する所謂IFルートの構造です。
- ・ アニメ三期、アルシエ慈悲記念で勢いまかせに書き始めた初投稿です。
- ・ アルシエ生存ルート！(重要)

目次

116

漆黒の英雄

1

捻じ曲がる運命

5

闇

14

バーサス1

22

バーサス2

33

これから

44

アルシエの選択

55

強く

64

エ・ランテルにて

81

招待状

92

叡智

104

アインズ・ウール・ゴウンの憂鬱

知り合い

131

薔薇

145

依頼

154

カルネ村

161

真相

178

間違いじゃない

185

英雄

197

霧

211

幽霊船

224

船上の舞踏会

238

魔法詠唱者

253

第二ラウンド

265

役割

逸話

知らない天井



275

293

306

漆黒の英雄

この世界の夜空は美しい。

漆黒のキャンパスに散りばめられた宝石の如く輝く星々。満天の空を見上げ、どこかで誰かが宝石箱を思い浮かべた。本当に見事なものだ。誰もが息を呑み、その目を奪われる。

そんな夜があるというのに、この世界は残酷だ。

いつだってどこかで悲劇が起きている。喜劇や幸福は比べれるほどにないくらいちっぽけだ。

戦争が起こり人が死ぬ。病が蔓延し人が死ぬ。飢餓に陥り人が死ぬ。

悶え、苦しみ、あるはずのないモノに救いを——あるいは許しを請う。

人間だけではない。森妖精も、山小人も、ビーストマンも。

生きとし生ける全ての生命が、唐突な悲劇に見舞われていく。

そこに救いなどあるはずもない。理不尽を当たり前だと飲み込んで、胸に抱えた感情を押し殺し、美しき夜空に慰められながら生きている。

だから皆、求めるのだろう。目の覚めるような英雄譚を。

不可能を可能とし、悲劇を打ち破り、絶望の底より民を救い上げる、そんな夢物語を。大人は鼻で笑い、子供たちは目を輝かせる。次第に大人たちも胸を熱くし、まるで当事者であるかのように英雄の成した偉業を語る。そんな夢で終わらせるには惜しいお話。

けれど、幸いか。この世界には確かに英雄と呼ばれる者がいる。

二〇〇年前に魔人を打ち滅ぼした十三英雄を代表とし、今もなおその輝きは受け継がれ生まれている。

王国に咲く蒼薔薇も、帝国で鳴く銀糸雀も。アダマンタイトという世界最高の鉱物を称号にする冒険者をはじめとした者たち。彼ら、彼女らの活躍はいつだって民衆を勇気づけ、王族すらも興奮させる。

そんな中でも、『漆黒』と呼ばれる者たちの話がある。

常に命の危険がつきまとう冒険者という職の中にありながら、彼らはたった二人で冒険をする。

男と女、戦士と魔法詠唱者という組み合わせ。

女の方は魔法詠唱者である。若くして第三位階までの魔法を駆使する天才。しかしそれよりも人々が注目するのは彼女の美貌だった。隣国にすら『美姫』という異名が届くほどの絶世の美女。同性異性関係なく、すれ違った者は振り返り息を呑んでしまう。

彼女だけでも一つの御伽噺ができてしまいうだ。

だが人々は、漆黒といえども一人の男を連想する。

全身をチーム名と同じ色の鎧で包む偉丈夫。赤いマントをたなびかせ、背には人丈ほどもありそうな二本のグレートソード。佇まいからして気品を漂わせ、その言葉は優しく、その腕は勇ましく。威厳に満ちながらも清々しい。話した者が口を揃えて彼こそが真の英雄だと讃える。そんなまるで絵に描いたような存在だ。

過大評価だ、噂に尾ヒレがついている、と指摘する者もいる。

そんな連中も、彼の成した偉業を聞けば閉口した。一つきりの伝説ではない。彼は幾つもの、幾つもの、その英雄譚を積み上げている。

エ・ランテルの墓地における大量のアンデッド、および黒幕の打倒。

ギガントバジリスクの討伐。

吸血鬼ホニョペニョコの討伐……などなど。

突然、城塞都市に冒険者として現れ短期間に幾つもの偉業を成して遂げている彼であるが、民衆——特に王国国民——にその名を知らしめたのが悪魔ヤルダバオトによる王都襲撃の一件だろう。

一万人以上の犠牲を出した悪魔の軍勢による王都への襲撃。その首魁たるヤルダバオトは、アダマンタイト級冒険者をもつてしても太刀打ちできない化物であった。そん

な化物を、彼はたった一人で相手取り、激闘の末に打ち負かし撃退した。

彼の挙げた勝鬨は、天を伝い大陸中へ響いたという。

そんな漆黒の英雄を吟遊詩人たちはこぞつて語り、真も嘘も混じった伝説が人々の心に根付いていった。

曰く、その男は巨大な両手剣を片手で小枝のように振り回す怪力無双。

曰く、気合いと共に振るつた剣は魔法を切り裂き、大地を砕き分かつ。

曰く、英知を宿した白銀の獣の背に乗り、疾風の如く駆け抜ける。

曰く、人々の願いを背負い、その男は何度でも立ち上がる。

民だけでなく冒険者たちからも羨望の眼差しを向けられる彼は、今や英雄という概念そのものであった。

漆黒という鎧は、英雄という願望の寄り集まる偶像であった。

そんな彼、漆黒の英雄の名はモモン。

遠い未来、史上類を見ない万年国と呼ばれるようになるアインズ・ウール・ゴウン魔導国の歴史において、唯一魔導王に辛酸を舐めさせた傑物であり、世界崩壊を止めた英雄であり、未来永劫語り継がれるすべての生者を守り続ける剣であった。

捻じ曲がる運命

アルシエ・イーブ・リイル・フルト。

大陸西部にあるアゼルリシア山脈、その東側の領地を治めるバハルス帝国においてワーカー（汚れ仕事も請け負う冒険者のようなもの）として生計を立てている少女だ。フォーサイトと名乗る四人組のワーカーチームで魔術マジック詠唱者キャスターとしての役割を担っていた。

未だ十代後半ほどであるが、さらに年若き頃より第三位階の魔法を扱える天才である。

そんな彼女がどうしてワーカーなどという下賤な職に就いているのか———という話は一旦置いておこう。

彼女は今、まさに死の淵にあった。

始まりは帝国の貴族であるフェメル伯爵からの依頼で、未発見であった墳墓の調査を請け負ったことだった。

彼女の所属するフォーサイトの他にも三チームのワーカーが参加し、集団で墳墓の内部に潜り込んだ。初めは順調だった。目が眩むような財宝も見つかり、お金に困ってい

た彼女は大変喜んだ。

しかし事態は一変する。転移魔法によりフォーサイトの四名は墳墓内にある闘技場へといきなり移され、アインズ・ウール・ゴウンと名乗った墳墓の主と相対した。リーダーであるヘツケランは助命を乞うたが、その過程で虎の尾を踏んでしまったらしく敵対は確実なものとなってしまった。

恐るべき——化物としか言い表しようのない——力を持ったアインズの真髓を垣間見、心が折れたのだったが、チームメイトたちは自らを犠牲にして彼女を逃がしてくれた。

きつと他の三人はもう……。

受け入れ難くも諦めるしかない現実には打ちひしがれながら、それでも彼女はひたすらに逃げた。

そして——。

ナザリツク地下大墳墓第六層、森林と夜空に彩られたこの場所でアルシエは宙を駆けた。第三位階魔法〈飛行〉による飛行能力を持って森を飛び出し、精一杯夜空の彼方へと逃げてしまおうと動いたのだ。しかしその逃走劇は見えない壁によって阻まれた。

壁。壁。壁。壁。

どこを触つても、何も無いはずの夜空に見えない何か立ち塞がっていた。

肩口あたりで切られた艶やかな色の髪が揺れ、整った気品ある顔立ちが疑問と苦悶に歪む。

逃げ道がわけのわからないものに塞がれ、彼女の胸中は絶望に包まれた。

「これは一体？」

「壁よ」

鈴を転がすような声がした。誰のものか理解していたアルシエは草臥れた顔で振り返った。

そこにいたのは銀の美しさを持った少女。真紅の双眸、白蠟のような白い肌。その肌を隠すように黒いボールガウンを着ている。元貴族であるアルシエですらみたことのないような美貌に、不気味な笑みが浮かんでいた。

彼女はアルシエを逃がすまいと追って来た追跡者だ。

あの怪物が送り込んできた者だ、たとえ第三位階の使い手であるアルシエでも勝てる見込みは皆無だろう。そして完全に追いつかれてしまった。

銀の少女曰く、ここは地下だという。

何を馬鹿な、と思うがああのアインズ・ウール・ゴウンという存在を見た後ではウソではないと信じられた。

この地点で少女は悟った。

——もう自分は生きて帰ることはできない、と。

魔力を使い果たした魔法詠唱者が最後に取れる足掻きなど、一つしかない。フォーサイト最後の一人としての矜持をのせて、杖を持つ手に力をこめて銀の少女へと襲いかかった。

「はいはい、ご苦勞様」

しかし儚い抵抗も虚しく、あつさりと受け止められて捕まってしまう。

抱き合うように拘束され、美しき少女の艶めかしい吐息が首筋にあてられる。頬を熱い舌が這う。

美しかった銀の少女の顔立ちが歪んでいく。醜く、おぞましい、怪物へと。

絶望はとつくに心に暗幕を張っていた。

「あはっはっははあああっ!!」

げたげたと下品な笑い声が響く。

死にたくない。生きたい。

みんなが逃がしてくれたから。まだ、生きなくちやいけない。

チームメイトの顔が浮かぶ。残してきた二人の妹たちの顔が浮かぶ。

涙に滲んだ視界が霞み暗くなっていく。己の不甲斐なさに齒噛みして——少女の意識は逃避の夢の底へと沈んでいこうとした。

その時だった。

身体が落下する。重力に引つ張られて、だが硬く逞しい何かに抱かれながら。

夢に落ちる酩酊感とは違う。現実を起こっていることだ。

ざざざざつ、と凄まじい音がする。肌を掠める痛みから、浮力を失い空中より森の木々の枝をへし折りながら落ちていっているのだと気付いた。だが、その割には痛みが少ない。まるで、誰かに包まれ庇われているような――。

一体何が？ とゆっくり瞼をゆっくり持ち上げた。

「……………え？」

アルシエは目を疑った。

暗い森の中にあつて、さらに暗い漆黒の輝きが目に入った。

それは鎧の光沢であつた。来るはずがないと、諦めていたはずの希望だった。

「も、モモンさん……………」

「間に合つたようだな。良かった、立てるか？ 無理ならこのまま抱えたまま逃げるぞ」

威厳を湛えながらも、落ち着き払い、聞かせる者を安心させるような声。

ただ、そこにあるだけで弱き者を安堵させる大らかさを備えた英雄の姿。

漆黒の全身鎧を纏い、赤いマントをたなびかせながら漆黒のモモンがアルシエの華奢な身体を片腕で抱いていた。もう片腕には巨大なグレートソードが握られ、赤い液体が

付着していた。

「……さっきの、化物は？」

「腕を一本切り落としてやったが、あれくらいじゃ止まらんだろうな」

安堵したせいかわ、それとも疲労と魔力切れによるものか。朦朧とする意識の中で、アルシエは彼が危機から救ってくれたことを理解した。そして、彼ならばあるいは、と諦めたはずのものを思い出す。

「お願いします……他の皆が、まだ……」

「そうか。だが、もう手遅れだろう」

「そんな……でも……」

「ここから離脱する。それ以外の選択肢は、今の私たちには存在しない」

有無を言わせない力強い言葉。

面頬付き兜に覆われたその顔に、生きることを託してくれた仲間たちの影が重なって見えた。

アルシエは涙を湛えながら、コクリと頷いた。

「よし。では行く——」

「——アアアアアアアアアアアアッ!! マてええええええ!!」

おぞましい叫び声が響き、森の上空より木々をへし折り何かが飛び降りて来た。

少女——なんて言葉はもう使えない。血のように赤くなつた目が、憎々し気にこちらを睨み。艶めかしかつた口元は、バツクリと開いて細かな歯がびっしりと生え揃つていゝる。モモンガ切り落としたという腕は両方とも生えていたが、左腕の袖が不自然に短くなつていた。

おそらく吸血鬼の一種なのだろう、とアルシエは思っているが、果たしてここまで醜くなれるものなのだろうか、とも疑問に思つてしまう。

何より、アレを前にしていると恐ろしさに身が竦み、絶望に心が凍てつきそうになる。何かに縋ろうと、一番近くにあつた漆黒の籠手にしがみついてしまう。そんな彼女へ、温かい声がかかつた。

「大丈夫だ。少しここにいろ、すぐに終わらせる」

ゆっくり慮るようにアルシエの体を地に下ろし、モモンはグレートソード片手に化物へ相對する。

「援軍が来ても面倒だ、さっさとかかつてこい」

「貴様はなんでありません!? その鎧は!? パンドラズ・アクターは一体!?」

「ぱんどら? ……ああ、あのタマゴみたいな頭の奴のことか。お前の仲間だったのか、それは悪いことをした。少々不意を突いたのだが、存外素晴らしい忠誠心を見せつけたのでな。生かしてはいる」

その言葉に化物が明らかに警戒の色を強めた。

距離を測りながら、強い殺意を持って今にも襲いかからんと腰を低くしている。

十二分に身構えた、隙の無い体勢。それを見て何を思ったのかモモンは嘲笑するように鼻を鳴らした。

「来ないのか？ ではこちらから——」

彼が一步前へ踏み出そうとした瞬間、そのタイミングを狙っていたかのように化物が飛び出した。

疾風、どころか暴風だ。アルシエの目には見えないほどの速度の踏み込み。瞬時に距離を詰め、顔を覆った兜を狙った右腕が突き出された。

だが、漆黒の英雄はそれよりも速く動いた。

最小限の動きで立ち位置をずらし狙いを外させたかと思うと、すれ違いざまに両手で握った大剣を化物の胸へと叩き込んだのだ。

その衝撃だけで森全体が揺れる。人食い大鬼程度なら一〇匹まとめて両断できそうな一振り。

しかしそれでも化物の腹は割かれることなく刃を受け止め、苦悶の声を漏らしながらもなんとかその場で堪えている。

「あま、い……甘い甘い！ そんな攻撃じゃあ私は傷つかないであります！」

「そうか。ではこうしよう」

ゴウツ、と再び森が揺れる。

「うおおおおおおおおおおツツ!!」

モモンが強烈な雄叫びを上げ、一度は止まったグレートソードを握る両腕に力をこめる。

ミシツ、メシツ、と決して金属と生体が立てる音ではないものを奏でながら、化物の体が後退していく。

そして。

「——オラアツ!!!」

気合いと共に振り抜かれた大剣。それは腹を搔つ捌くにはやはり至らなかつたが、砲弾を放つたかのように化物の体を吹き飛ばした。森の木々の幹をいくつも砕きながら、その勢いは留まることを知らず。闇の彼方へと恐怖の象徴が消えていった。

「うそ……」

あまりにもあまりな力技にアルシエはそれ以外の言葉を失つてしまう。

これが英雄——人の領域を超えた先にある、語り継がれる力。

英雄譚の一端を垣間見せた男は、剣を背に戻し少女の身体を抱き上げた。

「さて、今度こそ逃げるぞ」

闇

気を失っていたようだ。アルシエが意識を取り戻した時、見たことのある墳墓の外の景色が目の前に広がっていた。

足が地になく、体を抱えられていることに気付いた。視線を上げれば、漆黒の兜があった。

「あ、あの……」

「ん？ 目を覚ましたか。ちょうどいい、墳墓を脱出したところだ」

外は薄暗い。だが微かに東から日が昇り始めている兆しがある。

どれくらいの間あの墳墓の中にいたのか、彼女にはもうわからなくなっていた。意識を張り詰め続け、地下であるのに夜空が広がるという不可思議な光景も見たせいで感覚はもうぐちゃぐちゃだ。

身体は疲労に火照り、喉も焼かれたようにカラカラ。

肌を撫でる涼やかな風も、肺に取り込んだ清々しい空気も至福に思えるほどだ。

「ありがとう………ごさいます……」

「気にするな。当然のことをしたまでだ」

当然のこと……そう言われ先ほどの地獄を思い出す。

冒険者である彼が依頼されたのは、ワーカーたちが帰ってくるベースキャンプの死守であつて、しくじった愚か者共の保護ではない。なのに彼は危機を察知し、救出に動いてくれたのだろう。

あの地獄に……人の領域など遠く及ばない化物が待ち構える居城に、だ。

例えただの気遣いだとしても、あの地獄を潜り抜けて『当然』と口にできる彼は、まさしく英雄と呼べる人物であるとアルシエは理解した。

そんな者の腕の中にと考えると、安心感で手足の力が抜けてしまう。

だらりと。いい加減目を覚ましたのだから自分の足で歩かなければならないのに。アルシエはその優しさについつい甘えてしまい、ぶらぶらと彼が走る調子に合わせて手足を揺らしていた。

そうしている内に幾つかのことが頭に浮かぶ。あまり纏まらない思考の中で、自分一人が生き残つてしまったという事実に辿り着くのは、そう時間を要さなかつた。

「……恨まないのか？」

「え？」

「私がつと早くに動けば、キミの仲間も助けられたかもしれない」

「それは……」

思わなくはない。フォーサイトの仲間たちはいいい人ばかりだった。優しくて、温かくて……大好きだった。

腰にある重みを思い出す。アルシエを逃がす際、使えと言ってお金を全て託してくれたのだ。

可能なら、皆で生きて帰りたいかった。駄目なら、皆と一緒にあの場で朽ち果てるのも悪くなかったかもしれない。残してきた二人の妹たちのことを想えば後者の考えは払拭されるが、それでも綺麗には消えてくれない。

どうしてもつと早く来てくれなかったのか……なんて風に、元気があれば泣き叫び喚いていたかもしれない。

でも、今はそんな気力も残ってはいない。

だから、甘んじようと思った。仲間たちが逃がしてくれたことに。英雄が救い出してくれたことに。

「——感謝しかありません。貴方が来てくれなければ、私を逃がしてくれた仲間たちの想いも無駄になってしまうところでしたから」

「……そうか。恨み言の一つや二つ、聞く覚悟はしていたのだが。必要なかったな」

「じゃあ、代わりに一つ聞いていいですか？」

「構わない」

「どうして、助けてくれたんですか？」

モモンは首を傾げる。先ほど答えたではないか、とでも言いたげな様子が兜越しに伝わってきた。

アルシエが聞きたいのはそんな建前ではない。

たとえ英雄でも、一切のメリツトもないことに首を突っ込んで入り込んでしまいたいだろう。だから、彼は何かをアルシエ（あるいは他の誰か）に見出したはずだ。第三者によつて救出の依頼をされたのか、救い出した者から報酬を要求するつもりなのか。それとも——まさかとは思うが、自分の身体を狙っているのか。

いくつか候補が思い浮かぶが、どれもしっくりこない。

しかしどれも『当然』という言葉よりは真実味がある気がした。

報酬を求められるなら可能な限り払うつもりだ。

求められなかったとしても、精一杯のお礼はしたい。

ただ、当然なんて言葉で片付けられると自分は何をすればいいのかわからなくなってしまう。

考え込むように押し黙るモモン。アルシエはじつと答えを待った。

やがて、彼の中で結論が出たのか両頬付き兜の中で口を開いた。

「英雄とは、そういうモノだと思ったからだ」

「……ごめんなさい。よくわからない」

「うーむ、そうだな。こんな言葉がある——」

彼が何かを言おうとした時、不意にその足が止まる。そしてゆっくりとアルシエを地に下ろした。

「走れ。キャンプ地に着いたら、荷物の撤収はせずそのまま引き上げるように冒険者に伝えろ」

「えっと、どういう……?」

「早く！ 追手が来る、私のことは気にするな！」

その背より二本の大剣が抜かれる。両腕構えるべきグレートソードを片腕にそれぞれ一本ずつ。

桁外れの怪力を持ってして剣を構え、墳墓のある方向を油断なく警戒している。

アルシエもまた同じ方向に目をやった。

そして、彼の言葉を理解した。

闇があつた。薄っぺらな、ただ、どこまでも続いていそうな漆黒の闇。

扉のような形をしていて、世界という空間を切り抜いたようなその光景はどこか神秘的で、同時に背筋の凍る寒気のようなものを感じさせる。

魔法詠唱者であるアルシエは、本能的にその闇がなんであるかを理解した。

同時、闇の奥より恐怖と死がやって来た。

白骨化した手が見えた。豪華な指輪をそれぞれの指にはめている。

次にたなびく漆黒のローブが目に入った。細やかな装飾がされ、着る者の地位を一目で理解させる。

白い骸骨と目が合った。その眼窩の奥に浮かぶ濁った炎のような赤色。

憤怒、憎悪、嫉妬、傲慢、強欲……あらゆる負の感情を湛えたその瞳は、世界を切り裂かんばかりに鋭くこちらを見据えていた。

足が震える。恐怖に心が縮こまる。呼吸すらままならない。

アルシエは知っている。目の前に現れた化物を。

「あ、アインズ……ウール・ゴウン……」

震えた声にその化物は一切の反応を示さない。彼女には興味がないらしい。

その憎悪は、すべて隣に構える漆黒の戦士へと向けられていた。

「お前がああ墳墓の首魁か？」

「貴様……」

骸骨が口を開く。そこから漏れ出した声は、底冷えするような負の感情が籠っていた。

ヘツケランが彼を謀った時も激しい怒りを見せていたが、今はあの時に比べ深く静かな怒りが見て取れた。

「逃げる」

「ダメ！ あれは人の勝てるような相手じゃない！ たとえ貴方でもアイツには――

――

「心配するな、私は英雄だ。こんな所では負けないし、キミがいたままだと撤退も選べない」

アルシエは奥歯を噛みしめた。足手まといだ、と言外に伝えられていることに気付いたのだ。

それはそうだ。彼女は英雄の領域には全く届いておらず、何より魔法詠唱者としての武器である杖も今その手にはないのだから。

たとえこの場に残っても結果は明白。

――しかしまた、今度は自分の命を救ってくれた人を残して一人で逃げるのか？

後悔にも似た感情が噴き上がり、彼女の足をその場に縫い留めてしまう。

そんな様子を見たモモンは、小さく首を横に振り声を張り上げた。

「行けッ！」

痺れるような衝撃を受け、アルシエは精神的呪縛から解き放たれた。

一も二もなくキャンプ地向かって走り出し、振り返ることも忘れ去った。

「……随分と格好良いことを言うじゃないか、盗人風情が」

「盗人？ 悪いが、私はこれでも英雄なんだ」

「黙れッ!! 漆黒の鎧を奪い取り、あまつさえ私の大切な部下を傷付けた！ 万死に値する！ 地獄など生ぬるいッ！ 生まれて来たことを後悔するような拷問にかけ、ゆっくりと朽ち果てるように殺してやるッ！」

化物が何かを喚き立てている。その言葉はきつと幾億の呪詛を含んでいるのだろうが、ただ走って逃げることにしかできないアルシエには意味が頭に入って来なかった。

あの化物を前にして自らを逃がしてくれた仲間の顔を思い出す。

その輪郭が儚くも、残酷に消えて……。

——お願い、お願いします。

アルシエは願った。いるかどうかかもわからぬ神に。

バーサス1

ナザリツク地下大墳墓の支配者——アインズ・ウール・ゴウンは怒りに震えていた。その対象は、目の前にいる漆黒の鎧を纏った何者かだ。

最初の報告があったのは、剣の訓練をナザリツクに侵入したネズミ共で行った直後だった。

部下である階層守護者統括アルベドより、切迫した声で告げられた。

曰く、パンドラズ・アクターが何者かに襲われた、と。

彼女が何を言っているのか、アインズは数秒理解できなかった。だが自らが創造した宝物庫の領域守護者である部下が襲撃を受けた、という事実には冷たいものが背に走り、報告の続きを促した。

聞こえてくる内容は、シャルティア・ブラッドフォールンが操られ離反した時以来の緊急事態。

この世界では隔絶した戦闘力を持つはずのパンドラズ・アクターが不意を突かれ、多大なダメージを負った。その際に漆黒のモモンとして活動していた鎧を奪われたようだ。援護に入ったナーベラル・ガンマも軽度のダメージを負ったが、なんとか二人とも

ナザリックへ帰還した。

部下が無事、という知らせに安堵し胸を撫で下ろすが、再び怒りが再燃し始め同時に疑問が湧いた。

——何故、モモンの鎧を？

表向きは、現在モモンは冒険者として依頼を受け墳墓内に侵入したワーカーたちの帰りを近くで待っている。

だが漆黒のモモンという英雄はナザリックが作り上げた英雄の偶像である。より正確には、アインズ自らが人間のコミュニケーションから情報を得る目的で潜り込むための変装だった。相方である美姫ナーベも、正体はナザリックの戦闘メイド・プレアデスの一人ナーベラル・ガンマだ。

いくつもの偉業を打ち立て、今やモモンたちは英雄と呼ばれるアダマンタイト級冒険者にまでなった。

だが、その英雄を襲い鎧を強奪する理由がわからない。

怨み？ 金目の犯行？ それともモモンの名声を得たいから？

どれも非効率であり、現地の者の行動としてはしつくりこない。何より不意を突いたとしてもモモン——現在は中身であるパンドラス・アクター——に勝てる者がいるとは思えなかった。

故に、考えられる可能性は一つ。

アインズと同じ、この世界で最も警戒すべき『プレイヤー』の存在だ。

そこにまで思考が至ったアインズはすぐさまアルベドに指示を出し、階層守護者を玉座の間に集めた。

すぐさま忠実な部下たちはアインズの前に集合したが、呼んだ中で一人だけ遅れているものがあった。

一人だけ慈悲をかけたネズミがいる。その処理を任せたシャルティアだった。アルベドは彼女にもちやんと連絡を取り、すぐに命令を遂行して玉座へ向かう、という返答を受けたらしい。だが、それにしても遅すぎる。

異常に気付いたアルベドが再びシャルティアに連絡を取ると、衝撃の情報が飛び込んできた。

なんと漆黒のモモンの格好をした何者かがナザリック内に侵入し、それと彼女が交戦。強烈な一撃を見舞われ、その隙に慈悲を与えたワーカーの小娘を連れて逃げた、とのこと。

彼女もまた致命には至らなかったが、それなりのダメージは受けたらしい。

これまでの情報をまとめると、何者かがモモンを襲い鎧を強奪した後、ナザリック内に侵入し偽モモンとしてワーカーを救ったということだ。そして部下たちを酷く痛め

つけた、と。

偽モモンの意味不明な行動にアインズは頭を真っ白にしながら、耐え難い怒りに震えた。

アンデッドの体になったことで得た鎮静化により、なんとか冷静さを取り戻すが、それでも狂おしいほどの怒りが何度もその身の内より生まれてくる。

「許さんツ！ アルベド、私が直々にあの糞野郎をぶちのめしに行く！ お前はナザリックの防御を固めろ！」

頭に血が上った（骨ゆえ血はないが）状態で、偽モモン以外にも同等の敵対者がいる可能性を思い浮かべられたことを褒めてもらいたいぐらいだったが、部下たちは激しく抗議した。

敵は強者——想像通り『プレイヤー』であつたならアインズも返り討ちにあう可能性がある。

その通りだが、アインズとしても相応の相手でも逃げ帰る自信はあり、何よりこれ以上部下に傷ついて欲しくなかった。それでも万が一、というのが部下たちの意見だった。

話し合いは平行線を辿り、気付けば侵入者の偽モモンは信じられないほど鮮やかに墳墓の罫や足止めのためのモンスターたちを掻い潜りもうじき脱出しようとしている。

焦ったアインズは妥協案を出した。一人だけ階層守護者を連れて行く、というものだ。

二人以上はもし他にも敵対者がいた場合、アインズ不在中にナザリックを攻め落とされる可能性が高まると判断し引かなかつた。部下たちもやつとそれで領いた。

ナザリック内を監視できるモニターを見れば、偽モモンは今ちようど墳墓から脱出したところだつた。

ベースキャンプで待つ冒険者たちに合流されると面倒だ、と判断しすぐさま〈転移門〉の魔法を発動させ、一人の部下を連れて偽モモンの前へと転移した。

そして今――。

「わからんな……」

偽モモンがくぐもつた声を響かせた。

「何がだ？」

「この鎧の持ち主は人間だと思つていた。それがあのタマゴ頭の怪物に奪われた。だから私はあのような行動を取らざるを得なかつた、と思つていたので……事態は思つたより複雑そうだ」

「貴様は一体何を言っているんだ？」

「こつちの話だ、気にしなくていい。それで、私の相手はお前一人か？」

「……いいや。気付かれているなら隠しておく意味もないか。来い、セバス」

アインズの声に従い、闇の扉よりもう一人の姿が現れる。

紳士服を着こなした白髪の老人だった。髪と同じ色の髭をたくわえ、ほりの深い顔立ちをしている。鋼の剣を思わせる出で立ちで、鋭い鷹のような目を敵対者に向けている。

「紹介しよう、ナザリック地下大墳墓の執事、セバス・チャンだ」

「ご紹介にあずかりました執事のセバスでございます」

老齢の紳士が深々と頭を下げる。だがその姿勢にあつても油断はなく、たとえ襲いかかっても切り返すように反撃を仕掛けてくるであろうことは明白だった。

「ご丁寧にも……なんなら私も自己紹介をした方が良いか？」

「そうだな、是非頼むよ。貴様は一体何者だ？」

「英雄——漆黒の英雄モモンだ」

それが火蓋を切る一言だった。

アインズが素早く高位の攻撃魔法を発動させる。骨の指より、黒い闇の波動が放たれた。
た。

「ふっぎけるなああああああ!!」

激怒に彩られた声を聞きながら偽モモンはひよいと魔法を躲す。

随分と回避に余裕がある軌道だった。いやむしろ、余裕を持たせるための攻撃だ。

あまりに鈍間な魔法が緩急をつけ、拳を構えて突撃するセバスの速度は体感倍以上に感じられるだろう。

十分な溜めを経て剛腕が振り抜かれる。岩を砕き、山をも穿ちそうな拳を今度は間一髪躲す。そのまま剣を振るい反撃に転じようとするが、間合いが悪い。セバスが相手に不利な距離を保つように超近距離戦を挑んでいるのである。肌と肌がぶつかり合うような距離ならば、拳の方が優位に立ち回れる。

その優位を活かし、小さく速い連打による攻撃で偽モモンを牽制していく。

相手の動きを封じられているのを確認し、その隙にアインズは複数の魔法を自身へかけた。その数は数十にも及ぶが、すべてが自身を強化するためのもの。彼のできる最大の付与とまではいかないが、実践においても十分な効果を発揮するだけの強化が完了した。

「セバス、退け——〈魔法最強化・重マキシマイズマジック力グランドティメイリング渦〉」

高レベルの存在にも大ダメージを与えられる漆黒の球体を投じる。

回避系の特殊技術や魔法による防御ならば対処は可能だろうが、セバスの猛攻に体勢を崩された今ならいかに戦士職といえども単純な足による回避は不可能なタイミング。さらに既知の方法によって対処してきたならば、その隙を突いてさらに手痛い魔法を叩

きこんでやる準備ができている。

ダメージは確実。

—— さあ、好きな方を選べ。

アインズは油断も慢心もなく、漆黒の球体の行方を見守り—— 驚愕した。

回避でも防御でもなく、偽モモンは迎え撃つたのだ。その両腕に握る大剣を振るい、球体を叩き斬って見せた。高火力を持ったはずの魔法は真つ二つになり霧散して消えた。

「なにッ！ ありえん！」

戦士職クラスの特殊技術スキルの中には魔法を防御するためのものが幾つかある。

だが剣で防御するでもなく、斬って無効化するようなものは存在しなかったはずだ。

装備—— それも条件的には剣限定—— による効果かとも思ったが、彼が今手に持つのはモモンとして装備していたグレートソードだ。この世界ならば特上の逸品だが、アインズたちからすればそれなり以下の装備。当然魔法を斬るなんてふざけた効果はない。

「何を驚く？ 私という英雄はこれくらいならできるといっただけの話だ」

さらりと言つてのける偽モモンは、そのまま距離を詰めるべく突進する。

主人を守るべくセバスが割って入るが、近距離戦。拳は届かず、剣撃の嵐が一方的に襲いかかった。

防戦一方——見かねてアインズが付与魔法と攻撃魔法による援護を行った。再び距離が離れる、そして突撃される。

そんなやり取りを数度繰り返し、アインズは一つの確信を得た。

——強い！

パンドラズ・アクターとシャルティア。両名を相手取ったということで想定はしていた。

だが、まさかここまでとは。

未だアインズとセバスは余力を十分に残しているが、二対一の攻防で互角。

しかも相手もこちらの出方を窺うような、余力を感じさせる立ち回りをしていた。

「チツ、ここまでやるとはな……貴様、他に仲間はあるのか？」

「漆黒のモモンには、相方の美人魔法詠唱者がいるはずなんだがな……」

皮肉か、それも混じった嘘か。

見透かすような目をアインズは持ち合わせていない。故に、攻撃を再開する。

だが如何なる魔法を放とうとも、偽モモンは軽く躲し、その大剣で切り伏せてくる。

普通にやつても駄目そうだ。虚を突き、相手を上回る立ち回りをしなければ。

戦闘用の脳内ギアを入れ替え、思考を加速させた。

激しい攻防の最中、アインズはかつての記憶を呼び起こされていた。

『プレイヤー』の中には彼よりも強い者もいた。

その中でも最も鮮烈な印象を与えて来たのは『たっち・ミー』という男だ。

全ての『プレイヤー』の中でも三指に入る強者で、ワールドチャンピオンという戦士系最強職業を持っていた。

彼はアインズが幾度も挑みたった一度の勝利もおさめられなかった者であり、アインズを救ってくれた恩人でもある。

そんな男の影が、どうしてか目の前の漆黒の鎧に重なる。

はためく赤マントは彼を真似たものであったが、それ以外は似ても似つかない。

鎧の色も、武器も、戦い方も……なのに。

——どうして、どうしてアイツと戦っているとたっち・ミーさんを思い出すんだ!?

かつての仲間の記憶。それはアンデッドとなったアインズの心を今も震わせるものだ。

この世界にいるはずがない——心の底ではそう諦めていることのはずなのに……。そして、その記憶がアインズの隙を生んだ。

「——アインズ様！」

セバスの叫び声。ハツとし、思考の渦より現実へ戻ると目前に剣を構えた漆黒が迫つ

ていた。

気付いた時にはもう遅い——大剣が振り下ろされる。

バーサス2

強烈な一撃がアインズの骨身を襲った。

「ぐおおおおおおおおおっ!!」

苦痛に思わず声を上げる。多少のダメージなら鼻で笑い飛ばせる体になったはずなのだが、それでも堪え切れないだけの大きなダメージを負った。

たたらを踏むことも許されず、咄嗟に〈飛行〉の効力で大きく後ろへ飛び退く。

なんとか距離を取り、詰められぬようにセバスがフォローに入ってくれた。

体勢を立て直し、失われた体力を魔法によって回復する。痛みによってまやかしが薄れたようだ。今セバスと剣と拳を交えているのは漆黒の戦士に他ならない。

戦闘中のため息を吐くなど御法度だが、今回ばかりは心の平穩のために必要だった。

ゴツツ、と剣と拳がぶつかり合い、弾かれるように両名が後ろへ下がった。

セバスがアインズの一步前にまで後退し、声をかけてくる。

「申し訳ございません。私がついていながら……」

「気にするな。先ほどの負傷は完全に私のミスだ。すまない、助かった」

いつもならここからもう一つ二つやり取りがあるはずなのだが、セバスも余裕がない

のだろう。

鋭く相手を見つめ、警戒心を張り詰めている。

体力も完全に回復した。アインズの魔力が少しずつ削れていること以外は振出しに戻ったと言っている。しかしこのままでは罅が明かない。本気を出すにしても、均衡を崩さなければ後手に回る可能性がある。

ならば……。

「セバス、少々強引だが奴の防御をこじ開ける。私を信用できるか？」

「何をおっしゃいます。このセバス、すべてはアインズ様のためにあるもの。たとえ使い潰されるような命令であっても、それが至高の御方の命ならば本望以外にありません」

心からの言葉。ナザリツクにいる部下たちはきつと皆同じようなことを言ってくれるだろう。

それを利用するようで罪悪感があるが、最上の信頼を寄せられているのだと考えて、アインズは次の一手の指示を出す。

「いくぞ、タイミングは私が合わせる。お前は全力で挑め」

「ハッ！」

気合いの籠った返事と共に、セバスが偽モモンに対して何度目かの突撃を行う。愚直

なほどに真つ直ぐ、カウンターを合わせて下さいといでも言わんばかりに。ただ素早く、しかし相手に気後れさせるような迫力を伴って。

そのすぐ背後をアインズが追う。まるでセバスを盾にするように。

「ふん、大した主だ……」

迎え撃つ偽モモンは嘲笑するように鼻で笑い、剣を構えた。

言わせておけ、とアインズも心中で吐き捨てる。だがもし盾になっているのがアルベドやナーベラルなら怒りを露わにしたかもしれないが、流石は落ち着いた執事であるセバス。時と場合を弁えて、冷静に戦いに挑んでくれている。

腰に溜めた拳が放たれる。モンクとしての特長技術も発動し、隙は大きいが威力が大きく向上された必殺の一撃と成った。それを見て、偽モモンも渾身の一振りで見え撃とうとしたのだろう。あからさまな大振り。

アインズの狙い通りだ。

大威力が衝突する寸前、セバスの背に向けて低位階の魔法を放つ。

「^{ブラスト}突風」

その名の通り突風が起こる。低位の風を起こし相手にダメージを与える魔法だが、セバスの持つ耐性なら軽々と弾かれ微かなダメージも与えるには至らない。しかしこの魔法には付随する効果がある。それは命中した相手を吹き飛ばす——ノックバック効

果が発生するのだ。しかもこちらの効果は抵抗されにくい。背後から直撃させればほぼないと言つてもいい。

低位故に発動が非常に早く、低魔力で扱えることからこの魔法は状況によつては高レベルな者同士の戦いでも時折使われることがあつた。

その魔法を、セバスを吹き飛ばすために使う。

狙いは前方やや上方。目論見通りセバスの体は吹き飛び、衝突するはずだった拳と剣が空を切つた。

その場に残つたのは剣を空振りして不満足な体勢の偽モモンと、次なる魔法の準備を整えたアインズだ。

凶悪な笑みを浮かべる。もちろん骸骨なので表情は動かないのだが——アインズはそんな気分だつた。

「くらえ——〈ファントム・バレット幽現の銃弾〉」

アインズの右手が銃の形を模る。そして指先から、不可視の銃弾が放たれた。

偽モモンが一瞬たじろぐのが見て取れた。この魔法の性質を知っていたか、あるいは気付いたのだろうか。放たれた不可視の銃弾は対象に命中するまで非実体である星霊界アストラル体となり、ほとんどの防御手段をすり抜ける。

大振りを外したせいで回避もままならず、反則臭い剣で魔法を斬るといふ方法も封じ

た。

だが、アインズはこれに相手が対処するところまで読んでいた。

もう一振りの大剣が、異様な輝きを纏いながら振るわれる。

ワールドプレイク
「〈次元切断〉」

たっち・みーをはじめとした最強の戦士職ワールドチャンピオンが使える超弩級最終特殊技術。

その破格の威力はあらゆる者にチートだと言わしめた。さらに付随する効果として、この攻撃はほぼすべての魔法的防御力を無効化し、星幽界体にすら届く。

最強の一撃が、不可視の銃弾に振るわれる。

目には見えないが、次元が裂かれるのと同時に、魔法の消滅を確認。

——— そうだよな。この状況に持ち込めば、貴様はその特殊技術を使わざるを得ないよな！

たっち・みーを思い出したせいで一撃貰ったが、この可能性に考えが至れたのだから幸運だった。

〈次元切断〉はその強力過ぎる威力に対しては短いが、放った直後に動けなくなる硬直時間が存在する。本当にわずかな時間だ。普通に戦っていれば隙にもならないほど短い……やっぱりバランスおかしいよな、とアインズは思いながらもほくそ笑んだ。

読み勝った。完璧に。

偽モモンは僅かな間だが動けない。対してアインズは彼が動き出すより一瞬早く、第十位階魔法〈現断〉を放てる。これは魔法の中でも最高クラスの高火力魔法。それを直撃させれば形勢は一気に傾く。

後は一気に畳みかければ――。

そこまで考えた時だった、異変が起こる。

偽モモンは硬直によつて動けないはずだった。それはこちらの世界であつても正常に機能することは、実験によつて確認していた。なのに、奴は今日の前で動いている。

大剣を振り抜いた勢いそのままに体を回転させている。

それが意味すること。

これから起こること。

アインズは知っていた。アインズの想像だけが追い付いた。

それ故に、これまでで最大の衝撃を受けた。

「馬鹿なッ!!」

「うおおおおおおおおおッ!!」

咆哮が轟く。踊るように漆黒の体は一回転し、もう一振りの剣を閃かせる。

「〈次元切断〉」

二発目——流れるような二連撃。それも最強の剣技を、だ。

状況が状況なら、おかし過ぎて笑ってしまふ者がいるかもしれない。アインズも、初めてそれを見た時は馬鹿笑いしてしまったのだから。

——直撃、だけは何とか避けなければ。

〔マキシマイズマジック
リアリテイ・スラッシュ
へ魔法最強化・現断〕

苦し紛れに放った魔法が、最強の剣とぶつかり合う。

効果は似たような一撃同士であつたが、向こうの方が上位互換だ。

当然斬り裂かれるが、それでも威力は減衰した。鋭い破壊の刃が漆黒のローブに切り込みを入れた。

「くっ……クソツ、マジかよ……」

「ほう、今のを躲すのか。必中のつもりだつたんだが、辛いな」

余裕の態度を醸し出すように、片方の大剣を肩にかける偽モモン。

対照的に、斬られた傷口を手で覆い、身を屈めながら相手を警戒するアインズ。

立ち上がったセバスと、偽モモンを挟み撃ちにする位置関係に持つて行けたが、それでもどちらが優勢化は明白だった。

「お前は……お前はなんなんだ!？」

「ん? さっつきも言っただろう、私は英雄——」

「——違う！ さっきの二連撃は俺だけが知っている！ いや、俺とたち・みーさんだけが！ どうしてお前がそのバグコンボを知っている!? ……お前は、お前は一体誰なんだ!?!」

アインズの痛々しいまでの慟哭が響く。もはや支配者としての装いも忘れ、ただ一人のモモンガという『プレイヤー』として。

彼がまだアインズ・ウール・ゴウンではなくモモンガと名乗っていた頃、彼の幸せが絶頂だった黄金時代。新戦術の実験と称してたち・みーと幾度となく模擬戦を繰り返していた。模擬戦とはいえ、モモンガは一度も勝利を掴むことはできなかったが、一度だけたち・みーをあと一步まで追い詰めたことがある。

体力には余裕があり、相打ち覚悟で至近距離から魔法をぶつければ相手の体力は確実に削りきれる。

そう判断して魔法詠唱者ながら、最強クラスの戦士相手に接近戦を挑んだ。それが間違いだった。たち・みーは迎撃に〈次元切断〉を使い、アインズは紙一重でそれを避けた。これで相手は硬直し勝利は確実、と思った瞬間に白銀の鎧を纏ったたち・みーの体が回転し、もう一振り必殺の剣を放ったのだ。

これには当時のモモンガも反応ができず、直撃を貰い逆転負けを喫した。

終わった後話を聞けば、あの二連撃は偶然見つけたバグ技だということらしい。幾つ

かの特殊技術を組み合わせることへ〈次元切断〉を連続で繰り出せる、という運営が見つければ間違いなく修正案件のバグだ。

だがその組み合わせは複雑で、何よりタイミングもシビア。

彼自身もモモンガ以外のギルドメンバーにすらその存在を知らせず、ギルド対抗戦などで窮地に陥った時に敵の意表を突くために懐へと反則剣を秘めておく、なんて言っていた。結局一度も使うことなく彼は引退し、ワールドチャンピオンの職を持つ『プレイヤー』が少ないこともあって、彼以外にあのバグを発見できた者はいないはずだった。

なのに……。

「答えろ！ お前は何者だ!? 『プレイヤー』なのか？ たっち・みーさんの知り合いか

!? それとも——」

敵の背後で構えるセバスも、たっち・みーの名前が出てきたことで動揺が隠せないようだ。

戦闘態勢を解いたりはいはしないが、主にどうすればいいのか、と視線で問うてくる。

——俺が知りたいくらいだよ。

アインズは心の中で悪態を吐きながらも、決して漆黒の鎧から目を離さなかった。

「なあ、答えろよ！」

「……………私は漆黒の英雄モモンダ」

「ふざけんな！ それはロールプレイか!? 他人のキャラ乗っ取って楽しいか!? わかったよ、もういい！ だからこれだけ教えてくれ！ たっちゃんとはどういう関係だ!?! もしかしてあの人もこっちに來てるのか!? なあ、だったら頼むよどこにいるのか教えてくれ！ 頼むからッ！」

外聞を取り繕うつもりなどなくなっていた。アンデッドの精神鎮静化も役に立たない。それ以上に早く、新たな感情が内より湧き出でるのだ。

かつての仲間の痕跡を前に、アインズの仮面は儂いくらいに脆かった。

神に懇願するように、彼は答えを待った。口元が見えなくて、漆黒の両頬付き兜がこれ以上ないくらいに恨めしく思えた。

しばらくの沈黙を経て、モモンが口を開いた。

「悪いが、そのタツチミーなる人物に心当たりはない」

「ッ——じゃあどうして！ なんて俺たちの邪魔をしに來た!?! 意味わかんねえぞ！」

「……声が聞こえたんだ。あの娘を助けてやって欲しいって。皆を救って欲しいって」

「はあ？ それは——」

「こんな言葉を知ってるか？」

まるで呪文のように、モモンは言葉を紡いだ。

「誰かが困っていたら助けるのは当たり前」

決定的だった。

まるで空間自体がひび割れたかのように、二人の時間が止まった。

アインズは力なく腕を下ろし、セバスもまた拳を解いて目を見開くしかなかった。

「私は、この言葉に従っている。この言葉こそが、英雄というものの在り方なのだ、とな」
戦意はなくなったと判断されたのか、ゆつくりと二本のグレートソードが背にしまわれる。

そしてアインズに背を向け、アルシエを逃がした方向へと歩き出した。

「失礼する。追ってくるならば好きにしろ。その時は本気で相手をしてやる」

「……待て」

「断る。ここでの役割は終えたようだからな」

「……待ってくれ」

弱々しい声にモモンは振り返ったが、一瞥しただけでまた歩み始めた。

隣を通り過ぎたセバスも、視線でその姿を追うだけに留まる。

遠くなっていく漆黒の姿。その色は真逆だというのに、アインズの目にはかつてたち・みーが自らのもとを去った時の光景と重なって見えた。

これから

もうクタクタだった。ロクに頭も回らない。労わるようにはかけられた毛布にくるまり、そのまま眠り落ちてしまうのがいい。それでもアルシエは八足馬が引く荷馬車の中から覗く背後の光景に目を離せなかった。膝を抱え、じつと地獄のような墳墓が遠ざかっているのを確認する。

追って来る人影は——見えない。

その事実にあ堵しながらも、胸を引き裂かれるような罪悪感に苛まれた。

モモンに言われベースキャンプまで戻った彼女は、言いつけ通り待っていた冒険者たちへすぐに撤退するように伝えた。元よりモモンがキャンプ地より離れる際、撤収の準備を進め、誰か一人でも戻ればすぐに移動するように指示していたらしく、冒険者たちは素早く荷馬車に乗り込み帝国への帰路へと馬を走らせた。

揺れる車内で、彼らは唯一逃げ帰ったアルシエに慰めの言葉をかけた。

それに、こく、こく、と力なく頷いた彼女は、向けられる視線にどうしようもない侮蔑の色を感じ取った。

当たり前のことか、と思った。

彼女は所詮ワーカー。真つ当な仕事など出来ず、その手を汚して利益を取る汚れ役だ。真実かどうかはさておいて、少なくとも彼らの目にはアルシエはそういうモノに映っていた。

よくあることだった。お金のためなら仕方ないと諦めていた。もう慣れたものだ、と高を括っていた。

——違ったことを、今更ながら彼女は理解する。

ヘツケラン、イミーナ、ロバーデイク……二度と会えないであろう三人の仲間たち。

アルシエはその三人に強く支えられていた。戦力面でも、精神面でも。

支えを失い、脆く決壊した何かは、無情に彼女の弱り切った心を野晒しにしていた。

膝を抱える腕に力が籠り、ぎゅつと、小さく世界の片隅にその身を置く。

「飲むか？」

ぬるい飲み物が入ったカップが差し出された。視線を向けると、冒険者チームのリーダーの男だった。金色のプレートを首から吊るし、この中では一番上手に目の色を誤魔化している人物だ。

正直いま喉に何も通したくなかった。それでも（建前とはいえ）差し伸べられた行為を無下にするのも気が引ける。

アルシエは小さく頷き、両手でカップを受けった。

すると男は少しだけ口元を綻ばせ、一緒に外の景色を眺めるように隣へ腰かけた。「何があつたんだ?」

「……化物がいた」

「まあ、そりゃあ遺跡だしそういうのもいて当然だろ? それ含めて調査するのがお前らの仕事だつたわけで」

「違う……あれは、貴方の想像しているようなものじゃなかった……」

曖昧な言葉に男は顔をしかめる。

「じゃあ何がいたんだ? まさかドラゴンとか?」

「アンデッド」

「だったらドラゴンゾンビだ! まさしく英雄が退治するような怪物だな」

軽い調子で笑う男。あの化物——アインズ・ウール・ゴウンを見ていないから楽観していられるのだろう。そのお気楽さが、少しでもフォーサイトのリーダーを思わせて、微かな苛立ちを覚えてしまう。

ふつつつと沸く見当違いの感情を飲み下すように、ぬるいカップをあおった。

その様子にアルシェの気力が多少は戻ったと思つたのか、男は、おそるおそる気を遣いながら聞いて来た。

「それで……その化物に、お前以外全員やられちゃつたのか?」

「他のチームはわからない。でも、私の仲間はそう……あの化物から、私を逃がしてくれて……」

「じゃあ、お前らを助けに行つて帰つて来ないモモンさんは？」

アルシエは首を横に振る。

あの腕に抱かれていた時、その逞しさと強さは鎧越しにも感じられた。

それでもあの化物には勝てるとは思えない。あれは、人の及ぶ領域にはいない。

彼女の反応に良くない結末を感じ取り、男は舌打ちをした。無言で立ち上がり、荷馬車内の反対側に固まっている仲間たちの方へ離れていった。

またポツリと、アルシエは一人になった。

——いや、私は一人じゃない。

アルシエには二人の妹がいる。目に入れても痛くないような妹たちだ。

彼女の家は元々貴族で、それなりに長くバハルス帝国を支えてきた。しかし皇帝が鮮血帝へと代わり、多くの貴族たちを粛正した。彼女の両親は処刑こそされなかったが、貴族としての地位を剥奪されてしまった。

それでも命だけは助かった、と肅々と生きてくれればよかつたのだが。アルシエの両親は貴族としての暮らしを忘れられず、借金までして豪勢な日々を送っている。当然彼らにお金を返すあてなどなく、その娘が魔法学院まで中退し、ワーカーに身を落とし命

懸けで稼いでいるわけだ。

いい加減、両親にはうんざりしていた。

だから今回の仕事を最後に、アルシエは二人の妹を連れ家を出るつもりだった。

仕事に出る前、その旨は妹たちに伝えていた。二人は新しい生活に胸躍らせ、アルシエの帰りを今か今かと待つているに違いない。迎えに行かなければ。そのために、仲間たちもアルシエ一人を逃がす選択をしたのだから。

辛気臭い顔を見せるわけにはいかない。迎えに行つた時、これから楽しい生活が待っているのだと思わせるように笑顔でなければ。

長く細い吐息と共に、胸の内にあつた鬱々としたものを追い出す。

拭い去れない感情は、一旦奥底へと仕舞い込むことにした。

いつまでもへこたれてはいられない。アルシエは顔を上げた。

日も昇り、地平線の上からその煌々とした姿をすべてさらけ出していた。眩しいくらいに輝かしく照らされる世界。アルシエはその景色の中に黒い点が一つ浮かんでいることに気付いた。その点は徐々に近付いている。

嫌な予感はいらない——じつと観察し、やがて彼女は歓喜に表情を輝かせた。

荷馬車より体乗り出し、見間違えでないことを確認する。その行動を訝し気に思つた冒険者のリーダーがまた彼女の隣に立ち、彼もまた破顔する。

明るく照らされた墳墓を背景に、漆黒が走つてきた。

全身鎧を纏いながら、一体どうして馬に引かれる馬車より早く走れるのか。異常な速力を見せながら、彼は荷馬車の中へ飛び乗った。

「モモンさん、よくぞご無事で！」

「ああ。追いつけて良かった」

帰還した漆黒の戦士へ男はいつそ抱き着きそうな勢いだったが、堂々とした佇まいで制す。

膝を抱えていたばかりのアルシエも彼の元へ駆け寄り、目尻に涙を浮かべた。

「モモンさん、あの——」

色々な感情が入り混じつて言葉にならない。お礼を言うべきなのか、無事を祝うべきなのか。

声は吐息になり、音を奏でない喉は無意味に口を開閉させる。そんな彼女へ、モモンは手を伸ばし目尻に浮かんだ涙を拭いた。

「可愛い顔が台無しだ。女性の涙は美しいが、あまり好きじゃない」

齒の浮くようなキザったらしい台詞だ。それでも口にする者が素晴らしければ様になるらしい。

男として惚れ込み涙を流す者もあれば、何やらメモを取っている者もいる。皆共通す

るのは、モモンを見る目により一層の憧憬の念が浮かんでいることだ。

アルシエもまた頬を朱に染めていたが、当人はそれに気付かず。彼女の頭を優しく撫で、巨大な二本の剣を壁に立てかけた。そのままモモンは崩れ落ちるように座り込んだ。大きく肩を沈めるように息を吐き、一つ天井を見上げてから両頬付き兜を脱いだ。

周囲がざわつく。それもそうだ。モモンが彼らの前で兜を脱ぐのは初めてだった。食事時でも何かにつけて同伴を避け、相棒であるナーベと二人になっていた。寝ている姿も見せず、常に油断なく全身に鎧を着て有事に身構えているのだと、皆思っていた。

一体どんな顔立ちなのかと皆興味津々に覗き込み、何とも微妙な反応が起こった。

黒髪黒目。この辺りでは珍しい特徴だが、相棒のナーベがそうであったため同じ人種ではないかと予想している者もいた。歳は渋さが刻まれ始めた頃。整っているとは言えないが、崩れているとも言えない容貌。

ちよつと冴えないおっさん、という印象を冒険者たちは受けた。

しかしその瞳は力強く、英雄の領域にある者であることを感じさせる。

「……さすがに疲れたな」

小さな声でそう漏らしたモモンの顔には疲労の色が目立ち、額には大粒の汗が浮かんでいる。びっしりだ。アルシエは荷馬車に備えられた荷物から汗を拭ける布を取り出し、彼に手渡した。

「これを使ってください」

「ありがとう。有り難く使わせてもらおう」

冒険者たちも彼を労わろうと、飲み物などを差し出し出してくる。

厚意に甘えながらも、彼は礼を忘れず振舞った。

アルシエは彼と周りが落ち着くのを待って、あの化物のことを聞いた。

モモンが帰還したということはまさかアインズ・ウール・ゴウンを倒したということなのだろうか。そんな期待を抱いていたが、彼は首を横に振った。

「痛み分け、というところだな。参った……あれは強い」

「やっぱり、モモンさんでも……」

「二対一ならばわからない。こちら奥の手は残しているが、奴も本気を見せている様子はなかった。二対一以上になればもう厳しいな。あのまま戦っていれば死んでいたかもしれない」

さらりと言つてのける彼に対して、冒険者たちは緊張を走らせる。

アダマンタイト級冒険者をもってしてそうとまで言わせるような化物。それが二体以上もいるような口ぶり。間違いなく災害に匹敵するような案件だ。知らせれば国を挙げて対策に乗り出すことだろう。

誰かが固唾を飲んだ。

ふと、アルシエに疑問が浮かんだ。

「ナーベさんはどうしたんですか？」

漆黒の一人である美姫ナーベの姿が見えない。墳墓内でアルシエを救出してくれた時にも一緒にいなかったのでベースキャンプに残してきたのかと思っていた。精神的余裕がなく今まで気付かなかったが、戻っても彼女の姿はキャンプ地に無かった。

他の冒険者たちも、モモンが墳墓に向かった後テントの中にナーベの姿がなかったことから、いつの間にか彼について行ったのだと思っていたのだが……。

まさか、と嫌な予感が浮かぶ。

だがそれをモモンは優しげな声で否定した。

「心配はいらない。彼女は無事だ、きつと元気にやっている」

「彼女が戻るのを待った方が良いですかね？」

「必要ない」

モモンは再び漆黒の兜でその顔を覆った。くぐもった声が聞こえてくる。

「最初から決まっていたことなのだろう。彼女には彼女の意思があり、選ぶべき道がある。その道が漆黒のモモンとはかけ離れてしまったに過ぎない。そういう運命だった」

見えない表情。調子をうかがわせない声色。

そこにいた者は思い思いモモンの心境を勝手に推察しただろう。

アルシエは、彼の言葉をそのまま受け入れ、決して悲しい別れではないのだろうかと思っただ。

「そういえば、名前を聞いていなかったな」

「あつ……し、失礼しました」

初顔合わせの際、モモンとワーカーチームのリーダーたちは自己紹介をしていたが、それ以外のメンバーは基本的にあまり深く交流を持たなかった。もちろん、個人的に御近付きになろうと話しかけていた者もいたが、アルシエは遠くから漆黒の鎧を眺めていただけ。むしろ美しいナーベの容姿の方に、同性として気を取られていたくらいだ。慌てて頭を下げ、改めましてと名乗る。

「アルシエ・イーブ・リイル・フルトと申します。この度は危ないところを助けていただき、ありがとうございます」

「ふむ……四つ。もしかして貴族の出身かな？」

「……はい。もう没落した家ですが」

「そうか。ではキミには生きている家族がいるか？」

「います、と首を傾げる。一体どういう目的の質問だろうか、と。」

彼女の疑問を感じ取ったモモンは、単刀直入にこれからのことを話した。

「このまま帝国へ帰還しても、家に戻ることは叶わない」

「えっ……?」

「それどころか……もしかすると、キミは二度と家族の顔を見ることができないかもしれない」

アルシエの選択

バハルス帝国にある宿屋「歌う林檎亭」に預けられたフォーサイトの貯金は相当なものだった。

メンバーとはいえ一番若いアルシエが預けていたお金をすべて引き出すことに、店主は訝しげな顔をしていたが断るわけにもいかず、渋々と硬貨が入った布袋を奥の金庫から引つ張り出してきた。それを受け取ると飛び出すように店を後にし彼女は走った。

魔法詠唱者とはいえ、ワーカーとして彼女は実力者だ。

危険な自然の中をその足で幾つも踏破して来た。当然、体力も並ではなく随分と長い距離を走り続けた。その足が帝都にある高級住宅街の傍で止まった。疲労に屈したわけではない、モモンの言葉が彼女の足をその場に縫い留めたのだ。

「二度と家族に会えない……」

墳墓から撤退した帰りの荷馬車の中でモモンは残酷な現実を彼女に突き付けた。

「……どういう、こと？」

「そのままだ。キミはもう、家族に会ってはいけない」

「ふざけないで！　いくら命の恩人でもそんなことまで指図されたくない！」

モモンに対しては失礼のないようなるべく丁寧な言葉遣いを選んできた。

しかし彼の言葉に動揺し、普段ワーカーとして使う少し険のある喋り方が出てしま
う。

「妹がいるの、こんなちつさな妹が二人！ 約束したんだ、迎えに行くつて！」

「……迎えに？」

モモンは彼女の身の回りに興味を持ったようだった。妹たちに「帰る」ではなく「迎えに行く」と約束したということに違和感を覚えたらしい。

アルシエはこんなことを話してもいいのか、と思いつつも身の上話を語った。

家が没落したこと。没落した後も両親は貴族のような暮らしを続け、良くない金貸しから多額の借金をつくったこと。それを返すためにワーカーとしてお金を稼いだこと。いい加減愛想が尽きて、妹たちを連れて家を出るつもりでいること。妹たちが彼女の帰りを待っていること。

包み隠さず全部、家の恥など知ったことかとぶちまけた。

近くで聞いていた冒険者たちの彼女を見る目が、いつの間にか同情的になっていた。

「——だから、私は絶対に迎えに行かなくちゃならない」

「……なるほど、事情はよく分かった。キミの言う通りだ」

静かに話を聞いていたモモンも、彼女の言い分を肯定した。

ならば——と思った矢先、漆黒の籠手から指が一本立てられた。

「ただ、こちらの言い分も聞いてもらいたい。その後どうするかはキミに任せよう」
「聞かせて……」

その頃にはアルシエの頭は冷えていた。冷静に物事を判断できるように。

そして漆黒の英雄が口にする予想は、アルシエの心に氷柱の楔を突き刺した。

「キミはこれから奴らに命を狙われる可能性がある」

「ッ——!?!」

「普通のモンスター相手ならあり得ないことだが、あのアインズという化物は違う。あれは人と同じように知恵が回り、人と同じく執念深い。もし寝床を侵されたことに腹を立て侵入者を排除したのなら、脱出をしてもキミを狙い続けるかもしれない」

あの化物が追い続けてくると考えると、血の気が一気に引いた。おぞましいオーラを思い出し吐き気が込み上げてくる。しかし目の前にないモノにまで、負けるわけにはいかない。

「でも、絶対とは——」

「——絶対とは限らない。しかし逆に絶対にないとも言いきれない」

「それは……だけど……」

「キミが妹二人を連れて暮らしたとする。何もなければそれでいい。だがもし、追手が

差し向けられれば奴らは間違いなくキミの大切な者を巻き込むぞ」

あの地獄を抜けてなお、眼前に理不尽な状況が広がっていることに絶望した。

もしアインズ・ウール・ゴウンの手の者が追つて来たら、アルシエには死しかありえない。その運命を回避するにはどこか遠くへ逃れるしかない——いや、もしかしたらそれでも足りないかもしれない。奴は転移魔法を使っていた。ならば世界中どこへ逃げても、その魔手は届く。

ならば見つからないように旅でもして移動し続けるか、あるいは誰の目の届かぬ僻地でひっそりと息を殺しながら暮らすしかあるまい。生きた心地のしない生活だろうが、アルシエ一人ならなんとかやっていけるかもしれない。

だが、幼い妹二人を連れてとなると不可能だ。過酷な生活に彼女たちは耐えられない。

そうなると家に置いておくか、頼れる誰かに預けるしかない。しかしその両方ともアルシエには選ぶことのできない選択肢だった。

前者は両親が心を入れ替え慎ましやかに暮らしてくればなんとかなるかもしれない。だがそうはならないだろうと、アルシエは直感している。返済が滞ればあらゆるものが押収され一家離散、幼い二人はの垂れ死ぬ。受け入れたいが、それでもまだマシだ。最悪借金のかたに売られ、最悪趣味の貴族が買い弄ぶかもしれない。

——そんなの、想像もしたくない。

齒噛みしながら後者の可能性も考えるが、ワーカーとして身を落とした彼女にそのあてはない。

魔術学院時代の伝手も、妹たちを託すには信用は足りない。魔法の師であったバハルス帝国最高の魔法使いフルーダ・パラダインならあるいは、と思ったが学院を去る際に彼には失望されたようだった。頼ることは叶わない。

「魔法の中には対象を監視するためのものもあるだろう。もしそれで、キミが妹たちと会っている時を見られれば一緒に暮らさなくても結果は同じこと。だから、会わない方が良い。大切な者を守りたいならな」

「じゃあ……じゃあ、一体どうすればいいの……？」

アルシエには、もう何もわからなかった。頭の中はぐちゃぐちゃで考えなんて纏まらない。

どうすることが最善で、何を犠牲にすれば妹たちを幸せにできるのか。

こんな時フォーサイトの仲間たちがいれば相談できたのだろう。あれやこれやと馬鹿だったり真面目だったり色んなアイディアを出してくれたに違いない。

しかし彼らはもういない。支えとなった者を失い、不安定になった彼女は、目の前の英雄に縋った。自分のすべてを委ねて楽になってしまいたいと、そんな浅はかな願望が

あった。

「言つただらう？ キミに任せる」

それを見透かしたように、返つてきたのは冷たく突き放すような言葉だった。

「も、モモンさん……」

「放つておけ、彼女が選択しなければならぬことだ」

見かねて冒険者も何か言おうとするが、正論で黙らされる。

誰も声をかけることができず、アルシエはそれからずっと一人で悩み抜いた。

そして、今に至る。

——結局、答えはまだ出ていない。

依頼の報告は冒険者やモモンが代わりに行ってくれるということ、アルシエは馬車を降りてそのまま帝都を離れる準備に駆け回った。といつても、用のある場所など少ない。精一杯頭は考えることに時間を使ったが、答えを出すには短すぎた。

意思の纏まらない宙ぶらりんのまま、最大の選択に直面した。

妹たちを連れて行くか、このまま立ち去り家に残すか。

預ける先に心当たりがない以上、彼女に残されたのはこの二択だ。そして両親に任せていても口くなことにならないのは火を見るよりも明らかだ。なのに、決められない。

アルシエは怖かった。死が——アインズ・ウール・ゴウンという化物が。

そしてそれ以上に、自分のせいで妹たちにおぞましい毒牙が向けられることが。

「どうすれば……どうすればいい……？」

夕焼けが目に染みる。もうじき夜になる。

帝国の夜空は美しいが、今はただ怖い。不意にあの骸骨が闇の奥から現れそうだから。

「……………やつぱりダメだ。連れて行くべきじゃない」

閑散とした住宅街を前に、アルシエは一人首を横に振った。それが考えた末に出た答えだった。

妹たちに不幸を強いるよりも運命の流れるままに過ぎさせた方が、きっと彼女たちは幸せになれると、そう信じることにしたのだ。

最後に約束を破ったことを謝り、顔くらい見たかったが、会わない方が良いと言われている。

英雄の言葉に従うことにした。独り善がりな願望を振り払うべく、彼女は踵を返した。

——これでいい。これ以外ない。

自分に言い聞かせる。究極的に、妹たちと一緒に暮らしたいというのは彼女一人のワガママだ。だからそれは妹たちの幸せに比べれば、優先されるべきことではない。

たとえ妹たちが自分の帰りを待っていても——本当は二人の都合など無視して、一人勝手に怯えているだけだとしても。

「これでもいい……」

そう呟いて、立ち去ろうとした瞬間だった。

ジャリ、と金属が擦れ合うような音がした。持っている袋の中の硬化同士が擦れたのだらうと思った。

彼女は今、お金の入った袋を四つ持っている。

一つは自らのもの。もう一つは宿屋で引き出したフオーサイトの仲間たちの貯金。そしてあとの二つは、墳墓で別れる時に仲間たちが託してくれたものだった。

あの時、彼女は仲間たちに逃がされた。ただ一人、幼い妹がいるからという理由で。そうでなければきつとあの場でアルシエも運命を共にしていたし、それを望んだらう。

なのに彼女は生き残った。それは、待っている妹たちに会うためだ。彼女たちを幸せにするためだ。

だというのに、顔も見せず姿を消そうというのはどういう了見だ？

これでは未来を託してくれた大切な仲間たちに顔向けができないではないか。

「はっ……はははは……」

アルシエは嗤った。自分を嘲った。

妹たちと一緒に暮らしたいというのがワガママなら、危険に晒すのが怖いというのもワガママだ。

どちらにしても同じ。彼女の意思一つで、妹たちの運命は決まる。

——なら……。

アルシエは走り出した。

どちらを選んでも一緒なら、色んな人を巻き込んで自分勝手に生きてやろうと。

死と不幸が逃れられない運命ならば、せめて自分の手の届くところで——
精一杯
足掻いてやろうと思う。

「ありがとう」

心の中で微笑む三人にアルシエは感謝した。

強く

外壁の手入れがいき届いていない館。立派でありながら庭木の剪定もできていない光景から、この館の主の先行きを想像させるものがある。アルシエはそんな我が家の玄関を開いた。

玄関から入ってすぐの大広間、そこで出迎える者はいない。

昔は少なくともメイドが一人客人を迎えるために待機していたのだが。

家族五人、仲良く暮らせていたことを思い出しながら妹たちの部屋へ早足で向かう。

そんな風に廊下を移動すれば、よく母が貴族としてはしたくない、と嗜めていた。

「……」

それもまた、昔の話だ。鮮血帝によつて、彼女の家はもう貴族ではなくなった。

現実が見えていない両親——特に父とは——遺跡探索の仕事に出る前に少しばかり揉めた。彼女なりの両親に現実を受け入れてしつかりとやり直してほしい、という願いが込められた抗議が原因だったのだが……。

「また良いものが見つかったら頼むよ——おお、アルシエ！ おかえりなさい」

「おや、これはアルシエお嬢様。ご機嫌麗しゅうございます」

玄関から妹たちの部屋に向かうまでに応接室の前を通る。

ちようど扉が開き、父とあまり見たくない顔であった男たちが出てくる。

男たちは三人いて、一人は胡散臭い媚びたような笑みを浮かべている。もう一人はでっぷりとした腹を抱え、威厳有り気な髭をたくわえた初老。そして最後の一人は、禿げあがつた頭をした筋骨隆々の用心棒然とした男。

全員、一度はこの屋敷で顔を見たことがある人間だった。何を生業にしている者かも、アルシエは知っていた。

「——なんでその人たちが？」

「ん？ ああ、先ほど素晴らしい絵画が入ったと連絡が来てね。誰かに買われてしまいう前に急いで来てもらったんだよ」

でっぷりとした髭の男が軽く頭を下げる。彼は名うての美術商だ。貴族御用達の、価値はあるが無駄にバカ高い美術品を専門に扱っている。父も懇意にしている人物で、館にある美術品の半分近くが彼の仕入れたものだった。

「ツ—— お金は!? お金はどうしたの!? そんなもの買うお金、ウチには無い！」
アルシエは憤りをなるたけ抑えながら疑問を投げかけるが、他二人がここにいる事実から気付いていた。

胡散臭い笑みの男は質の悪い金貸しで、禿げ男はその見た目通り用心棒だ。つまりま

た、性懲りもなく父は借金をつくつてなんの役にも立たない美術品を買つたのだろう。「ご安心くださいアルシエお嬢様、代金は我々が立て替えておきました。今回は金貨二〇枚となりましたので、また期日までにお支払いいただければ。はい——何の問題もございません」

人を喰つたような笑み。アルシエは金貸しの男が心底嫌いだった。

そして、娘の淡い『最後の』期待を裏切つた父も同様に——。

「……もういい」

さようななら、と心の中で告げてアルシエは父の横を抜けて廊下を走つた。

応接室の中から母のおっとりとした嗜める声が聞こえてきたが、もはや答える気も起らない。

「ちよつと待ちなさいアルシエ、話が——」

「旦那様、少しよろしいでしょうか？」

アルシエを呼び止めようとした父の前に、ひよいと現れた執事が二人の間に割つて入つた。

振り返ると彼はアルシエを一瞥し、優し気に微笑んでいた。

「ただいま」

「おかえりなさいお姉さま！」

妹たちの部屋の扉を開けた。すると向日葵のような笑顔が二つ、咲き誇った。

小さな妹たちは腰掛けていたベットから降りて、姉を出迎えようとする。それよりも早く、アルシエは二人に駆け寄り力いっぱい抱きしめた。

「お姉さまかたい」

「くるしいよ」

「ごめんね、ごめんね……ウレイ、クーデ……」

二人の温もりを確かめた瞬間、アルシエの内よりあらゆるものが溢れ出した。

それは感情であり、それは記憶であり、それは嗚咽であり、それは涙だった。

こんなに幼い二人を一度は見捨てようとした自分が、情けなくて、憎くて仕方ない。

「お姉さま泣いてるの?」

「誰かにいじめられたの?」

「ううん、違うの……私は優しい人たちに助けられたの」

もう二人の顔は見れないはずだった。そういう運命である、はずだった。

しかし今、アルシエは確かにその腕で二人の妹を抱きしめている。

——もう離すものか。

「ウレイ、クーデ、お姉ちゃんの話聞いて欲しい」

「なあに?」

「お引越しの話?」

そう、と頷きアルシエは心に秘めた決意を言葉にする。

「遠い所に行かなくちゃならない。もしかしたら世界中、色んな所を歩き回ることになるかもしれない。とつても危険で、今みたいな安全な暮らしはもうできないかも。それでもついて来て欲しい。どんなに危険でも、二人は絶対に私が守って見せる。どんなに強大な敵が現れても、もつともつと強くなつて……私が、絶対に……」

何があつても三人で生き——必ず二人を幸せにして見せる。

それが、仲間たちから託されたものへ応えるということだ。

アルシエはもう迷わない。例えモモンに否定されたとしても、鋼鉄の如き意志はここに固まった。

より一層強く華奢な身体を抱きしめる。加減を忘れた抱擁は苦しいだろうに、二人の妹は優しく姉の背中を撫でた。

「うん、お姉さまについて行く」

「私も。お姉さまと一緒に良い」

「……ありがとう。さつそく準備しないと」

抱擁を解くと、妹たちは部屋の隅に置いてあつた大きいバッグを持ち上げた。

どうやら家出の準備を整え、アルシエの帰りを待っていてくれたようだ。

「じゃあ行くこう」

「もう行くの?」

「あんまりのんびりしてられないから……今夜は馬車で寝ることになるかも。ご本読んであげる」

「やったー! 馬車! ご本!」

二人は大喜びして荷物を手に取る。しかし五歳の少女二人に、その荷物は大きすぎた。

苦笑しながらアルシエは二人の荷物を肩に下げ、手を繋いで部屋を出た。

「アルシエ、ウレイ、クーデ。その荷物は……一体どこへ行くつもりだ?」

長々と執事に捕まっていたらしい父が、怪訝な顔で問うてきた。

三人の客人たちも別れの挨拶をし損ねたせいも、まだ廊下に立っていた。

「前にも言った通り、妹たちを連れて家を出る」

「なっ——待ちなさい! あの時はお互い行き違いがあつた。だからちゃんと話そう!」

「もう決めたこと。この意志を変えるつもりはない」

父は焦燥を顔に浮かべた。それは娘の家出のためか、それとも家にお金を入れる存在がいなくなるからか。この期に及んで前者であつて欲しいと思うが、アルシエがこれか

らしていくことは変わらない。

「今までお世話になりました。お元気で——」

二人の手を引き立ち去ろうとする。だが、その行く手を阻む影があった。

「おっと、そういうわけにはいかないですよアルシエお嬢様」

金貸しの男が下卑た笑みを浮かべている。アルシエが目力をこめて睨むと、一瞬肩を縮こまらせたが、用心棒に目配せしてすぐに強気に転じ胸を張った。

「家出なんてするものじゃないですよ？　しかもそんな小さな妹さんたちまで連れてなんて」

「退いて。あなたたちは私がいなくなったら、これ以上この家からお金を搾り取れないと危惧しているだけでしょ？」

凶星だったのだろう。男は肩を竦め、鼻で笑った。

「いえいえ……まさかそんな。私にも貴女と同じくらいの歳の娘がいます——」

「聞いてない。私たちはもう行く」

「……話はちゃんと最後まで聞くものですよ？」

ニヤリ、と男が笑った瞬間、後ろに控えていた用心棒がいきなり殴りかかってきた。

その剛腕は驚くほど速く、まさか暴力まで行使してくると思っていなかったアルシエは反応できなかった。殴りつけられる——その直前、執事が割って入り彼女を庇つ

た。皺の多い顔を殴り飛ばされ、彼の体は文字通り吹き飛んだ。

「ジャイムス!!」

「な、何をするんだ!?!」

これにはさすがの父も声を上げた。しかし飄々と金貸しの男は言う。

「いやいや、これは躡ってやつですよ。家出なんて親不孝以外のなにものでもありませんから。こんなに大きくなるまで育てて貰っておきながら、お金がないから出ていくなんてねえ……酷い話じゃないですか」

「しかしだ——」

「まあ任せてください。ウチの娘も反抗期でしたけど、今では仲の良い親子ですから」

応接室から顔を出した母が、倒れた執事を見て悲鳴を上げるが構っている余裕はない。

金貸しの言葉の裏に暴力の色が見て取れる。妹たちが震え、縋るようにしがみついている。そんな二人を守るように構えながら、アルシエは焦燥に駆られていた。

先ほどの一撃。その凄まじさから用心棒の男は冒険者ならばオリハルコン級の實力を持つていると確信した。英雄の領域——アダマンタイト級には一歩及ばないながらも、オリハルコン級は超一流の實力者たちだ。

どうしてそれほど腕を持ちながら、と疑問に思うが結論は簡単だ。冒険者はおろ

か、ワーカーにすらなれないロクでなし、ということだろう。事実、執事を殴りつけた手を恍惚とした表情で男は眺めていた。

マジックキャスター
魔法詠唱者であるアルシエはワーカーとしてオリハルコンの一つ下、ミスリル級に匹敵する。そこまで大きく実力差はないが、杖もなく、守るべき妹たちを連れ、この至近距離からの開戦とあつては分が悪すぎる。

のつびきならない状況に歯噛みしながら、それでもアルシエは頭を回す。
必ず守ると誓つたのだ。挫けてなるものか、と。

だが打開策が浮かぶより早く、金貸しの男は用心棒に告げた。

「さあ、お嬢様を教育してあげなさい」

「イエス、ボス」

悪意を持った腕が伸ばされる。

「やめろ！ 一体誰の娘に手を出そうと——」

「没落貴族は黙つてろよッ！ テメエらはとつくに俺たちの養分なんだよ！」

「ひっ……」

アルシエは瞼を閉じそうになるが、心を燃やし用心棒を睨み付けた。

彼女は姉として強くあらねばならない、そう決めたのだから。

相打ち覚悟で魔法を詠唱した。きつと男の腕が届く方が早い。それでも堪えて、噛み

ついででも状況を打破するつもりだった。

だが、詠唱は途中で大気の中に混ざって消えた。その必要がなくなつたからだ。アルシエは目を見開き、突然現れた光景に啞然とした。

「——随分と良い根性をしているじゃないか」

漆黒の籠手が、用心棒の腕を掴んでいた。

籠手だけではない。その全身を包む鎧もまた漆黒。見事な意匠まで施された逸品は、この世界には一つしかない。その持ち主である英雄は、用心棒の腕を捻り上げ怯んだ隙に、アルシエたちを背に庇うよう前に立つた。

彼がどうしてここにいるのか。

そんな疑問が口に出るよりも早く、金貸しの男が叫んだ。

「な、なんだ teme だ!?!」

「ん? ただの通りすがりの英雄だが」

突然の乱入者。それがただならぬ者であると悟つた用心棒は狂つたように拳を振り回した。掠めただけでアルシエがひとたまりもなさそうな攻撃。だが漆黒の英雄は軽々と避けていく。拳句、真正面からその拳を掴んで受け止めた。

「どうした、この程度か?」

「グッ……」

「ではこちらも反撃させてもらおう。正当防衛だ、文句はないだろう?」

意味のない確認を取って、モモンは拳を掴んだまま腕を振り回した。

まるで良くしなる棒切れを振り回すかのように、凄まじい怪力で。用心棒はなすすべもなく弄ばれ、そして叩きつけられるように投げられた。その巨軀は廊下の壁にぶつかり、破壊し、その向こう側にある応接室の中を無茶苦茶にした。

客人を迎える部屋だけあって、数々の調度品や美術品が飾られていたが、それらも巻き込まれ酷い有様だ。損失額で言えばとんでもない桁になるだろう。「ああ!」と情けない声を上げた父など気にも留めず、モモンは破壊した壁から応接室に入り、内装を見回した。

「娘の稼いだ金で飾っていたいい部屋だ、まったく……」

「あ………がっ………」

用心棒が呻きながら床に寝そべっている。

モモンはその胸倉を掴むと、片腕で男一人を吊り上げた。

「私は英雄だね。弱い者いじめは好きじゃないが、女子供に手を挙げるような輩はとても嫌いなんだ。つい手加減を忘れてしまうくらいにな………わかるだろう?」

「ず、ずびばせん………でじだ………」

用心棒は涙を浮かべながら、上手く呂律の回らない口で許しを請うた。

それで十分と判断したのだろう。ゆっくりと体を下ろしてやり、労わるように寝かせてやった。そして壁に空いた穴から信じられないモノを見るような目で様子をうかがう金貸しの男へ、ゆっくりと視線を向ける。

その際、首からかけられた冒険者のプレートが夕焼けの光に閃いた。圧倒的強者の証明を見つけた金貸しの男が息を呑む。

「あ、アダマンタイト級冒険者……」

「狂犬への躰もすんだ。あとは、けしかけた飼い主の方だが……」

「まつ、待つてくれ！ 悪かった、謝る。すぐにここから——」

「二度とここへ顔を出すな。意味は、わかるな？」

「もちろんです！ ですがあ……あのお、そのお……この家に貸したものもありましてです……」

媚びへつらうような笑みを浮かべながら、揉み手を組む男。

だが次にモモンが発した言葉に、その笑顔は凍り付く。

「借金を無かったことにしろ、なんて酷いことは言わないさ。ちようどお前さんが飼っていた狂犬のせいで色々壊れてしまったところだ。その弁償で相殺、という形にしようじゃないか」

「えつとお……いやあ、それはさすがに……」

「どうせ不当な利息を付けてこの娘から金を奪り取っていたんだろう？」

返ってくる言葉はない。悔しそうな呻き声だけが、静かに響く。

「失せろ」

その言葉に金貸しは肩を震わせ、借入書を投げ捨てると用心棒を引きずり館を後にした。残されたのはこの館の住人と、漆黒の鎧を纏った偉丈夫だけ。

激動の光景を目の当たりにし放心している父と母を他所に、アルシエはモモンの傍へと歩み寄った。

「どうして……」

「誰かが困っていたら助けるのは当たり前、だからな」

両頬付き兜の奥で、微笑んだ気配があつた。

「もしかして、私を試したんですか？」

「まさか。キミなら妹さんたちを連れて行くことを選ぶと、事情を聞いた時から確信していた」

「じゃあもつと早くに助けてくれても……」

「人には自らの力で解決しなければならぬこともある。キミの妹さんの件はそれだ」

確かに、と納得する。もしあの時モモンが力を貸す、と言っていたらアルシエはここまで覚悟を決めることはできなかつただろう。中途半端な感情で、仲間たちの想いに応

えるのは嫌だ。だから今は、悩み抜いて良かったと胸を張って言える。

「それにしても、随分手荒いことをするんですね。イメージ変わりました」

「英雄とは野蛮な一面もある。そういうのは嫌いか？」

「正直、苦手です。でも——」

アルシエはじつとモモンの顔を見つめる。

その表情は柔らかな微笑が浮かんでいた。

「——モモンさんのことは嫌いじゃありません。助けてくれて、ありがとうございます。ごまかせません」

「やはりキミは涙を浮かべるより、笑顔の方が良いな」

妹たちが、恐る恐ると近付いて来る。モモンを警戒しているのか、姉の影に隠れるようにくつついてまじまじと彼を見上げている。

「お姉さま、この人だれ？」

「いい人なの？ わるい人なの？」

「この方は、私を助けてくれた英雄様。とっても強くて、優しい人だから安心して」
アルシエがそう言うのと、二人は目を輝かせた。

「えいゆう!!? ご本のお話みたい!!? すごい、すごい!」

「お姉さまをたすけてくれて、ありがとうございます!」

「えいゆうさまがお姉さまをたすけてくれたの？　じゃあ、お姉さまがお姫さま？」

「そつかー。じゃあ二人はこのあと幸せに暮らすんだね」

「えっ、ちよっ……二人とも何言ってるの!？」

妹たちの爆弾発言にアルシエは顔を真っ赤にし慌てふためく。

それが面白いのか二人は笑い、モモンも兜の中でクスリと笑いを零した。

「それでは私は失礼しよう……お膳立てはした。後はキミが好きにするといい」

「何から何まで……本当にありがとうございます」

「当然のことをしたままでさ」

モモンはこの場を立ち去った。父と母は漆黒の後姿を見送り、固まっていた。

アルシエは応接室を見回す。酷い有様だが、これがモモンの差し伸べた救いの手だと彼女は理解できていた。

かなり強引な破壊と脅迫によってフルツ家の借金は帳消しにされた。これで父と母は振出しに戻り、もう一度これからどうやって生きていくか選ぶことができるだろう。

もし現実を見て貴族でなくなったことを受け入れるのなら、館の全てを売り払い多少の元手を持つて新たな生活に臨める。だが貴族の生活を忘れられず、まだこの館に拘るのなら、同じことを繰り返すだけだ。

アルシエすらも諦めていた両親への救済を、モモンは希望の糸を一本分残してくれた

のだ。その糸を掴むかどうかは父と母次第——しかし娘として、最後に伝えたいことがあった。

妹たちの手を引き、二人の前へ立つ。

「お父さん、お母さん……」

「アルシエ……」

「私は、二人に生きていて欲しい。貴族としてじゃなくても、お父さんとお母さんとして生きてて欲しい」

「私たちは……」

「もしかすると顔を合わせるのはこれで最後かもしれない。だから、これが娘として最後の言葉」

幼くても家族の放つ雰囲気を感じ取れるのだろう。妹たちは悲しげな顔をして、両親とアルシエの顔を交互に見やる。アルシエはそんな二人を安心させるように微笑んで「行こう」と言った。

手を繋ぎ三人で、館を後にする。

その背中に言葉がかけられた。

——いつてらっしゃい。

玄関に、いつの間にか立ち上がっていた執事が待っていた。顔を腫らしながらも、彼

女たち出発を祝うように笑みを湛えている。

アルシエは使用人たちの退職金の入った袋を彼に渡す。深々と頭を下げられるのもこれで最後だろう。

「お嬢様、お元気で」

「貴方も体に気を付けて」

「ありがとうございます。さて、待たせ過ぎるのも良くないでしょうからお早めに」

待たせる？ 誰を？ と首を傾げたがその答えは扉を開けたすぐそこにあつた。

「モモンさん……？」

「さて、行こうか。馬車の手配はしておいた」

「えっ、どこへですか？」

「ナザリツク地下大墳墓に最も近い都市——エ・ランテルだ」

エ・ランテルにて

リ・エステイーゼ王国、バハルス帝国、スレイン法国。

その三つの隣国が接する点にほど近い立地に城塞都市エ・ランテルが存在する。城塞と名の付くだけあって立派な城壁が三重に都市を囲っている。外周は軍事関係、最内部は行政関係が区画を管理している。その中間にある『街』と呼べる光景が広がる市民のエリアにはいつでも活気が溢れている。

特に商店などが集中する広場には、店主の客引きの声が響き、主婦が根切の交渉に唸り声を上げ、肉汁滴る串焼きの焼ける音臭いが立ち込め、騒ぎを起こした馬鹿野郎が、衛兵に見つかって雑多人ゴミの中へ潜り込んでいた。

今日も今日とて、エ・ランテルは平常運転だった。

「……昨日とはまた違う騒がしさ」

ぽつり、と帝国出身の少女であるアルシエが呟いた。その声も喧騒の前にすぐかき消される。

その騒ぎっぷりに帝都で送った日々を思い出し、懐かしむ。まだ離れて数日だが、かの漆黒の英雄と行動を共にするようになってからの濃密な時間は、彼女の感覚を色々と

狂わせてくれた。

「モモンさん、まだだろうか……」

最も人が集まる中央広場。そこから細い路地に入ったところにある喫茶店で彼女は一人だった。

連れ合いに漆黒の鎧を纏った偉丈夫も、幼い妹たち二人もいない。

正直、心細さを感じていた。寂しさなど微塵もない街ではあるが、彼女にとつては関係がない。何せこのエ・ランテルは、アルシエが地獄を見たナザリック地下大墳墓に最も近い都市。アインズ・ウール・ゴウンの魔手がいつ伸びてきてもおかしくない化物の懐だ。

モモンが「大丈夫だ、何かあっても私が守ろう」などと勇ましく宣言するものだから信じてついて来たが、彼が傍にいないのでは裸で大森林に投げ出されたも同じ。喫茶店の扉が開閉する時になるベルの音にすら、過敏な反応をしてしまう始末。普段、表情をあまり出さない彼女ではあるが、この時ばかりは年相応の少女のように不安げな顔を浮かべていた。

——ああ、心細い。早く来て欲しい……。

ただ一人で英雄の迎えを待つ。

それはさながら魔王の城に囚われ、勇者を待つ姫君のような……などと夢見がちなこ

とを考えたところで、アルシエは現実に戻つて来る。

帝国からここへ移動する馬車の中で妹たちに幾つも絵本を読み聞かせたせいだろうか。

現実逃避する際に思考がそつち側へと寄つていく傾向にあつた。

なまじ物語に出てくる英雄じみた人物が傍にいるせいで、ふとした拍子に恥ずかしさに顔が赤くなる。妹たちも無邪気にそのことを指摘してきて……勘弁してもらいたい。

頼んだ飲み物をちようど飲み終えた頃、扉が開く音がした。

ビクリ、と肩を揺らしながら視線を動かすと、落ち着いた雰囲気店内に似合わない男が入ってきた。

カップを磨いていた店主も、彼の入店に驚き——そして少し喜んでるようだ。

アルシエは安堵の息を吐き、表情を少し明かるくする。

「待たせてしまったな」

「いえ、ちようどいい頃合いです」

アダマントイト級冒険者、漆黒のモモンが申し訳なきように両頬付き兜の頭を手で搔いた。

表情の伝わらない兜を被っているが故の仕草なのだろうが、なんだか可笑しく思える。

街の中なのだから兜くらい脱げばいいのに、と思うが——。

「街中でも滅多に兜を脱がないのが、漆黒のモモンという存在らしい」

——と、わけのわからない返答を昨日寄越されたばかりだ。

まあ、彼がそれでいいのならアルシエがあれこれ言うのはお門違いだ。

些細な疑問など忘れて、二人で店を後にする。

なるべく人目を引く大通りを避けるが、それでもモモンの隣を歩くと目立った。

すれ違う者はまず漆黒の鎧に尊敬の目を向け、そして次に隣を歩くアルシエの顔を見て首を傾げるのだ。

それもそのはずである。エ・ランテルはモモン率いる（と言っても二人組であるが）冒険者チーム漆黒の活動拠点であり、どこよりも彼の偉業が響いている。もはやこの都市で彼のことを知らぬ者はおらず、吟遊詩人たちが歌う内容も彼のものばかり——噂に聞くと、そればかり過ぎていい加減飽きたと客に文句を言われているほどだとか。

誰もが彼に英雄としての憧れを抱き、尊敬の念を湛えている。

そして、彼の相方であった美姫ナーベにおいても同じようなものだった。だから、この地の者にはモモンの隣をナーベ以外の女性が歩く光景がよほど奇異に映るらしい。

「……やっぱり私じゃ釣り合いませんね」

「私が誘い、キミが頷いた。それ以上でもそれ以下でもないさ」

「それにしたって……どうして私なんですか？」

「漆黒のモモンの隣には美人の魔法詠唱者マジックキャスターがいるものだからな」

美人、と言われて顔がまた赤くなる。

平然と息を吐くように女をたらしこむようなことを口にするモモンは天然なのかもしれない。

そんなことを頭の片隅で考えながら、顔を隠すように下を向き、アルシエはバッグから昨日貰ったプレートを取り出しネックレスのように首からかけた。

希少な金属でつくられた、アダマントタイトのプレート。これは冒険者のランクを示すものであり、この都市でアダマントタイトのプレートを持つ冒険者チームは一つしかない。

つまりアルシエはワーカーから冒険者へと鞍替えをした。

それも最高ランク——英雄と謳われるアダマントタイト級の冒険者へと。

「すまなかった。自分の行動がどれほど騒ぎを起こすのか思慮に欠けていた」

「いえ、これからモモンさんの隣を歩いて行くんですから。あれくらいなんでもない」

昨日のこと、この都市は漆黒のモモンを中心にして騒然となった。

その理由の一つが美姫ナーベの脱退と、新たな少女の加入だ。

エ・ランテルの冒険者組合の長であるプルトン・アインザックを交え手続きを行った

のだが、処理を終えて組合長の部屋から出た時には何故か噂が街中に広がっており、組合の建物内は人でごった返していた。

アルシエは不躰に取り囲まれ、ほとんど見世物状態。挙句「ナーベの方が美人」だとか「随分とちんちくりん」だとか、「モモンさんはそういう趣味もあるのか……」などと好き放題言われ、一晩経った今でも心に凹んだ跡が残っている。

そんなこともあって、今日はあまり目立たないよう大通りなどにモモンが用事のある時は、近くで一人待機する羽目になったのだった。

「それで、挨拶回りはもう終わったんですか？」

「ああ。冒険者、魔術師の組合長に鼻屑にしていた商人の方々。都市長のパナソレイ氏にも告げて来た。本当なら昨晚の内に済ませたかったのだが……まあこれで、夕方には出発できるだろう」

「仕方ありません。あんなことがあつたんですから、モモンさんがすぐにいなくなつてしまつたら、きつとこの都市の人々は混乱してしまう」

渋々と納得するモモン。その隣でアルシエは目を伏せた。

彼を困らせまいと隠してはいるが、エ・ランテルを発つことに思うところがあつた。

「不安か？」

「違うと言えば、ウソになります……」

「奴まで此処に現れてたのは私にとつても想定外だった。しかしアインズ・ウール・ゴウンに対し、キミの妹たちを預け隠すのなら現状エ・ランテル以上に有効な条件の揃った場所はない」

アルシエの実家——フルト家の抱える問題を一応は解決した後、モモンはアルシエたち三人をエ・ランテル行き馬車に同乗させた。理由を聞けば、彼女たちがこれからのような身の振り方をしていくべきか、提案があるというのだ。その提案を受けるにしても、拒絶するにしても三国に隣接するエ・ランテルまで移動するに越したことはない。だから連れて行くのだ、と彼は説明してくれた。

恩着せがましきでない、まるで当然のことのように語る。

この人物が英雄と呼ばれるに相応しい人格者であることを思い出し、アルシエは申し訳なさと何やら言葉にし難い感情を抱きつつ、提案を聞いた。

揺れる馬車の中。

流れゆく外の景色に目を輝かせている妹たちと、少し緊張した面持ちのアルシエ。

三人のある意味微笑ましい様子を確認し、モモンは二本の指を上げた。

一つ目は、エ・ランテルにいるモモンが信頼を置けると判断した人物に三人を匿ってもらうこと。

二つ目は、妹二人だけを預け、アルシエはエ・ランテルからアインズたちの目を逸ら

すために旅に出ること。

前者の提案は姉妹が三人一緒にいることができず、万が一にもアルシエがナザリツクの手の者に見つかれば妹たちも間違ひなく巻き込まれてしまう。

後者ならば離れ離れになってしまうが、妹たちとの関係を悟られないように工夫すれば二人の安全は確保できる。

「キミが私と関りがあると思われる以上、連中は私の動向を追うだろう。事実、そのような魔法の気配や刺客があつたが——これらはすべて斬り捨てておいたから今はいいだろう。この状況で連中に怪しまれることなく、自然な形を装いながらキミたちの安全確保ができるのがエ・ランテルだ」

曰く、漆黒が活動拠点とする場所ゆえ、彼がこの都市に向かうことに疑問は持たれない。また、わざわざ敵陣に最も近い場所に宝を隠すと考える者もないだろう。

だがあまりぐずぐずもしては行動しない。いつ監視の目がまた追いつくかもわからない以上、馬車の旅が終わればすぐに行動することになる。

「くどいようだが、キミたちの好きにするといひ」

そしてまた、重要な選択肢がアルシエの前に投げられた。

いい加減精神をすり減らすような考え事には辟易していたのだが、彼が促す通りこの問題はアルシエと二人の妹で答えを出すべきことだ。

だからまず、彼女はゆっくり一晩考えることにした。珍しい環境で興奮し、寝つきの悪い二人に延々と本を読んでやる。

どうなるの？ どうなるの？ と続きを促してくる声が愛おしい。

気付けば寝静まり無邪気な寝顔を並べる二人を眺めて、アルシエは決めた。

二人をエ・ランテルで預ける。そして自分は旅に出ることを。

そのことを妹たちに話した。当然、反対された。約束を守れ、と泣かれた。

アルシエはまた謝罪を口にしながら彼女を抱きしめ、ゆっくりと説得するしかないと考えていたのだが。

「また三人で暮らせる日がきつと来る。いや、この漆黒の英雄モモンが連れてくる。だからお願いだ——キミたちのお姉さんを信じてやってほしい」

英雄の言葉というのは、幼心にも深く響くらしい。

穏やかで暖かな声に妹たちは、しばし沈黙した後頷いた。納得はしきれていないのだろうが、それがきつと一番いいことなのだど理解できたらしい。

「ぜったいだよ？ 約束だよ？」

「ぜったい、お姉さまを守ってね……」

「もちろんだ。まかせてくれ」

子供相手でも真摯な態度で挑む彼に、アルシエは何も口を挟むことはなかった。

代わりに、彼から提案があつたのだ。

——どこかへ行く目途がないのなら一緒に組まないか、と。

後はとんとん拍子に話が進んだ。妹たちの姿を誰にも見られないよう運び、冒険者組合長と会つた。そこで漆黒のチームメンバー交代の手続きを行い、同時に妹たちを彼に預けたのだ。

組合長は最初訝しげな顔をしていたが、モモンの「これは貸しと思つてくれ」という発言に飛びつくように、二人の安全に匿うことを約束してくれた。

「ウレイ、クーデ……いい子だね。迷惑かけちゃダメだから」

「はい、お姉さま……お元気で」

「……もう行つちやうの?」

「うん……必ず迎えに来るから。その時は今度こそ三人で一緒に暮らそう」

姉妹たちはその場でしばしの別れの挨拶を済ませた。最後にぎゅつと二人を抱きしめてアルシエは微笑んだ。名残惜しさに後ろ髪引かれながらも、その晩のうちにエ・ラントルを出るつもりだった。アインズ・ウール・ゴウンの手が伸びてくる前に移動しなければならぬ。

だが、その予定は延期された。

空が暗くなり、中央広場も活気の熱が下火になつた頃——あの化物ともまた違う存在

が降り立った。

昨日、モモンを中心に都市は騒然となった。

それはナーベとアルシエの件だけではない。

—— 奴は彼に用があつたのだ。

星々が輝く夜の帳に、炎の塊が瞬いた。

誰もが頭上を見上げ、恐怖にわななく。

炎が羽衣のようにはためき、消えた。その内より人影が現れた。

いや、アレは人などではない。証拠に奴はその背より禍々しい翼を生やし、羽ばたか

せて飛んでいるのだから。

王国民ならその出で立ちには耳に新しいだろう—— 奇妙な仮面を着けた悪魔の存在は。

「お久しぶりですモモンさん。まさかこんなところでお会いできるとは」

「ヤルダバオト……」

魔王ヤルダバオト。王都を襲った悲劇の首謀者。

かつて英雄モモンによって撃退された至上最悪の悪魔だった。

招待状

仮面の悪魔は優雅に広場へと降り立った。

翼を折り畳み体内へ収めると、その姿は一層人に近くなる。彼が纏う衣服はこの辺りでは見ないスーツと呼ばれるもので、南方の国で着用されているらしい。王国民には奇異な出で立ちに思えるが、不思議と貴族のような気品を漂わせていた——しかし、臀部辺りから生えた尻尾と禍々し過ぎるオーラが全てを台無しにする。

民衆は薄々感じ取っていた。

王都で起こった悲劇を知らなければ、きつと気付かなかったであろうが、その悪魔は王国にて有名になり過ぎた。それこそ、いま奴が対峙している英雄と同じくらい。いや、仮面の悪魔こそが漆黒の名を英雄にまで押し上げ、仕立て上げたと言っても良い。「ヤルダバオト……のこのこ私の前に現れるとは、今度はどんな悪だくみをしている?」「おやおや、失礼ですね。私はたまたま、偶然、空を散歩をしていたらモモンさんを見かけて声をかけただけですよ」

「見え透いた嘘はいい、殺し合いをしたいのならそう言え。受けてたとう」

「クク……貴方も大概でしょう。こんな場所で、私と戦う? 貴方が? 下手な冗談だ」

モモンは背中より二本のグレートソードを抜き払うが、ヤルダバオトはそれすら嘲り笑う。

周囲の大気が痺れるように震える。英雄譚に語られる両雄が再び相見え、刃の如く鋭い殺気をぶつけ合っている。下等なモンスターであればこの空間に在るだけで恐怖に震え、尻尾を巻いて逃げ出すだろう。だからこそ、逃げ出しもせず少し離れた場所で見物しようとする愚かな人間という種を、仮面の悪魔は心底見下した。

「愚かしい……そうは思いませんか？」

「見解の相違だな。私は案外、野次馬根性というものも嫌いではない」

「それは残念です。やはり貴方と私は相容れない存在なのでしょう」

「わかりきったことを」

「こういう確認一つ一つが、相手を知る上で重要なのですよ」

仮面の奥で、悪魔が狡猾に笑う気配がある。

モモンは片方の剣を石畳みに突き立て、柄に肘をかけながら気怠そうに話を促した。

「私はモモンさんのことが気になっていのです。知りたくてたまらない」

「……正直、寒気がするんだが」

「それは僥倖。モモンさん、貴方は一体何者のですか？ そのふざけた力は一体？

どこからやって来て、どんな生活を送ってきたのか？ 恋人は、家族は、大切な人は？

どうして戦うのです？ どうしてもっとその力を私欲のために振るわない？ 貴方は今、何を考えているのでしょうか？ どうか一つ、教えてくれませんか？」

捲し立てるように疑問が並べられる。

矢面に立つモモンはしばらくの沈黙の後、鼻で笑うように肩を揺らした。

そして、もう一本の剣を持ち上げその切っ先を対峙する悪魔の仮面へと向けた。

「私からお前への返答に、この劍コイツ以外のものが必要か？」

「——御尤もでございます」

ゴウツ！ と凄まじい衝撃が周囲を蹂躪する。それは殺気や気合いという曖昧なものではなく、確かな破壊を伴っていた。

モモンが地面へ突き立てた劍に力を込めたのだ。それだけで歪が起こり、広場の石畳はひび割れ砕け巨大なクモの巣のような模様を広げていく。

突然の破壊に周囲から悲鳴が上がる。そこでやっと野次馬たちは現状の危機を微妙に感じ取ったらしい。

ちらほらと、逃げる人影あり。されど未だ無駄な根性を発揮する者もあり——モモンは叫んだ。

「アルシエー！」

「ッ——はいー！」

「一人でも多くこの広場から逃がせ！ 今からここは地獄に変わるぞ！」

突如名を呼ばれ、漆黒の鎧の背後に隠れていた少女の意識が浮かび上がる。

彼女は仮面の悪魔に、かつて見た最悪の化物——アインズ・ウール・ゴウンと同じ隔絶した力を感じ取り竦み上がっていた。そこへ英雄の喝が入り、すぐさま状況の理解に動き出す。そしてこの広場には未だモモンにとって好ましくない状態にあることを悟る。

——地獄に変わる。

その未来を想像し、背筋に冷たいものが走った。

「皆！ 逃げてッ！ ここは危な——」

役割を理解したアルシエの声を遮るように、轟音が響き渡る。

モモンが一息に距離を詰め、ヤルダバオトに斬りかかったのだ。上段からの振り下ろし。力任せの一撃であったが、その尋常ならざる臂力から放たれる剣激は奇跡すら肉眼で捉えさせない神速。ヤルダバオトはこれに対応し、巨大に膨らませた腕で防ぐがそれでも抑え込まれ、圧し潰されそうになっている。

「早くしろ！ コイツをいつまで抑え込めんでいられるかわからん！」

「グッ……さすがはモモンさん。正面からの力勝負では勝ち目はありませんね。なら——

——悪魔の諸相：触腕の翼」

仮面の奥に浮かぶ悪魔の微笑。狡猾で悪辣な策を思いついたのだろう。

次の瞬間、ヤルダバオトの背中より新たな翼が生え出でる。異様に長く平たい触手のようなものが羽根として寄り集まってつくられた奇怪な翼。

それがどのような能力を有するのかアルシエには見当もつかなかったが、モモン勘付いたのか、あるいは以前戦った時に見たのか、即座に動いた。

ヤルダバオトを蹴りを叩き込み吹き飛ばすと、距離をとって剣を構える。彼が立つ場所は、背後にいる逃げ惑う人々や腰を抜かして動けなくなつた者を庇い、守る位置。

重厚な剣圧から解放されたヤルダバオトは大仰に両腕と翼を広げると——平たい羽根が無数に射出されたが如く伸び前方へ襲いかかった。アルシエはその羽根一本が、人を容易く死に至らしめる威力を秘めていることを察した。

力なき少女は目を瞑り、身構えてしまう。
だが悲劇は起こらない。

モモンが迎え撃ち、雷雨の如く苛烈に剣を振るいことごとくを切り伏せていく。
地面へ舞い落ちる触手の残骸はテラテラとした光沢を持ち、気味の悪い美しさがあ

る。
「おや？　モモンさん、確か貴方の相棒は美姫ナーベのはず。彼女はどうしたのですか？」

「彼女とはチームを解散した」

「なるほど。それで彼女の代わりにその小娘を、と……しかし貴方の相棒としては随分情けないですね。英雄たるもの傍に侍らせる者も選ばないといけませんよ。漆黒の名声は貴方一人のものではないのですから」

まるで本当にモモンのことを憂いているかのように首を横に振る仕草をする悪魔。アルシエ自身も気にしていることを的確に抉ってくる。モモンはそれを、くだらない、と吐き捨てた。

「それはお前の決めることじゃない」

「確かに、謝罪しましょう。そして油断し過ぎではないでしょうか？」

再び羽根が伸びる。当たり前のようにモモンはそれを容易く防ぐが——一本だけ、ヤルダバオトの前方ではなく右方に伸びていた。その先には、逃げ遅れた子供の姿。混乱に泣き喚くしかない非力な存在。その喉元へと凶悪なほど鋭利な触手の羽根が届く、その瞬間。

「——お前こそ油断しているんじゃないか。私の相棒を舐め過ぎだ」

羽根が弾かれる。代わりに第三位階魔法によって生み出された防壁がたった一撃でひび割れ、砕けた。しかしヤルダバオトの一撃から子供を守ることには成功した。

アルシエは次の魔法を準備しながら、子供のもとへと走る。

横目でその姿を確認し苛立たし気な雰囲気醸す仮面の悪魔へ、モモンが再び斬りかかった。

「人間ごときに防がれるとは思っていなかったか？」

「……本当に目障りな人だ、貴方は。悪魔の諸相：鋭利な断爪」

鋭利に伸びた爪でグレートソードを受け止めるヤルダバオト。

そのまま至近距離の攻防にもつれ込む。

狡猾な悪魔に対して余計な事をさせない、という立ち回りを要求されるモモンであるが単純な接近戦なら彼に軍配が上がる。おかげで十分な時間ヤルダバオトを抑え込んでいられた。

周囲から野次馬は消え失せた。途中、冒険者ギルドから出て来た冒険者が加勢しようとして近寄ってきたりもしたが、アルシエが魔法を使って追い払った。

もうこの広場に残ったのは対峙するモモン、ヤルダバオトとアルシエだけだ。

「まさか、ここまで完全に抑え込まれるとは……忌々しいほどに強いですね」

「最高の誉め言葉だ。アルシエ、キミもここから離れる」

「はい、どうかご無事で」

寒々しい夜風が吹きすさぶ。赤いマントがはためき、スーツの裾が揺れる。

睨み合いが続き、静寂が延々と引き伸ばされていた。

「……こうしていると思ひ出します」

「何がだ？」

「王都にて、英雄モモンと大悪魔ヤルダバオトが激突したあの時ですよ」

「楽しかった一時に想いを馳せるような穏やかな口調で、悪魔は語る。

「あの時、私は満ち足りていました。正直、肉体を使った争いというのは得意分野ではないので乗り気ではなかったのですが……相手が良かったのでしようね。モモンとの激戦は私の心を震わせた。私という存在の意義を、戦いの中に感じ取ることができたのです」

「つまり、私がお前を戦闘狂にしてみましたと？」

「違います、自惚れないでください。反吐が出そうだ……」

「モモンはヤルダバオトから激しい憤怒の感情を見て取る。

「その見てくれと同じく、内側にも仮面を被っていたらしい。」

「まあ、いいでしょう。それよりもモモンさん、あの時交わした約束を憶えていらつしやいますか？」

「……さてな」

「酷い人だ。王都から手を引く代わりに私の仲間となると誓ったでしょう？」

再び、沈黙。

ヤルダバオトは、嗤った。

「冗談です、悪魔流のウィットに富んだジョークですよ」

「面白味の欠片もないな。ではそろそろ始めようか?」

「いえ、この辺りで引かせていただきます。今回は貴方を倒しに来たわけでもありませんので」

「なら何の用だ?」

剣を地面に突き刺し、首を傾げるモモンにヤルダバオトは一枚の紙切れを投げて寄越した。

空いた手でキャッチしてそこに書かれた文字を見てみれば――。

「招待状?」

「ええ。パーティーを開こうと企画しております」

ヤルダバオトは深々と頭を下げ、客人を迎えるような態度で告げた。

「場所はローブル聖王国。時期は準備が整い次第、風にのせてお知らせしましょう」

「ロクでもない催しになりそうだな」

「とんでもない。悲鳴と呪詛と絶叫が木霊する、そんな素晴らしい宴となりますよ」

「……目的はなんだ?」

「決まっているでしょう。舞台づくりですよ。漆黒の英雄モモンと大悪魔――いや、魔

皇ヤルダバオトの決着のね」

ヤルダバオトが翼を広げる。平たい触手の羽根をまとめたものではなく、純粹に空を飛ぶためのものだ。

逃亡の気配を見てモモンが剣を構えるが、ヤルダバオトは肩を竦めて牽制する。

「招待状も受け取っていただけましたので、私はこれで失礼します。おっと、追って来るなんて恐ろしい真似はよしてください。でないと、全力でこの都市を巻き込んで戦わないといけないですから」

「……いいだろう、ヤルダバオト。お前の用意した舞台で、その目論見ごと叩き潰してやる」

「お待ちしております。それではまたお会いしましょう」

翼を大きくはためかせると、ヤルダバオトの体は勢い良く夜空へと浮かび上がった。そして闇夜の中に、その姿を消す。

一人星を見上げていたモモンは手に持つ招待状に目を落とした。悪魔らしい意匠の凝らされた紙切れへ。

「さて、どうすべきか……?」

結局、ヤルダバオト襲撃という大事件のせいでモモンはこの夜足止めをくらった。

行政や組合など関係各位へ事の顛末を伝える、事態を収拾へと向かわせた。王都が受

けた被害を考えれば、混乱は驚くほど簡単に収まった。

物的被害の出たのは中央広場周辺のみであり、損害も石畳が破壊され尽くしたこと以外軽微なもの。それも魔術師組合が総出で挑めば明日の朝にはある程度修復できると言っていた。

事実、今日もエ・ランテルは賑わっている。

「遅いものだ」

「そうですね。でも、昨日の今日で元通りなのはモモンさんのおかげだと思います」

「私はただ都市長殿に頼まれて、挨拶回りを翌日にしただけなんだが」

「それでいいんです。それだけでいいんです。英雄ってというのは、ただそこにいるだけで皆を安心させられる存在なんです。身を持って体験した私が言うのだから、間違いありません」

微笑むアルシエに、モモンは頭——両頬付き兜の後頭部を搔いた。

「なんとというか、そう言われると照れ臭いな」

ヤルダバオトを撃退したモモンが一晩エ・ランテルに留まったことで、市民たちの不安は払拭された。もちろん全てではないが、それでも怯えて震える夜はのり越えられたのだ。

だから、心配することなく彼は旅に出ることができる。

ヤルダバオトを追う、というもつともらしい理由も得た。

妹たちを残して行くことは不安があるが、それでもアルシエは少しだけワクワクしている。

フォーサイトの仲間たちと初めて冒険の依頼を受けた時を思い出した。

「それで、モモンさん。これからどこへ行きましょうか？」

「そうだな……話をしたい人物がいるんだ。まずはその人に会いに行こうかと思う」

「その方はどちらに？」

「王都だよ。ついでにヤルダバオトの情報も集められるかもしれないし、丁度いいだろう」

叡智

ナザリツク地下大墳墓へ無事帰還。

仮面の悪魔は密かに胸を撫で下ろした。話に聞き十二分な心構えをして赴いたはずであったが、直接対峙してみればアレは彼の予想など軽々と超えてくる化物であった。

流石は至高の存在から逃げさせただけはある、と柄にもなく敵を称えたくなったほどだ。

もちろん、それを遥かに上回る憎悪が彼の中には渦巻いている。感情を抑え込みながら振舞うのは得意であったが、それでもあの偽物の英雄相手は中々に辛いものがあった。

ため息が零れる。疲れからくるものだ。

身体的なダメージは予想より負ってしまったが、それでも許容範囲内。

それよりも戦いながら探り探りの会話を繰り返す方が、精神的に摩耗した。

「馬鹿な人間相手なら、ここまで苦労しないのですがね……」

彼が相手の情報を探るように、相手もまた彼の言動から情報を抜き取るかもしれない。

自身からの提案であつたが、かなり際どい綱渡りであつたと思う。

だが、その苦勞に対して最低限の収穫はあつた、と安堵する。

彼にしては珍しく少し休みたいと考えたが、状況がそれを許してくれない。

此処、ナザリツク地下大墳墓において最も多忙な身であるのが彼なのだから。そして彼自身、そのことに喜びを感じている。多忙であればあるほど、主人に能力を認められ必要とされているということだから。

「さて、何にしてもまずは報告をしてからにしましょう」

疲勞を滲ませていた先ほどまでと違い、その独り言には期待があつた。

ゆつくりと尻尾を揺らしながら——しかし廊下を走るようなはしたない真似はしない——ナザリツク第九階層の廊下を美しい姿勢で歩いていた。いつもより、やや速足であるが誰かに咎められるほどのことではない。

と、思っていると言がかかった。

振り返ると一般メイドの一人がいた。

「お帰りなさいませ、デミウルゴス様……その仮面を着けている時はヤルダバオト様、とお呼びした方がよろしかつたでしょうか？」

「おっと仮面を外すのを忘れていたようだ。ああ、ただいまシクスス。今日もキミたちの掃除には抜かりがないようで嬉しい限りだ。この美しい空間を見るだけで私は癒さ

れる」

彼は仮面を外した。これで魔皇ヤルダバオトは一旦お別れ。

代わりにナザリック階層守護者であるデミウルゴスが顔を出した。

日に焼けた肌の身体にスーツを纏った東洋系の男性——に見える。漆黒の髪をオー
ルバックに固め、丸眼鏡をかけていた。全体的に理知的な雰囲気があるが、それもその
はず。彼こそがナザリック最高の頭脳を持つ存在として至高の御方々の一人、ウルベル
ト・アレイン・オードルによって創造された悪魔なのだから。

いや、ナザリック最高の頭脳というのは語弊がある、と彼は思っている。

「アインズ様はご自身のお部屋でしょうか？」

「はい。アルベド様と共に、偽モモンへの対策を練るとおっしゃっていました」

「丁度良かった。それでは私はこれで失礼するよ」

デミウルゴスとメイド、互いに敬意を込めた一礼をして別れる。

再び主人の部屋へ急ぐ彼の足は、また少し早くなった。

彼が——というよりもナザリック全体であるが——抱えている問題の内、最も厄介な
のが突如現れたモモンの偽物についてだ。

あの邪魔者のせいで、計画は大きく狂ったと言っている。

それに、と記憶を遡る。

偽モモンが現れ慈悲深き主人が怒り、奴に戦いを挑み帰ってきた時だ。

玉座に戻ったアインズは、今までに見たこともないほど精神を乱していた。いつだって冷静で、英知を感じさせるお声を聞かせてくれるお方が、あの時ばかりは話しかけても口クな答えが返ってこず、しまいには「少し一人にしてくれ……」というか細い声を震わせていた。

お供について出たセバスもまた酷く狼狽えた様子で、返答は要領を得ない。

デミウルゴスはあの時ほど不安を感じたことはなかった。

得体の知れない存在が、信奉する神にも等しき存在を揺るがしたのだ。

——許せない。気に喰わない。そんなこと、あつていいはずがない……。

「……いけませんね」

不必要なものを消し去るように頭を振る。

余計なことに思考を割り裂いている暇はない。モモンの問題を解決しても、ナザリツクには課題が山積みだ。むしろ、そちらが本題である。地下大墳墓の支配者であるアインズ・ウール・ゴウンの本懐である世界征服を果たすその日まで、非効率に足を止めるなど許されるわけがない。

目下、最重要事項であるナザリツク建国に関するイベントも明日に控える。

バハルス帝国の鮮血帝ことジルクニフ・ルーン・ファアロード・エルニクスがアイ

ンズへ謝罪する、という名目でこの墳墓を訪れる予定だ。

帝国と仮初の関係を築くことで建国の足掛かりにしようという目論見だが、間違っても侮られてはいけない。圧倒的な格の違いというものを見せつけることも重要だ。

敬愛する主人はそこに座っているだけで皇帝を支配者として圧倒するであろう。だがその傍に控える部下たちがアインズの僕として役者不足であると思われるは本末転倒。人間に侮られるなど矜持が許さず、何より主人の顔に泥を塗ることになれば命を捧げて償うには足りない。

仮にも客人として迎える以上、最高のもてなしをしなければ。

一応、既に考え得る人間に対する歓迎の方法は部下に伝え準備させている。

だがもつと、さらにより良いものはないものか……。

帝国連中の目の前で天候を変えろというのはハツタリが利いて面白いかもしれない、などと考えている内にアインズの自室の前まで来ていた。

自分の姿に目を落とす。主人の目前に出るというのに、相応しくない格好はしていないだろうか。

モモンとの交戦によって汚れた衣服は既に着替えた。今はスペアのスーツだ。

皺は？ ネクタイの歪みは？ 着こなしは？ ……すべてよし。

満を持して、デミウルゴスは扉をノックした。

静かな水面のようでありながら、大波の如き荘嚴な響きを湛えた声が返ってくる。それだけで彼の魂は震えた。

扉の奥に待ち、支配者に相応しき声を発した者こそがアインズ・ウール・ゴウン。すべてを投げ捨てても忠義を捧げたいと思える、最後にして唯一の存在。

デミウルゴスたちナザリックの存在は、至高の四十一人によって創造された。故に、彼らへの忠義は絶対で本能に刻まれた存在理由である。だからアインズへも忠誠を示すのは当たり前のことであるのだが、彼は他にも理由を持つて主人を尊敬している。胸の高鳴りが抑えられない。

——これから自分は、最高の叡智の一端を垣間見ることができるとだ。

至高の四十一人のまとめ役でもあったアインズは、その役職に相応しい凄まじき賢者であった。その叡智は深淵の如き深さを持ち、しかし天高くから見下しているような広さも持ち合わせている。

ナザリック最高の頭脳を持つ、と創造されたデミウルゴスであっても足元にも及ばない。常に遙か遠くの未来を見据えているかのような策を生み出し、数歩前を導くように歩いている御方。

いつだって主人の言動に感動を覚えているが、最近で特に衝撃だったのはモモンという存在——鎧を奪った偽物の方ではなくアインズが扮する漆黒の戦士——を生み出し

た理由に気付いた時だった。城塞都市エ・ランテルを見つけた際に、自ら情報収集に動くという理由で漆黒の鎧を纏った主人であるが——とんでもない。

アインズ・ウール・ゴウンはモモンを英雄とするために生み出したのだ。

それは、遙か先になってやっとデミウルゴスが思い至ることのできたナザリック建国を果たすための楔。

ひいては最終目標である世界征服への布石だ。

予定では帝国とのパイプを手に入れた後、王国に戦争を仕掛けエ・ランテル周辺の土地をナザリック所有の国土とするつもりである。首都にはそのままエ・ランテルが用いられ、そこを中心として国の運営を取り仕切っていくことになるが、一つ問題がある。

王国は人間の国である。当然その民も人間。

対して、アインズ・ウール・ゴウンはアンデッドであった。

アンデッドは生者を憎み襲う存在。当然、人間はアンデッドを恐れている。

アインズが人間の支配者として君臨すれば、反乱が起こるのは火を見るより明らかだ。

もちろん暴力や恐怖によって鎮圧し、支配することは簡単だ。だがそれでは折角手に入れた国も、単なる廃墟と化してしまふ。偉大なるアインズが玉座を置くに、その光景は相応しくない。

だからナザリツクは平和的にエ・ランテルを統治する必要がある。

そこで、モモンという英雄の存在が活きてくる。

人々を守る英雄が傍にいれば、民の不安は和らぐ。

心の拠り所となる英雄が反乱を起こすなど頼めば、それは絶対の命令が変わる。

平和を愛する英雄が賢王だと讃えれば、意識の奥底へ楔が打ち込まれる。

そうして時間を稼いでいる間に、アインズが理想の王であると喧伝すればいい。

いつかは民の意識からアンデッドへの恐怖心は薄れ、愚かしい彼らもアインズに支配される素晴らしさに気付くことができるようになるだろう。

恐ろしい、そう思うほどだ。

エ・ランテルを平和的に支配する方法として、これ以上のものは浮かばない。

王国の『黄金の姫』で代用は可能かもしれないが、それも今になって言える話。

当初、この世界の情報などほとんど皆無であった状態にありながら、あの叡智を宿した主人はすでにそこまで見据え手を打っていたのだ。

完璧だ——非の打ちどころもなく、破綻はあり得ない究極の策だった。

なのに。それは崩れ、大きな狂いが現れた。すべて、あの偽モモンのせいだ。

奴はナザリツクよりモモンという存在を奪った。

その目的は不明とされている。

強さに憧れ同一化を図ったのか。榮譽に目が眩んだ愚行だったのか。あるいは、愉快犯。

結論の出ない議論は嫌気がさすほど繰り返された。

だが、デミウルゴスは一人とある可能性に気が付いていた。

——偽モモンはナザリックの進める計画の全容を掴んでいるのではないか？

あり得ないことだ。もしあるとすれば誰かが裏切った場合だが、創造主であるアインズ・ウール・ゴウンを裏切ろうとする者などいるはずがない。ならば洗脳などで操られている場合だが、調べた結果その可能性も皆無だ。

ならば。

ありえないが。

受け入れ難いが。

……認めるしかない。

偽モモンはナザリックの外側にいながら、ナザリックの計画に気付いた。

内部より情報を得たのでなければ、慎重に行っていたはずの外部への工作の僅かな痕跡から推測を重ねていったに違いない。

しかし人間社会に残した痕跡は吹けば消える塵ほどのもの。積もれば山ともいうが、たったそれだけでナザリックへ結び付けるのはおそらくデミウルゴスの頭脳をもって

しても不可能。

では偽モモンがアインズの計画を見抜いている可能性は否定しても大丈夫か？

——否だ。

デミウルゴスは知っている。

たつた一人だけ、外部にあつても深淵の如き計画を見抜けるかもしれない存在を。

つまり、偽モモンはアインズ・ウール・ゴウンと同等の叡智を有している。

そんな馬鹿げた可能性が脳裏に過つた後、ずっと離れない。

だがそれが最も筋が通る。

モモンという存在を篡奪するという奇行が、馬鹿げた仮定を経ることで、ナザリックの推し進める世界征服——その足掛かりとなる建国計画を阻害する絶妙な一手である
真実を浮かび上がらせた。

モモンという英雄が手中に無ければ、平和裏に支配するのは難しい。

“黄金の姫”での代用も無駄に手札を一枚切らされる上に、奴がその気になれば致命的なタイミングでの妨害工作も容易く行えるだろう。

ナザリックとしてはなんとしても奴を始末し、モモンの鎧を奪い返したい。

難しいことは、直接交戦して身を持って知った。

下手に奪い返そうと実行使で動けば、未だ息を潜めているナザリックの存在が明る

みに出る恐れがある。策を弄して奴が偽物であると広めたとしても、偽物がいるという悪評がたつてしまう。そうなれば英雄としてのモモンの価値は下がり、結果的に自らの首を絞める形になる。

他にも案はあるが躍起になって愚行を誘うことこそ、奴の目的かもしれない。

主人と同格の叡智を相手取るなら、それくらいは想定して当然だ。

偽モモン自身が計画を暴露した様子はなさそうだが、機を見計らっているだけに過ぎない。デミウルゴスも同じ立場なら、まだ早いと絶好のタイミングを待つ。

厄介この上ない相手だ。

何より、奴は強い。

相性もあつて一概には言えないが、純粋な戦闘力において階層守護者では奴には敵わないだろう、と武人であるコキュートスが語っていた。彼は至高の存在であるアインズ・ウール・ゴウンであつても互角と睨んでいるようだった。

しかし、それで諦めるわけにはいかない。

アインズの計画を邪魔する者を全て排除するのも部下の役目だ。

それを成すために、わざわざ危険を冒してまでヤルダバオトとして偽モモンに接触した。短い会話を交えただけであるが、互いに腹の内を探り合い——デミウルゴスは最も欲しかった情報を得た。

扉が開かれる。

叡智の王がそこにいる。

デミウルゴスは跪き、主人の言葉を待った。

「ご苦労であったデミウルゴス。さて、成果を聞かせてくれ」

「はい！ お喜びくださいアインズ様、重要な情報を手に入れました」

悪魔らしく、悪辣な笑みを浮かべる。

主人はそれに満足したように、大仰に頷いた。

アインズ・ウール・ゴウンの憂鬱

心配をかけてしまった。

アインズ・ウール・ゴウンは部下たちにいらぬ心労を抱えさせてしまったことを後悔した。

漆黒の鎧が奪われ、部下を傷付けられて、冷静さを失った。

モモンの後を追ひ、交戦してその強さに驚愕した。

そこまでは良かった。まだ挽回できた。

だが奴にたつち・みーの気配を感じ取り、取り乱してしまった。

挙句、あの言葉を聞いた後はアンデッドの体特有の精神抑制も役立たずになった。

言い表し難い虚脱感が抑えられては何度も沸き上がり、意味不明な現状に頭の中は混乱して、ナザリックに帰還してからもしばらく酷い有様を晒してしまった。普段、頑張つて支配者然とした態度を演じていたため、情けない姿を見せたくなくて一旦全員を部屋から追い出したのも余計に不安を煽つただろう。

頼りない主人だと失望されたのではないかと心配したが、部下たちは変わらず崇拜の眼差しを向けてくれている。

そのことに一安心しつつも、自分の不甲斐なさが申し訳なくなつた。だからあれからも——より一層支配者として相応しい振舞いを心がけ務めた。これからナザリックは大きな計画を進めなければならぬのだ。いつまでもモモンのことばかり気にしては行られない。

正直、もう鎧は奪われたままでもいいのではないだろうか、と彼は考えている。

元々は決死の戦いを偽造するために作らせた鎧だ、ナザリックにとつて大した価値はない。漆黒のモモンという身分には少しばかり思い入れがあるが、無理にモモンと敵対するほど惜しむものではなかつた。

建国すればアインズ・ウール・ゴウンとして表舞台にも顔を出せるであろう。むしろそちらが増えすぎて、気疲れする未来も見える。そんな時に息抜きとしてモモンに変装する計画もしていたが、また新たな偽造身分を生み出してもいいかもしれない。

モモンの処遇に関しても、今のところは静観が一番だと考えている。

奴が敵対の意思を見せるなら、今度こそ全力で迎え撃ち倒して見せる。

だがもし友好的に関係を結べるなら、それに越したことはない。

部下たちを傷付けたことに関しては、相応の謝罪と誠意を見せてもらえれば許せる……かもしれない。納得できなくとも、ナザリックの利益になるのなら多少は感情を押し殺す度量はある……はずだ。

モモンの中身とたっち・ミーの関係も気になる。

反応からして本人ではないと思うのだが、一切無関係ということもなさそうだ。

——— しっかりモモンの奴、一体何を考えて鎧を奪ったりしたんだ？

わからん。まったくわからん、とアインズは一人首を傾げる。

モモンが得た名誉が欲しかったのだろうか。だとすれば、あれだけの力があるのだからこの世界では簡単に英雄として名を上げるられるはず。わざわざ他人の姿を奪ったりする必要があるのか。

もしかするとあの漆黒の鎧のデザインが気に入ったのでは。だとすれば……中々良いセンスをしていると認めざるを得ない。個人的な趣味全開の外見であるが、かなりカッコイイ出来ではないかと自画自賛していたりもした。奴とは美味しい酒が飲める（骸骨なので飲めないが）かもしれない。

なんて、のんびりとし過ぎたことを考えていると扉がノックされた。

どうやらモモンのことを調べに出立したデミウルゴスが戻ってきたようだ。

いつも通り支配者らしく、威厳を湛えた（と自分では思っている）声で応じる。

傍に控えていたメイドが扉を開き、デミウルゴスが入室した。

聞き慣れた挨拶を受け跪く彼に顔を上げ立つことを許可する。いちいち言葉をかけなければいけないのが面倒なのだが、これも上に立つ者の仕事なのだろうと渋々納得す

るしかない。

「ご苦労であったデミウルゴス。さて、成果を聞かせてくれ」

彼は自信に満ちた笑みを浮かべた。相当な成果を得たらしい。

喜ばしいことだ。モモンに関しては静観すべきだと思っ
ているが、それは積極的に敵対しないという意味であつて奴の調査を怠ることではない。情報はなるべく多く集めたいのだが、流石と言うべきか一筋縄ではいかない。

情報収集魔法によつて探知、監視を行ったのだがモモンは気配を察知するとすぐさまその魔法を斬つて見せた。なんでもありかあの野郎、なんてボヤいたが対抗魔法や特殊技術によるものでないだけマシだと思ふことにした。

ただ気になつたのが^{ロケート・オブジェクト}へ物体探知^{レジスト}でモモンの鎧を目標に発動した時、何故か失敗した。抵抗されたなどではなく、目標が条件を満たしていないものだとして魔法の発動ができなかつたのだ。そんなはずはないのだが、もしかするとなんらかの特殊技術による障害かもしれない。

隠密系の特殊技術を使えるモンスターを召喚し、追跡させたりもしてみたのだがこれも失敗。無駄にユグドラシル金貨を消費しただけになつてしまつた。

そんなこんなあつてモモンを見失い、追跡も監視も難しいという結論に至つた。

もう面倒なタイミングで現れないことを祈るしかないな、と考へている時デミウルゴ

スが提案してきた。

彼自身がヤルダバオトとして接触し、情報を引き出してくるといふのだ。

危険だ、と止めたのだが彼の意志は固く絶対に無茶をしないことを誓わせて承諾した。

デミウルゴスは戦闘に向けた能力をあまり持っていない。

それでもこの世界では圧倒的強者に数えられるだろうが、モモン相手では赤子も同然。

気が気でなかったのだが、無事帰還して胸を撫で下ろしているところだ。

もちろん、お前ならやれると信じていたぞ、的な態度は崩さない。

「それで、重要な情報というのは？」

「まずこれは言葉を交わしてみた感触でしかないのですが、やはり奴はアインズ様が潜ませていたモモンという存在の本当の価値に気付いている可能性が高いでしょう」

——モモンの存在価値？　なんだそれ？　やっぱりデザイン性かな？

「ふむ……やはり、そうか。私もそうではないかと思っていたんだ」

「流石はアインズ様。私などよりも遥か以前から奴の目的に思い至っているとは思っておりましたが、やはり」

「よせデミウルゴス、たまたまだ。私などよりお前の方が優れた頭脳を持っているのだ

からな」

「御謙遜を。私など、まだまだアイんズ様の足元にも及びません」

こんなやりとりも何度目だろうか。

それとなく、自分は知者ではないと伝えているのだがいつも謙遜としか受け取られない。
い。

「まあいい。それでだデミウルゴス、モモンの価値はどのあたりが一番重要だと思う？
やはり格好良さだろうか？」

「アイんズ様がおっしゃられる通り格好良さ、つまりは英雄らしさは最も重要な点かと」
「ははは、そうかそうか。お前もそう思うか」

部下にデザインした鎧がカッコイイと褒められて満足するアイんズ。

ウルベルトさんも漆黒とか大好きだったからなあ、と昔の記憶を甦らせる。

「ええ。建国後、エ・ランテルを平和裏に支配するためにモモンの英雄性は必要不可欠。
あの都市を見つけた時、既ににそこまで考え手を打っていたアイんズ様の策略には感服
するしかありません」

「……ん？」

「どうかされましたか？」

「いや、なんでもない。さ、流石だデミウルゴス。そこまで見抜いていたとは……」

——え、待つて。なんの話？ デザインの話じゃないの？

声が震えなかつたことを自分自身で褒めてやりたいくらいだった。

まずい。デミウルゴス含め部下たちは何故かアインズのことを叡智の化身だと信じ込んでいるが、実のところは全然そんなことはない。彼の頭脳は凡人のそれで、いつだってそんな無茶な理想に応えるよう演じ、知ったかぶりをかましているだけだ。

いつもなら他の者もいる前で「皆にもわかりやすいように説明してやれ」と誘導することなどでなんとか危機を乗り切ってきたが、二人きりではその手は使えない。ポロが出るのも時間の問題だ。

「……そういえばアインズ様、アルベドはどうしたのでしょうか？ お二人でモモンのことについて対策を練っていると伺ったのですが、この部屋にはいないようですね」

「あ、ああ。先ほどまで話していたのだが、明日は帝国の者たちが来るだろう？ モモンのことも重要だが、目先のことを疎かにするわけにもいかない。だから一度話を切り上げて彼女には歓迎の準備の最終確認に向かつてもらった」

半分嘘である。彼女と相談している時も話の流れが読めなくなりポロが出る前に無理やり切り上げて、あれやこれや理由を付けて準備の方に行ってもらっただけだ。

これで一息つける。ゆっくり冷静に彼女の話の話を吟味できると思っていたのだが。

デミウルゴスがさらに混乱するような爆弾をぶち込んできた。

「できれば彼女にも聞いてもらいたい一緒に作戦を練り上げたのですが、アインズ様に聞いていただければ何も問題ないでしょう。何卒この知恵無き身に、その叡智の力をお貸しいただきたい思います」

—— どうする？ このまま話を聞いても理解できる気がしないぞ。

アルベドの時と同じく話を切り上げて、明日多くの者が集まる前でいつもの手を使うべきだろうか。そんな逃げの一手に縋ろうとする彼に、デミウルゴスは輝くような信頼の眼差しを向けてくる。

「う、うむ……いいだろう。本題を話せ」

「では今回得た最も重要な情報ですが、偽モモンはヤルダバオトとナザリツクの関係に気付いておりません」

アインズは顎に指を添え熟考をする。

—— ヤルダバオトとの関係？ 確かに明るみに出ちやマズいけど……。

わからない。デミウルゴスが何を持って最も重要な情報と言っているのかが。考える。頭の中をひっくり返したり、揺らしてみたりもするが、わからない。やがて諦めて、知ったかぶりをするしかないといういつも通りの結論に至る。

「そうであったか。確かに、重要な情報だな」

「はい。この情報が有ると無いでは大違いです」

「……ああいう面で、違いが出るな」

「はい。ああいう面では大変重要です」

「そ、そういう面でも役に立つかもしれない情報だな」

「はい。そういう面でも全てを左右するといっても過言ではありません」

—— どういう面だよ!? わかんねえよ! もうちよつと優しくプリーズ!

もつと早くに真実を打ち明けておくべきだったと後悔した。

しかしもう遅い。積み上げてしまった幻想の叡智は、崩すわけにもいかないほどに巨大な塔となってしまった。

アインズの背後に退路はなく、背水の心持で頭を回すしかない。

「そう、だな……まずデミウルゴス、お前はその情報を持ってしてどう考える?」

「奴の行動を僅かですが誘導できるかと思われます」

「なるほど。そうだな、私もそう思う。それでどうすべきだ?」

「誘導し、罠にかけるべきだと愚考しております。実は既に布石を一つ打つてきました」
ほう、とわざとらしく感嘆の声を上げる。

大袈裟なくらいに、しかし静かさも兼ね備えた雰囲気口にするのがポイントだ。

「流石はデミウルゴス。完璧だ、ならば私の知恵など必要ないのではないか?」

「お戯れを。布石を回収できるのは随分先の将来のこと。それまでが問題であり、私の

知恵では至らぬ部分なのです」

——よし、上手く必要な情報を引き出せているぞ。

自分が何を答えるべきなのか——あるいはどのように誤魔化すべきなのか判断するのに必要な情報を得られたことに、アインズは心の中でガッツポーズをする。部下とのチグハグな会話に少し慣れてきたおかげだろう。小手先の会話術だけはメキメキとレベルアップしている気がする。

「つまり将来モモンを倒さなければならなくなった時に罠に嵌めるための手は打てたが、近い将来の奴の行動をどうにかする方法がない、ということだな？」

「まさしくその通りでございます。ヤルダバオトの宣戦布告により近い内聖王国へ向かうのは間違いないと思われます。しかし何時になるか、どの程度他国へ留まるかが不明です。せめて偽モモンの次の行動が読めれば対策も立てられるのでしようが……」

次の行動を読めれば……非常に難しいことだ。

デミウルゴスが知恵を借りたいのはその辺りなのだろうが、アインズの頭の中に解決策はない。

それでも一応は考える努力はすべきだ。すべて部下に任せていてはダメな上司になつてしまう。

——俺はそんな風になりたくない。責任感ある上司を目指すぞ！

「モモンは今、エ・ランテルにいるんだったな……」

「はい。ヤルダバオトの騒ぎもあつて、少なくとも今夜一晩は都市から出ることはないでしょう」

エ・ランテル……王国……鎧……戦士……。

色々とキーワードを浮かべ、なんとか繋がらないかと苦心するが成果は出ない。

しばらくの沈黙。無為に過ぎていく時間。それを実感し、思考を投げ出そうと時だった。

あの言葉ふと脳裏に過り、バラバラだったキーワードたちが繋がる。

しかし求めていたモノとは関係のない、とある人物は思い浮かんだだけだ。

それをつい、口に出してしまった。

「……ガゼフ」

「ガゼフ？　リ・エステイーズ王国の戦士長のガゼフ・ストロノーフのことでしょうか？」

「えっ、いや……なんでもない。気にするな。それよりもデミウルゴス、この件はお前に一任しようと思う」

「しかし——」

「話を聞いてお前なら任せられる、いやデミウルゴスしかいないと私が判断した」

前言を撤回しよう、アインズは思った。

出来る部下がいるのなら上司はその部下に仕事を任せざるべきだ。

——そう、部下の責任を負うことこそ上司の仕事だ。

自分に言い聞かせ、部下へ言い聞かせる言葉を高速回転する頭で練り上げた。

「難しいことかもしれない。ああ、そうだと……高い壁となっている。しかしならば、これは試練だ。生物はあれだ、試練を乗り越えることで強くなる。つまりは……成長、そう成長をする絶好の機会だ。私はお前たちに成長をしてもらいたい。期待しているんだ。そして今回の試練も、お前ならのり越えられると信じている」

良く口が回るようになったものだ、と自分自身で感心する。

それらしい言葉を並べてみたが、思いのほか纏まっただろう。

証拠にデミウルゴスは呆けたような顔をして、アインズを見上げている。

それは天啓を得た信心深い信徒のような光景。感動に肩を震わせ、内より溢れ出る感情を抑えきれないといった様子だった。

彼は跪き、頭を垂れた。

「それほどの期待を、私ごときに掛けていただけるとは……このデミウルゴス、より一層の忠義を持つて必ずやアインズ様のご期待に応えて見せます！」

「頼んだぞ」

短く答え、心中では大きく息を吐く。

もしこの部屋に誰もいなければきつと拳を天に掲げただろう。

—— 乗り切った！ やるじゃん俺！

何も解決していない問題の先送りでしかないが急場は凌いだ。

これで良かったのかと問われれば、否だろうがこれ以上はアインズにはない。

しかし、やはり罪悪感にも似た感情はある。

知恵者を演じるのもそろそろ限界かもしれない。

見損なわれたくない、期待に応えたいという気持ちからの行為であったのだが、大切な部下たちを騙しているようで——彼らを信用していないようにいい気分ではない。

アインズ本人としても気疲れが凄い。

—— いきなり暴露しても信じてもらえないだろうしなあ。

なんとかデミウルゴスたちの方が上手くことを回せるという風潮にして、アインズの頭脳面での評価をあるべき位置に軟着陸させるのがベストだろう。

具体的な方法は思いつかないので、おいおい考えるとして。

まずはこれ以上無用に評価を上げて勘違いさせることを避けるべきだ。

狙ってやったことなど一度もないのだが……要努力、と。

アインズは心のメモ帳にしつかりと記した。

いつか気疲れしない平穏な日々が訪れればいいな、と夢見て。

しかしだ。現実はそのなりに甘くない。

後日、階層守護者たちを玉座の前に集めていた時だった。

急いだ様子の部下が一人、情報を持って現れた。

「どうしたそんなに慌てた様子で？」

「はい！……報告させていただきます！」

至高の御方の前とあつて緊張した面持ちである部下だが、その報告を述べる言葉はハキハキと聞き間違えることのないような声で出された。

「件の偽モモンが王都に出現！ ガゼフ・ストロノーフと接触したようです！」

多くの者はモモンの行方が分かったということに驚きの反応を見せた。

だが、二人だけ。アイんズとデミウルゴスだけは違う反応を示していた。

デミウルゴスはまるで神を見たかのような衝撃に打ち震えていた。

その視線の先にいる至高の存在——叡智の化身を見つめる。

「まさか……アイんズ様、あの時の眩き。感服いたしました！」

輝く宝石の瞳。

彼の忠誠心はまた一段階壁を破り天高く昇つただろう。

対してアインズ・ウール・ゴウンは心の中で絶叫した。

——はっ、はああああああああああああああああああ!?
なんでッ!? と。

知り合い

ガゼフ・ストロノーフ。

強さを、武力を背景に生業とする者で、彼の名を知らない者はいないだろう。リ・エステイーゼ王国最強の戦士。いや、近隣諸国最強とまで謳われる戦士だ。王国戦士長という地位に就き、国王であるランポツサ三世の懐刀として従事している。

元は平民出身で、王国の御前試合にて剣の腕を認められた成り上がり者だとか。

そんな出自もあって、国内では貴族にあまり好かれていないようだ。しかし部下や、彼をよく知る者たちからは慕われ、優れた人格者であるという面もその強さと共に噂として帝国にまで届いていた。

アルシエが所属していたワーカールのチームでも、話題の中に彼のことは幾度となく挙がった。

隣国にまで名を響かせる有名人とあって、「個人の強さ」という話になった時には彼はよく一つの基準として持ち上げられるのだ。「かの戦士長に匹敵するか否か」という風に。

そして大体的場合、匹敵すると評されることはあっても上回ることはない。

正確な彼の強さを把握している者は少ないため、所詮は推測で語るしかないという面があるが、やはりわかりやすい戦士としての強さにおいて、彼の名声は誰にも負けけない。事実、英雄の領域にあるとされる彼の實力に及ぶ者などほとんどいないのだ。

それほどの戦士、ガゼフ・ストロノーフ。

遠くない未来、彼もまた英雄の一人として吟遊詩人たちに語られるかもしれない。

「そんな有名人に、一体どんな話があるんですか？」

「大したことじゃないが、幾つか聞きたいことがあるんだ」

「ちなみに約束は？」

「していない。そもそもヤルダバオトの一件で少し顔を合わせた程度の関係でしかないからな」

自由奔放な冒険者と国に仕える王国戦士長では色々と立場が違うこともある。

手紙一つ送るにしても、ちゃんと彼にまで届くのかは不明だ。組合の方から手を回してもらおう方法もあったが、彼はのんびりと待つことも良しとしたようだ。

「とりあえず城まで行ってみよう。すぐ会えるに越したことはないが、無理ならばらく王都に根を下ろして待つ。コイツが良い方向に働けば御の字だ」

モモンは首から下げたアダマンタイトのプレートを指で弾く。

最高位の冒険者であることを示すそのプレートは、身分を証明するには十分な物であ

り、多少なら権力者に対して優遇を求められる地位にあることを保証してくれる。

とはいえ相手も忙しい身だ。

いきなり出向いて、というのは無理だろうと考えていたのだが——。

「お待たせした。こんな格好で申し訳ない」

「いえ、いきなり押し掛け、なるべく早くなどと不躰なお願いをしたのはこちらです」

その男を見れば、屈強という印象がまずあつた。

訓練中だったのか軽装で、隆々と盛り上がる鍛え抜かれた肉体は鋼を思わせる。巖のような顔つきで、威厳を感じさせる皺が刻まれているが、朗らかに微笑むと憎めない愛嬌を浮かべせた。見るからに只者ではない雰囲気纏っているが、何よりその瞳が強烈な印象を与えてくる。

アルシエにとつての英雄——モモンとよく似た力強さを彼もその瞳に宿している。

紛うことなき傑物。

これが「王国最強の戦士」ガゼフ・ストロノーフなのかと、彼女は納得した。

「その様子ですと訓練中だったようで……お忙しい中、時間を割いていただき感謝します」

「何を言われる。モモン殿は王都を、いや王国を救った英雄。そんな貴方の頼みなら、王の傍にいななければならない時分以外であれば喜んで歓迎させてもらおう。それに、そ

そろ部下たちにも休憩が必要な頃だったので丁度良かった。教官がいない方が力を抜いて休めるというもの」

ガゼフは気さくに笑った。さっぱりとした態度に好感が持てる。

モモンも彼の言葉に頷くが、しかしと続けた。

「戦士長殿の部下たちならば、見ていないところでも無茶な訓練をしそうですね」

「ははは、そんなことは……」

流石にないよな？　と言いたげな顔で視線を落とす。

アルシエたちが城を訪ねた時、門番たちが対応してくれた。

本来ならいきなり現れた客人など無下に扱われるものだが、漆黒のモモンの名は王都に轟いており門番たちは非常に丁寧に、かつ迅速な動きで要件をガゼフに伝えてくれた。ほとんど待つこともなく二人が通されたのは、城の領内にある塔だった。どうやら兵士たちの訓練場として利用されているらしい。塔内部に備えられた休憩室らしき部屋に案内された。

殺風景で客人を呼ぶような場所ではないだろうが、こちらが急いでいるということを尊重してくれたのだらう。証拠に戦士長はすぐ現れた。

そんなわけで、彼の視線の先——今いる部屋の階下に部下たちが訓練している広間がある。

不安そうな表情を浮かべる彼に、モモンは申し訳なさそうに頭を下げる。

「お時間はそれほど取らせませんので」

「気を遣わせてしまったようですな……とところでそちらの女性は、新しい冒険者仲間ですかな？」

「ええ。帝国を訪れた際に出会いまして。今は共に『漆黒』の名を背負ってもらっています」

「アルシエ・リーブ・イエル・フルトと申します」

「聞いているとは思うがこの国の王国戦士長ガゼフ・ストロノーフだ。よろしく頼む」

無骨ながら貴族階級に倣った礼儀作法だ。落ちぶれたとはいえ元は貴族家の娘であったアルシエはこういう時の礼の返し方を知っている。久しぶりのことに妙な感動を覚えたが、ふとモモンのことが気になった。

彼も礼儀作法はしっかりしている。

親しくなった者にはある程度崩れた口調や態度で接するが、地位のある者や初めて会う者には基本的にきっちりとした礼を尽くしていた。平民がなることの多い冒険者としては珍しい人物だ。もしかすると貴族、あるいは王家の血を引いているのではないか、と思っただ。

「それで、話というのは？」

「はい。二つほど戦士長殿に伺いたいことが」

「……もしやヤルダバオトの件を？」

「片方はそうです。こちらで何か情報を掴んでいないかと思ひまして」

ガゼフの顔つきが真剣なものに変わる。その目にはより一層強い光が灯った。

彼にとつてもあの仮面の悪魔は、特に危険視する存在なのだろう。

「エ・ランテルでの一件はすでに聞き及んでいる。随分とあの悪魔に気に入られたよう
で」

「好かれるなら見目麗しい女性に好かれたいのですがね……」

「もしかするとあの仮面を外せば美しい女性かもしれませんぞ？」

「……冗談でもそれはキツイ」

「これは失礼した……残念ながら奴に関する情報は何も新しいものは入っていない。王も危惧し情報の収集に乗り出したのだが、王国にある文献にはヤルダバオトなる悪魔の情報は一つなかったようだ」

そうですか、と残念そうな口ぶりでモモンは言うが、その実あっさり受け入れていることをアルシエは知っている。元々あまり期待していなかったようだ。ヤルダバオトの件は「ツイでだ」と彼も言っていた。だから、もう一つの件が本題なのだがその内容を聞いて彼女は首を傾げた。

「では戦士長殿、こんな言葉を聞いたことはありますか？」

——誰かが困っていたら助けるのは当たり前。

アルシエもその言葉を知っている。モモン本人から聞いたのだ。

その言葉について問うことにどんな意味があるのか、全く見当がつかないが、どうやら彼以外の誰かが最初にその言葉を言い放つたらしいことはわかった。

おそらく、その誰かと知り合いなのかと聞きたいのだろうと推測した。

ガゼフの顔を見れば、驚きの表情を浮かべていた。

そしてゆっくりと、どこか嬉しそうな色に変わっていった。

「良い、言葉だなやはり……うむ。知っているとも。かつてある御仁から聞いた」

「何時、何処で？」

「詳しくは訳あつて言えないのだが……少し前にとある村で窮地に陥ったことがあり、その際助けてくれた魔法詠唱者がその言葉を口にしていた」

「その方の名は？」

「ゴウン——アインズ・ウール・ゴウンと名乗っていた」

その名前を聞いた時、アルシエは一瞬頭が真っ白になった。

アインズ・ウール・ゴウン——その名がまさかガゼフの口から出てくるなど、想像もできなかったからだ。

忘れていない。忘れたくても忘れられるはずがない。あの化物の名は、彼女にとつて恐怖の象徴であり、憎しみの対象であり、もはや呪いと呼んで差し支えなかった。

——あのアンデッドが、戦士長を助けた？

そんなこと、あるはずがない。信じられるわけがない。

なのに、どうしてあの化物のことを語るガゼフは嬉しそうな顔をしているのか。

わけがわからなかった。現実が遠くなつていくような感覚。

疑問が疑問を生み出し、円を描いて回り始め、頭の中で堂々巡りする。

思考が空回り一人だけ時間が固まったようにすら感じられている。

だから、隣でモモンが漏らした眩きをアルシエは聞き逃した。

「そうですか……やはり貴方が起点だったか。さらには奴まで……」

「何かか？」

「いえ、ただの独り言です。お気になさらず」

モモンは手を横に振る。

「ところで、御二人もゴウン殿の知り合いか？　彼は息災だろうか？」

「ええ……まあ、知り合いといえれば知り合いですかね。彼の近況はわかりません」

「そうか。彼に救われた時のお礼がしたいのだが、どこにいるのかもわからなくてな。

もし知っているのならあの素晴らしき御仁に言伝を頼みたいのだが——」

「——そんなわけないッ!!」

ガゼフの話に耐えかねて、叫びながらアルシエは立ち上がった。

彼は目を剥いて驚くが、構わず続けた。

「アイツが、あの化物が人を助けた!? 素晴らしき御仁!? そんなのあり得ない! アレはそんなものじゃない! 人間なんてゴミクズほどにしか思っただけで、冷酷で、残酷で、禍々しくて! どうしようもない邪悪! ……真正正銘の化物だ!」

「……流石に、恩人をそんな風に貶されるのは不愉快なのだが?」

ガゼフの目に陰が宿る。鋭い猛獣のような瞳がアルシエを睨み付けた。

だが、それがなんだ。ちつとも怖くない、もつと恐ろしいものを彼女は既に見ている。

あのおぞましいオーラを思い出すだけで指先が震える。

それでも拳を握って誤魔化し、王国戦士長を睨み返した。

許せなかった。認められなかった。

アインズ・ウール・ゴウンは彼女から大切な仲間を奪ったのだ。

そんな相手をまるで英雄であるかのように語るガゼフの言葉は、どうしたって受け入れ難い。

感情が暴走し、歯止めが利かなくなっている彼女へモモンから制止の声がかかる。

「アルシエ、よせ」

「でも——」

「気持ちにはわかる。だが感情をぶつける相手が違うだろう」

彼の声は抑揚がなく平坦で、冷たい。だがそれが彼女の頭を冷まさせた。

一色に染まった頭の中に彩が戻り、先の失言を思い返す。

酷いものだ、と自嘲する。

「……取り乱してしまいました。大変失礼いたしました」

「いや、いい……気にしていないとも。だがもしかすると私の知るゴウン殿と、お二方が知る者は別人かもしれんな」

「そうであると、私も願っています……」

アインズ・ウール・ゴウンという名の魔法詠唱者。

別人である可能性は低いだろう、とアルシエの直感が告げる。モモンもきつと同じだ。

重苦しい静寂が部屋を支配したが、ため息を吐いたモモンが切り開いた。

「さて、これ以上戦士長殿のお時間をいただくのも気が引けます。これで失礼させていただきますきましよう。貴重なお時間をありがとうございました」

「そうか。モモン殿はこれからどうするおつもりで？」

「詳しくは決めていません。ただ一度、聖王国を訪れてみようかと思っています。ヤル

ダバオトの言う宴がいつになるかわかりませんが、それまでに一度この目で見えておいた方がいいでしょう」

「何かあればまた訪ねてくれ。可能な限り、力になろう」

「その時はよろしくお願いします。それでは——」

一つ頭を下げ、モモンはアルシエを連れて城を後にした。

羨望の眼差しと共に見送る門番たちへ手を挙げて応えるモモン。その一步後ろを少女は重い足取りでついて行つた。

「……………すいませんでした」

「謝る必要はない。キミの感情は、私や戦士長殿には知り得ないものだ。先ほどの発露を短絡的であると指摘はできても、間違つているとは誰にも言うことはできない。彼は懐の深い人物であるようだ。きっと許してくれるだろう。私にしても確かめたいことは確かめた。つまり、気にするな」

先を歩いていた彼は足を止め、少女に並ぶと優しく背中を叩いた。

その軽い接触到どれだけの温かさが込められているかを感じ取る。そのことに、少女は俯き唇を噛み締めた。

——— ——— なんの役にも立っていない。

むしろ足手まといだろう。

エ・ランテルの人々や、ヤルダバオトに浴びせられた評価を思い出す。

隣を歩く偉丈夫の顔を見上げた。両頬付き兜フルフェイスでその表情をうかがい知ることができない。だがもし、その内側でアルシエに対する失望や不快の色を隠していたら。そんな風に考えると――。

「兜に何か付いているか？」

「い、いえ……」

アルシエは首を横に振った。努めて、いつも通りの表情を浮かべる。

気にするな、と言われた。反省しろ、とは責められなかった。

それは彼が甘いからではなく、アルシエが当然省みていると信頼されているからだ。

勿論、反省している。せめて、彼の迷惑にはなりたくない。

要らぬ心配をかけたくなって、彼の期待に応えるように振舞った。

「しかし、思ったより早く要件が片付いてしまった」

「このまま聖王国へ向かいますか？」

「いや、先に冒険者組合に顔を出そう。アダマンタイトわだまたしたちでないといけない依頼があるかもしれない。なくても、聖王国方面での依頼があれば受けて行こう」

冒険者組合に集まる依頼は、大体がモンスター退治である。

他にも薬草の採取や、未踏域への調査などもあるが、モンスター専門の傭兵という面

が何より強い。

最上位冒険者への依頼ともなれば、のつぴきならない状況から縋ってきたものも多いだろう。

聖王国へ旅立つ前に、そういう人々を救ってしまおうというわけらしい。

アルシエは相変わらず英雄然とした彼に感心しながら、王都の街並みへ目を向けた。

歴史を感じさせる、美しい都だ。

王城付近のこの地域は、とくに煌びやかな印象がある。

「そういえば、他のアダマンタイト級の冒険者チームは王都を拠点にしているんですけどっけ？」

「ああ……そういえばそうか。いきなり来て彼女らの仕事を横取りするのは……よくないか？」

まあいい、と彼が少し悩んだ後、とりあえず冒険者組合へ向かうことになった。

王国のアダマンタイト級冒険者——帝国出身のワーカーであったアルシエも、少しばかり興味がある相手だ。

「『朱の雫』と『蒼の薔薇』でしたよね。モモンさんは双方とも面識が？」

「いや、朱の雫の方々はまだ顔を合わせたことがないな。蒼の薔薇のメンバーとはヤルダバオトの一件で知り合ったばかりだ。以降も連絡を取っているわけでもないが、流

石にこの目立つ鎧くらいは憶えていてくれるだろう」

「確か、女性ばかりの冒険者チームだと聞きいたことがあります」

「強く、美しい方々ばかりだったよ」

比較的男性の冒険者が多い現状で、女性だけで最上位にまで上り詰めたチーム。

それで強く美しいとくれば、その在り方だけで御伽噺や英雄譚に語られそうだ、とアルシエは思った。

そんな珍しい団体の話をしていたからだろうか。

噂をすれば影――。

少し不思議な、少なくとも女性のものともわかるくぐもった声が聞こえて来た。

「モモンさまああああああああああ!!」

振り返ると、歓喜に震える叫びと共に仮面を着けた不審者がモモンの懐へと飛び込んできた。

彼もさすがに驚いたようだが、柔らかく受け止め抱き上げた。

「これはこれは、お久しぶりですイビルアイさん」

薔薇

漆黒の鎧に向かつて、なんのブレーキも利かせず飛びついた華奢な少女は知り合いだったらしい。

小柄な体躯で、漆黒のローブによつてその身をすっぽりと覆つてしまつてゐる。額に朱の宝石を埋め込んだ奇妙な仮面で顔を隠しているが、その声色から——騎士に抱かれる姫君のように——恍惚とした表情を浮かべてゐるのは想像に難くなかつた。

「イビルアイと呼び捨てにして欲しい。それより、どうして王都に？　もしかして私に……」

「ガゼフ・ストロノーフ殿に用がありました」

「戦士長に？」

小首を傾げて見せるイビルアイ。仮面を取れば可愛らしい仕草なのだろう。

しかし隣でその姿を見るアルシエには、不審者が怪しい素振りを見せているようにか思えなかつた。

「ええ。ところでイビルアイさ……イビルアイはどうしてここにいらつしやるのですか？」

「口調もそんな改まったものでなくていいです。共に死線を潜った仲なのだから」
「……それもそうですね。では遠慮なく改めて——こんな所でどうした？」

「蒼の薔薇」で受ける依頼が来たので、リーダーを呼びに来たんです」

イビルアイは王城の方へと視線を向ける。

さて、この少女は誰だろうか。二人はどんな関係だろうか、とアルシエが疑問に思ったところで、また新しい声が響いた。振り向いて見れば、非情に大柄な人物が小走りでごちらへ近寄って来ていた。

「おいイビルアイ、いきなり飛び出してどうした？ ……ってモモン？ ははん、なるほどなあ」

愉快そうにその表情を歪める男……いや女か。

巨石という印象がまず脳裏に浮かんだ。鍛えに鍛え抜かれた肉体は、全体的に太く逞しい。鎧に身を纏われていてもわかる。ある意味女性的な特徴であるはずの胸は胸筋に差し変わっている。もはや胸ではないのだろう。鋭い眼光は肉食獣を思わせ、歴戦の戦士であることを如実に語る。

「よおモモン、久しぶりじゃねえか」

「お久しぶりですガガーランさん。お二人共、お元気そうで何より」

いっそ男女と呼んだ方が良いかもしれない女性はガガーランというらしい。

その名に、アルシエはかつて聞いたことがあると記憶を遡る。

「あのモモンさん、この方々はもしかして……」

「王国のアダマンタイト級冒険者チーム『蒼の薔薇』に所属される人たちだ」

丁度話題に挙げていたので驚いた。

女性五人で構成され、王国最高戦力とも言われるチームだ。

仮面の少女はともかく、ガガーランの体軀を見てはその評価も納得できる。

「あん？　なんだモモン、新しい女を引っかけたのか？」

「まあ、そんなところです。紹介しておきましょう。『漆黒』の新メンバーのアルシエです」

「ご紹介にあずかりましたアルシエ・リーブ・イエル・フルトです。よろしくお願ひします」

礼をして、頭を上げるとすぐ近くにガガーランの厳つい顔があった。

品定めするような目でじっと見つめられ、そのまま抱きかかえられているイビルアイへニヤケた表情を向ける。

「悪くないねえ。美姫ほどじゃないにしても、ライバル二号登場だな」

「う、うるさい！　……というかモモン様、ナーベの奴はどうしたんですか？」

「彼女とはチームを解散した。今はアルシエと二人で組んでいる」

「なっ!？」

「へえ、あんな美人を手放すとは……趣味が変わったのか？」

「まるで私が最低な男であるみたいなの言ひ方は止めてもらえますか？」

違うのか、違いますよ、と苦笑い混じりの応答をする二人。

その傍らで少女たちの視線が交わる。とはいえ、ある意味一方的なものでイビルアイがアルシエを睨み付けている形だ。仮面越しであつても、その不躰な視線はグサグサとアルシエを突き刺してくる。

耐えかねて視線を逸らすと、ふんと勝ち誇つたように鼻を鳴らされた。

——なんなんだろうか、彼女は？

「しかし都合がいいタイミングで現れる奴だな、お前は」

「なんの話でしょうか？」

「いや、もしかしたら俺たちの手にも余るかもしれないねえ依頼があつてな。本当ならミスリル級やらオリハルコン級の連中を連れて行くこうかと思つてたんだ。そこへ颯爽と現れた英雄様、これは運命的なものを感じちまうだろう？」

茶化したような言ひ方をするガガーラン。

ただその表情は真剣で、彼女たちが抱えた問題の重さを伝えていた。

「時間あるなら、せめて話だけでも聞いて行つてくれや。結構物知りなんだろう？」

「……わかりました。とりあえずお話を聞かせてもらいましょう。構わないな、アルシエ?」

「はい。勿論です」

地面に下ろされたイビルアイが名残惜しそうにしているが、一度ここで別れ冒険者組合でまた顔を合わせる手はずとなった。モモンとアルシエは先に組合へと向かい顔を出すと騒然となった。ここだけならエ・ランテル以上かもしれない。ヤルダバオトの一件の際、モモンはその度量の深さを王都の冒険者たちに見せつけたらしい。

人が押し寄せ、隣に立つのが美姫出ないことに気付き、当然といべきか勝手を知らない少女は非常に肩身の狭い思いをする。

彼が気を遣ってくれて、隅の方でぼんやりと待っていると、イビルアイとガガーランが女性を三人引き連れて到着した。

先頭に立つのは、金色の髪に緑色の瞳をした美しい女性だった。若くも貴族然とした気品と魅力——生命の輝きとでもいべきか——を漂わせている。きつと彼女が噂に聞く「蒼の薔薇」のリーダーであるラクユース・アルベイン・デイル・アインドラなのだろう。

「遅くなりました、お久しぶりですモモンさん」

「お久しぶりですアインドラさん。さあ、こちらの席へどうぞ」

再会を握手で祝福し、モモンはあらかじめ空けておいてもらったテーブルへ案内する。王都最高冒険者チームと、紛うことなき本物の英雄の会合に、組合の内部は静寂のまま熱を持つ。

周囲が興味や好奇心の視線を向けるなか、隅っこに座るアルシエも他人事のように眺めていた。

取り分け目を惹くのは、ラキユースの持つ剣だろうか。ガガーランが隣に立てば華奢な棒切れにすら見える、彼女の体格に不釣り合いなバスタードソードほどの剣。しかし鞘に収まったままでも感じる凄まじい力は、アダマント級アダマントの冒険者が持つに相応しい魔剣であることを知らせてくれる。

対照的に、貴族の娘たる彼女にぴったりな煌びやかな鎧もまた目を奪ってくる。白金と金でつくられたような輝きを放ち、細部に幾つものユニコーンの紋章をあしらったその鎧はまさしく無垢なる白雪ヴァージン・スノー——何人も汚すこと能わずとされる乙女の装備——である。

そんな戦乙女のような女性を眺めていると、背後に影の用に付き従う二人を見つめる。

双子なのだろう。顔つきはそっくりで見分けがつかない。体にぴったりとした黒い衣装もまた同様。音を立てないその足運びからおそらくは盗賊系の役割なのだろうと

推察するが、彼女たちのことはアルシエの耳には届いていない。

というのも「蒼の薔薇」はリーダーのラキユースと、厳つい見た目のガガーランが良く目立つ。

なので帝国において強者に関する情報の収集をそこまでしていなかったアルシエには、その二人のこと以外あまり聞いたことがなかったのだ。

「すごい……」

それでも、見ればわかる。

ラキユース、ガガーラン、双子に仮面の少女。五人とも全員、人類最高戦力に相応しいオーラがある。

あれだけのモノを持って初めて、人々は最高位級アダマンタイトと認め、讃えるのだ。それでやっと英雄モモンの肩を並べられることを許される。

——私とは大違い。

なんと輝かしいのか。なんと眩しいのか。

与えられただけの自分の矮小さに恥を覚え、思わず目を背けたくなる。

「アルシエ、キミも来い。話し合いたい」

「えっ……」

モモンから、声が飛ぶ。いつもなら駆け足でその傍へ向かうだろう。

でも今は、果たして彼の隣にいていいのかという疑問に足を縛られてしまう。

どうしてか動こうとしない少女に、モモンが不思議に思い表情を変える。その脇を抜けるように小さな影が飛び出した。人や備品の間をすりすりすると抜け、呆けた様子のアルシエの前にイビルアイと呼ばれた少女が立つ。

「何をしている？ お前も一応はモモン様のチームメイトなんだろう？ だったら早く来い、時間を無駄にするな。彼に迷惑がかかるぞ」

冷たくぶつきらぼうな言い方だが、今の彼女には効果覲面だった。

迷いが一時的に払われ、急いで席へ着く。

七人が揃ったところで、さてとガガーランが切り出した。

「ラキユースたちには簡単な説明は済ませたがモモンたちにはまだ何も教えてないから、詳しく話すぜ？」

「お願いします」

「まずコイツが依頼書だ」

テーブルの上に一枚の丸めた紙が広げられる。

冒険者組合でよく使われる紙で、依頼内容や条件がびつしりと書き込まれていた。

「謎のアンデッドの討伐……？」

「ついでに無数のアンデッド師団も、だ」

アルシエも目を通す。帝国と王国で使う文字は違うが、似ているためある程度なら読める。

依頼内容をまとめるところだった。

『カツツエ平野に出現した謎のアンデッドとそれに付き従うアンデッド師団の調査、および討伐』

依頼

ラキユースが難しい顔をする。

カッツエ平野。

呪われた地とも呼ばれる、王国、帝国、法国、竜王国という四つの国の境に存在する場所である。

緑がほとんどない荒涼の大地であり、毎年秋になると王国と帝国が戦争をする合戦場として有名である。一年を通して薄い霧に覆われているのだが、両国の戦争が行われる際に、まるで大勢の死者を歓迎するかのように霧が晴れると言われている。

戦争によつて多くの者がこの平野で命を落とすし、大地が血を吸う。

赤茶けたその様から「血染めの大地」などといういわく付きの名で呼ぶ者もいる。

いや、実際呪われているのだろう。

カッツエ平野はアンデッド多発地帯。さらにアンデッドは近くに寄り集まると強力な個体が生まれるらしく、それを未然に防ぐ意味合いもあつて軍や冒険者、ワーカーマでもが定期的な討伐に動いている。だがそれでも稀に、大軍が発生したり強力な個体がいきなり現れることもある。

今回もその類の偶然であるのだろうか。

「……早すぎるわね」

「確かモモン様は以前、カツツエ平野から流れて来たアンデッド師団を壊滅させたのですよね？」

「数ヶ月ほど前だったかな？ 全滅とまではいかなかったが、相当数は倒しきったはずだ」

漆黒のモモンが成し遂げた偉業の一つに数えられる出来事だ。

その後も帝国が軍を派遣し、王国も冒険者組合へ依頼を出すことで掃討作戦を執行している。

なので今回の件が、以前モモンが壊滅させた集団と関係があるとは思えない。

「なら、また新しく大群が発生したということなのだろうか……」

「いくらなんでも、間隔が短すぎる」

「変。リーダー、これは慎重に行くべき」

イビルアイの疑問の声を、双子が引き継いで話す。

ラキユースもその声に頷くが、どうやら彼女は他にも疑問があるらしい。

「どうかされましたか？」

「いえ、この謎のアンデッドというのが気になるんです。本来、アンデッド師団程度なら

ばアダマントイト級を呼ぶほどの依頼ではなく、精々がミスリル、オリハルコン級のもの。ですがそれを飛ばして私たちにまで声がかかるとなると……」

「謎のアンデッドが非常に強力、ということでしょうね」

「それだけじゃねえぜ。ほら、依頼主のところを見てみるよ」

ガガーランの太い指が示す先にあつた文字に、一同が驚く。

そこにはバハルス帝国という国からの——言い換えれば鮮血帝直々の——依頼である旨が記されていた。

「王都うちの組合長曰く、元々この依頼はエ・ランテルの組合に出されたものらしい。つまりは『漆黒』への依頼ってことだな、実質」

「なるほど。それが巡って、王都にまで届いたというわけですか」

モモンたちがエ・ランテルを出立したすぐ後に、この依頼が帝国より寄せられたようだ。

しかし『漆黒』がしばらくあの都市を離れるということ、代役になり得る者がいる王都へ流れてきた。

厄介だろ？ とガガーランが二人へ問いかける。

その意味を帝国出身であるアルシエは理解できた。

バハルス帝国では冒険者の地位が、王国よりもやや低い。その理由は有能な軍——帝

国騎士団の存在があるからだ。常備兵として国に雇われている彼らはかなり質が高い騎士である。モンスタール退治など、多少の問題ならば彼らが派遣されれば解決できる。もちろん騎士団だけで手が足りるはずもないので冒険者組合がしつかりと機能しているのだが、帝国民にとつて最高の盾とは冒険者ではなく騎士団のことを指すのだ。そんな帝国から、わざわざ毎年戦争を仕掛けている王国の冒険者組合へ依頼。

冒険者が国境に囚われにくい存在であるにしても、違和感がある。

まず可能なら、軍や自国の冒険者を動かすだろう。

それをしていない？ まさかあり得ない。ならば――。

「実は帝国は既にこの問題に対して騎士や冒険者、ワーカーも送り込んだらしい」

「結果は？」

「壊滅だよ。生き残った奴の証言で、謎のアンデッドが現れたことがわかったそうだ」

アダマントイト級に相応しい依頼、というのも領ける事態だ。

だが、帝国にも二つ同格の冒険者チームがあったはず。そこへの依頼を飛び越して、

漆黒への実質指名依頼とした理由は……考えられるのは一つ。

「さすがは鮮血帝ね。気に喰わないところもあるけど、賢帝と呼ばれるだけあるわ」

「ヤルダバオトの一件を聞いて、モモン様の実力をそこらのアダマントイト級冒険者と比較にならないと見抜いたのだろうか」

ラキユースはどこか悔しそうに目を瞑り、イビルアイが誇らしげに頷く。
ジルクニフ・ルーン・ファアロード・エルニクス。

瞬く間に国の体制を変え、富国強兵を成し遂げた前代未聞の天才皇帝。

実家が貴族位を剥奪され苦勞したアルシエでさえも、その評価には同意するしか
なかった。

「つまり、あの血みどろ皇帝から見ても」

「この依頼は、『蒼の薔薇』でも手に余る案件」

「だが受けないわけにもいかねえ……俺たちは冒険者なんだからな」

ガガーランが笑う。そこには積み上げて来た矜持と、ちっぽけな強がりが含まれてい
るように見えた。

決意のある言葉を聞き、モモンが腕を組んで何かを考え始める。

しばらくの沈黙があつて、あまりに彼が微動だにしないものだから、声をかけるかど
うか蒼の薔薇のメンバーたちが視線を送り合う。無言のコミュニケーションが結論を
出すよりも早く、アルシエが声を出した。

「あの、モモンさん……?」

「ん、すまない。ちよつと考え事をしていた」

「何をそんなに悩んでいたんですか?」

「悩みというほどのものじゃない。ただ『漆黒のモモン』は奇妙なアンデッドと縁があるな、と」

どこか他人事のような口ぶり。

時々彼は、そんな風に存在を希薄にする時がある。

「まあいい。蒼の薔薇の皆さん、よろしければ私たちにもその依頼手伝わせてください」「有り難い申し出ですが、元々そちらに來た依頼。モモンさんたちが主導で、私たちが手伝いという形でも構いませんよ？」

冒険者たちが合同で依頼を受けることは多々ある。

それは人数不足であったり、メンバーの足りない部分を補うためだ。

なので報酬は人数割り当て、もしくは参加チームで均等に分けることが多い。だが難しい依頼を成し遂げたという名誉は、大体が主導で依頼を受けたところに与えられる。もちろん協力チームにもその栄光は与えられるが、主導のチームが最も多いことは間違いない。報酬の分配に関しても、一言物申すことも可能だろう。

だが彼は、その有利な提案に対して首を横に振る。

「元々はそうでも、今は違います。こちらが手伝うのが筋というものでしょう」

「さすがはモモン様、器の大きい御方だ……はあん……」

「何より名誉や榮譽など、私にはどうでもいいものだ。たとえば依頼などなくても危機を

知れば駆けつけよう。未来に誰かが涙を流すなら、現在でその種を斬り捨てて見せよう」

黒い兜の中から、相棒へ力強い視線が送られる。

「誰かが困っていたら、助けるのは当たり前だからな」

「……はい、何も問題はありません」

あとはそちらの意見次第だ、と視線をラキユースへと送る。

彼女は安堵か、それとも英雄の度量に関してか、微笑を浮かべた。

「ではモモンさん、アルシエさん、よろしくお願ひします」

「こちらこそ。早速ですが準備に取り掛かりましょう。あまり放置すると、さらに強力な個体が生まれる可能性もある。仕事は早い方が良い」

「そうですね。すぐに必要なものを買って揃えて……まずは平野に一番近い都市、エ・ランテルに向かいましょうか？」

カルネ村

酷い雨だ。矮小なこの身を打ちつける。

世界そのものが泣いているかのようだ。

雨除けの外套を被ってはいるが、それでも冷たい雫は体力を奪っていく。

視界の見通しも悪く、馬に乗って駆けるのもいい加減辛くなってきた。

いきなり雨が降りつけてきて、中継の目的地をエ・ランテルから近隣の村へ変えたのは正解だった。

ザアザアという音に負けないように、先頭を走るモモンが声を上げる。

「皆さん、もうじきカルネ村です」

「はい。それにしても凄しい雨。カツツエ平野に着く頃には晴れるといいのだけれど」

蹄に弾かれ泥が跳ねる。

彼のすぐ後ろに着けるラクユースが、目で周囲の状況をうかがう。

ほど近くにトブの大森林があるため、ゴブリンなどのモンスターが姿を見せてもおかしくないからだ。しかしそれは杞憂だろう。さすがの奴らも、この雨の中わざわざ人を襲おうとは思うまい。実際、村にしては立派な塀に囲まれたカルネ村にまではなんの遭

遇もなく辿り着けた。ただ門番として雨外套を被った随分と屈強な小鬼ゴブリンが出て来た時には、モモンを除く女性陣皆が驚きの声を上げた。

今まで持っていた小鬼という種族への印象を大いに壊してくれる個体に村長宅へ案内される。立派というほどのものでもない、一般的な村家屋という風情の建物だ。

扉を開ければ、若い女性が出迎えてくれる。

「ようこそカルネ村へ……あつ、モモンさん。エ・ランテルでは助けていただきありがとうございます。うございしました」

「ん？ ああ、そんなこともありましたね。いえ、お気になさらないください」

若い女性はエンリ・エモットというらしい。明るい笑顔を見せ、如何にも村娘といった出で立ちではあるが、彼女がこの村の現村長であるらしい。最近村長が交代したそうだが。辺境の村ならば比較的若い者が村長など代表を引き受けることはままあるが、それでもエンリの歳を考えると異様なほどに早い。

それだけ彼女にはリーダーシップを発揮できる素質があるということなのだろう。

モモンが素晴らしいと称えると、彼女は気恥ずかしくも少し複雑そうな表情で微笑を浮かべた。

「それで、お願いがあつて伺つたのですが——」

世間話もそこそこに、モモンは事情をかいつまんで話した。

「この雨の中、エ・ランテルまで向かうのは厳しいので、一晚村に泊めていただけませんか？」

「はい、それは構いません。ただ、こんな辺鄙な村ですから客人をもてなすだけの場所がないんです。それでもよろしければ、空き家が幾つかありますのでそちらを使つてください」

「雨風さえ凌げれば問題ありません。ありがとうございます」

また小鬼に案内され、村長宅から少し離れた空き家へ一行は移動する。

本来ならまだ日の昇っている時間帯だが、分厚い雲に覆われた曇天は世界を薄暗く陰らせていた。時折、稲光が走つたりしていいよいよ本格的に荒れ始めるのだらうと思わせた。

気分が下降線を辿る中、前を歩く小鬼へモモンが声をかける。

「それにしても、随分と立派な塀ができていますね。以前来た時のものとは比べ物にならない」

「ええまあ、この村も色々大変でしてね。次いつ災難が襲つて来るかもわかりませんか。とある魔法詠唱者マジックキャスターの御方の手を借りて、急いで作つたんですよ。大したものでしょう？」

アルシエは視線を遠くへ向けた。村の景色の向こう側には、必ず塀が見える。

来た時もあったことであるが、確かに立派な塀である。高く、頑丈そうで、一体この辺境村のどこにあればどのものを組み上げられる底力があるのか、という疑問が浮かぶほどだ。さらには見張り台も東西に建っている。

普通の村なら、ここまでの塀は作れないし、見張り台の必要性もそれほど高くない。だが話を聞くに、どうもこの村は最近悲劇に襲われたらしい。外敵への警戒心が非常に強くなることにも頷ける。

協力をしたという魔法詠唱者はよほどの人格者なのだろう。

失礼だが、この村に肩入れしたところで利益が得られるとはアルシエには思えなかった。だからつまり、なんの見返りも求めずただ人助けをした、ということなのだろう。

視線を前へ戻す。

小鬼と隣り合って歩く、漆黒の戦士の背中が目に入った。

「それはそれは、素晴らしい御仁がおられるのですね」

「……うーん。そう、ですな」

「おや？ その魔法詠唱者の方に何か思うところがあるのですか？」

「いえ……その方ではなく使者として送られて来るメイドの方がね、なんとというか薄気味悪いんですよ。ヤバい気配をバリバリ感じちゃってます」

他愛もない会話が続く。

しかし、モモンは何気なく話しているがどうして人の村には小鬼がいるのだろうか？
ちらと視線を後ろに向ければ「蒼の薔薇」の面々も、少し訝し気な視線を向けている。多分これでも人間のリアクションとしては随分と抑えられている方だろう。それほど小鬼という種族は粗暴で乱暴だというイメージが根強い。

「——この雨で冷え込みますし、暖炉にくべる薪を持ってきます」

「すみません、わざわざ」

「いいんですよ。旦那方はエンリの姐さんが迎えた大切な客人。なら仕える俺たちも、できる限りのことはさせてもらいますんで」

空き家は、綺麗に掃除されていた。埃はほとんど積もっておらず、暖炉もすぐに使えるそうだった。

つい最近まで誰かが住んでいたのか、それとも急に誰かが入居することになっても問題ないように管理されているのだろう。

小鬼が持ってきてくれた薪で暖炉に火を起こす。

雨に打たれ冷え切った体には至福だった。渡された布でまず濡れた髪を拭く。

「七人で使うにはちと狭い家なんです、雨漏りや隙間風を気にしなくていいのがここしかないんで、悪いんですが我慢してください。あつ、もしよければ旦那一人ぐらい、俺たちの家で寝てもらっても構いませんよ？」

「そうですね……」

モモンが同行者たちに視線を移す。

そこにいるのは全員が女性だ。モモンにとってこの狭い家は、ある意味居心地が悪く感じるようになるかもしれない。そのことを考え小鬼が気を利かせてくれた発言なのかもしれないが、最後にアルシエの顔を一瞥すると彼は断りの言葉を述べた。

「すいません。私もここで一晩明かさせてもらいます」

「……旦那がそれでいいなら構いませんけど」

「はい、どうせ同じ夜を過ごすなら美女と一緒にの方がいいですからね」

「まっ、それもそうっすね」

モモンの冗談交じりの言葉に、小鬼は邪悪な表情を浮かべた。

それだけ見ればつい戦闘態勢に入りたくなってしまうが、会話の流れを見るに多分笑みなのだろう。異種族の感情を読み取るのは随分と難しいようだ。後ろにいるイビルアイが何やらそわそわとしている気配を感じながらも、アルシエは申し訳なさに俯いた。

「な、なあガガーラン。よ、夜……私は一体どうすれば？」

「うるせえ。とりあえず落ち着けイビルアイ」

「もっとな幼かったら許せた」

「同性だったらアリだった」

「貴方たちね……」

役目を終え小鬼が立ち去ろうとすると、モモンが引き止めた。

「バレアレ氏はいま村にいるだろうか？」

「バレアレっていうと、薬師のンフィーの兄さんのことですかい？」

「ンフィー……そう、ンフィーレア氏とその祖母リイジー氏のことです」

「でしたら家に籠って研究してるんじゃないですかね。この雨じゃ外に出ると思えませんが」

「何度も申し訳ないが、彼らの家まで私を案内してもらってもいいですか？」

「構いませんが、濡れたままですし乾いたころにもう一度迎えに……ああ、そういうことです。わかりました、そんなじゃあ行きましようか」

知人に挨拶をしてくる、と言つてモモンが出て行つた。

残されたのは女性六人。それぞれの格好に目をやると、一名を除きびしょ濡れだ。雨外套を被つてはいたが、鎧には水が滴り、衣服は水に浸したかのよう。下着もどうようだった。いくら髪を拭いて暖炉の火にあたつたところで意味がない。とりあえず、全部脱いで濡れた体を拭うのが先だろう。

唯一濡れていないイビルアイが口を開いた。

「さすがはモモン様、紳士的だな……」

「美女ばかりの空間に、照れただけかもしれないぜ？」

「案外ムツツリ」

「なっ!? も、モモン様はムツツリなんかじゃない！」

「とうか、ガガーランがいるから美女ばかりというのは無理がある」

「ケンカ売ってんのかティナ？」

「はいはい、皆さつさと着替えちゃいましょう。のんびりしてたら、モモンさんを外で待たせちゃうかもしれないし」

リーダーであるラキユースが仕切ると、彼女たちは手早く装備を脱ぎ始めた。

アルシエも部屋の隅に移動し、濡れた衣服を脱ぐ。服が張り付いた不快感からの解放に息を吐く。女性ばかりの空間だ、その肢体を晒すことに抵抗はない。だが如何せん、居場所がないような不安定さを覚えてしまう。

傍に居るのは正真正銘のアダマンタイト級の冒険者たちである。

お零れ、あるいは付属品と呼ばれるべき自分がいることが、場違いに思えてならない。だからなるべく彼女たちの視界に入らないように距離を取ったのだが……。

「ひゃッ!？」

「……アルシエの肌、スベスベ」

濡れた体を拭いていると、いきなり背後から抱きつかれた。

間拔けな声を上げ振り返れば、双子の片割れが色つぼい目で見返してくる。

確か名前はティナ——いや、ティアの方だろうか？ 似すぎていて違いがわからない。

「ちよつ、えつ、なつ……はなしッ、いや、ちよつと!? どこ触つて——」

「今夜一緒に寝よう?」

「……はい!」

「だから、寒いからこうやって抱き合いっこしながら寝よ?」

肌と肌が触れ合い、ティアの手があらぬ場所まで這いまわる。

混乱するアルシエはジタバタと暴れるが、上手く力をいなされて抵抗にもならない。

色々と自身に危機が迫っていることを本能的に理解して、さらなる戸惑いに陥る彼女に助け舟が出された。

「ティア、やめなさい」

「最近ご無沙汰で寂しい。じゃあ代わりにボスが相手して」

ラキユースは微笑む。だがそれは肯定の意味ではなく「いやだ」と顔に書いてあった。

ならば手中に収めた娘を頂かんとさらに触ってくるが、もう一隻の舟が出された。

「そのくらいにしてやれ」

「イビルアイまで……」

「ちなみに言っておくが私も御免だぞ」

「ぶー」

頬を膨らませ名残惜しそうにしながらもティアが離れる。荒くなつた息を落ち着かせ、アルシエは仮面の少女へ向き直つた。

「あ、ありがと——」

「情けない。それくらい自力でなんとかしてみせろ」

鋭い言葉が心を抉ってくる。

正直、アルシエはイビルアイが苦手だつた。仮面の奥から睨まれている気がする。敵愾心を抱かれるようなことをした覚えはないのだが、どうにも嫌われているらしい。それだけではない。あの雨の中、彼女だけ濡れていないのは魔法詠唱者であるからだ。しかもアルシエと同じ魔力系。

その実力のほどはわからないが雨除けの魔法を使う余裕がある分、少なくともアルシエより格上だろう。だというのに、彼女からは魔法詠唱者のオーラが見られなかった。アルシエは「看破の魔眼」とでも呼ぶべき生まれながらの才能を持っている。彼女の目には魔力系魔法詠唱者の魔力がオーラとして映り、どの程度の実力なのかを見極めることができるのだ。

魔力系魔法詠唱者でありながらオーラがアルシエの目に映らないということは、なんらかの方法で隠匿しているということになる。それだけなら稀に敵対者の対策としてしている者もいるが、彼女にとっては吐き気を催させるような記憶がある。

アインズ・ウール・ゴウンもまた、その魔力を隠匿していたのだ。

その解放された圧倒的オーラを見たアルシエは、恐怖に支配された。

そんな過去があるが故に、顔を隠し魔力まで隠すイビルアイを無意識に苦手と感じていた。

「アルシエ、といったか。お前は本当にモモン様の相棒なのか？ どうにも役者不足に思えてならない」

「それは……」

答えられない。答えだけならとくに胸の内に出ているのに。

彼女の疑問は正解だ。だから言葉にできず、声が出ない。

「ちよつと、イビルアイ——」

「黙っている。これはそいつにとっても重要なことだ」

仮面に入ったヒビのような隙間から、鋭い視線を感じる。アルシエよりも幼く思える体躯だが、その佇まいは長年の経験を積んだ者の風格があった。威圧されているような感覚から、つい体を拭いていた布で身を隠し逃れようとしてしまう。

「答えろ、どうなんだ？」

「……その、通り。私は弱くて、とてもモモンさんに吊り合つた魔法詠唱者じゃ——」

「そんなのは当たり前だ。あの強さに吊り合う人間なんておそらく世界中探してもいない」

「えっ?」

イビルアイは、アルシエ、テイア、ティナ、ガガーラン、ラキユース、そして自らを順に指差して言う。

「この中にいる誰も、私を含めて彼にとつては足手纏いにしかならない。アダマンタイト級と呼ばれる者たちでも、だ。お前の前任だったナーベも凄いい奴ではあつたがモモン様と肩を並べるには力不足だったろう」

それくらい実力に開きがある、と彼女は紡ぐ。

確かにヤルダバオトとの一戦を思い出せば、あの動きについて行ける者がいると言われても疑つてしまふだろう。竜種^{ドラゴン}など超越した存在ならばともかく、劣等種である人間が彼と同じ領域に立てるなどとも思えない。

「なら、私が聞いているのは覚悟の話だ。お前に彼の隣に立つ覚悟はあるのか?」

「覚悟は……」

ある、と即答したかった。

アルシエは口ごもる。

エ・ランテルの町でアダマンタイトのプレートを身につけた時、決めたはずだった。たとえどれだけ周りに蔑まれても、彼の横にいろのだと。

彼女と妹たちを救い、冒険者として誘いの手を伸ばしてくれた恩人の役に立ちたい。どんな方法でも役割でも構わなかった。少しでもあの英雄に報いたかった。

だが、現実はどうだろうか。恩を返すどころか、迷惑をかけてばかりだ。

人間の英雄である「蒼の薔薇」の面々と情けなく弱い己を比べ、覚悟どころか自信すらも無くしてしまった。その心には雲がかかり、自意識はズブズブと奥底へと沈んだ。

誤魔化すように暗示の一つでも自らにかけてみたが、浮かぶのは引き攣った笑み。

たとえ一時でも悩みを忘れ当たり前のように振舞えていても、無意識の中でいつだって不相応を感じていた。

———今だって……。

俯き、氣迫を失ったアルシエ。

その姿を見てイビルアイはわざとらしく大きくため息を吐いた。

「質問を変えよう。モモン様はどうして足手まといにしかない仲間をつくると思う

？」

「……」

その質問に、一体どれだけの意味があるのか。

——わかるはずがない。

アルシエはただの人間だ。英雄とは違う。

彼ら、彼女らの眩い信念に憧れることはあっても、理解することはできない。

「貴女は、わかるの？」

「少なくとも、お前よりはな」

自信に満ち溢れた声。たったそれだけで、嫉妬すら覚えてしまう。羨ましい限りだ。彼女ならモモンの隣でも相棒としてやっていけるのかもしれない。

——弱くて、守られることしかできない私とは大違い。

そんなアルシエの負の側面に寄り添った思考を読み取ったのか、イビルアイは強い感情の籠った声で釘を刺した。

「お前と彼の間は何があつたのかは知らん。だが庇護対象として守るため、なんて言つたらぶつ飛ばすぞ」

遠くで雷鳴が響く。その轟音は、アルシエの意識を横切り何事もなく過ぎ去った。

仮面の奥、隠された瞳と視線が交わるのを感じた。

「でも、私は弱い。彼にとっては、きつとなんの役にも立てない」

「彼は役にも立たない弱者を仲間にして危険な場所へ連れて行ったりはしない。そんな無責任な男ではない……と私は思う。間違いない」

庇護対象ならそういうものとしてしつかり守るだろう、と彼女は言う。

「期待されてるんだよ、お前は」

「期待されてる……私が？」

イビルアイが頷く。しかしアルシエの反応は鈍い。煮え切らない態度に、苛立つたのか荒げた声で捲し立てる。

「ああそうだよ！ ああ強い男に必要とされてるんだぞ！ だというのに、うじうじうじうじうじとッ！ ずっと自信のない顔してッ！ 辛気臭くて鬱陶しいッ！ そんなに苦しいなら代われ、羨ましいッ！ ……ゴホンッ、いや最後の一言だけは忘れろ」

不意に正気に戻り、咳払いを挟んで仕切り直される。

「たとえ弱くとも彼のためにやれることはいくらでもある。たとえば彼が強敵と一対一で戦えるよう露払いしたり、彼が全力で戦えるように周りの状況を整えたり……お前にだって役立てることが一つや二つ、あるはずだ」

いつの間にか、仮面の隙間から感じる視線に険がなくなっていた。

二人のやり取りを見守る者たちも、やれやれと肩を竦めている。

「そんなもの本当にあるのか、って顔だな？　あるさ。ないなら作れ、考えろ。どんなに苦しくて、辛くても考え続ける。それがあの英雄の隣に立つということだ」

イビルアイの言葉が、アルシエの心の中に流れ込んでくる。一字一句が熱を持ち、脈動し、どうしようもなく強く意識させられた。雲に隠れ、沼に沈んでいたはずのアルシエの意思が浮かび上がる。

「もう一度だけ聞くぞ、お前に覚悟はあるのか？」

「……………ある。私は、彼の隣を歩く」

自らの肯定は、臆気だった意思の輪郭を明確にさせた。

何をしたいのか、何をしなければいけないのか。迷走していた彼女の心にかかった霧が晴れた。息苦しさが消えた。草原の澄み渡る空気を、胸いっぱい吸い込んだような気分だ。

日頃、無表情気味なアルシエの顔に笑みと呼べるものが薄っすらと浮かぶ。

それを見て、イビルアイは視線を逸らした。世話が焼ける、とでも言いたげな仕草だった。

「その言葉、決して忘れるなよ」

「うん———ありがとう、イビルアイさん」

「イビルアイでいい。まったく……」

ブツブツと文句のようなものを垂れ流しながら、暖炉に両手をかざす。

そんな彼女を見て、仲間たちは微笑ましいものを見たかのような表情を浮かべた。

「ウチの魔法詠唱者は素直じゃねえな。そのくせ面倒見がいい」

「ふふ、そうね」

「ツンデレ」

「可愛いところある」

「うるさい！ 聞こえているぞ！ さっさと服を着ろ！ 体が冷えて体調を崩すぞ！」

真相

モモンが用のある人物は、エンリが住む村長宅の隣にある何やら奇妙な臭いを漂わせる家屋にいた。

雨で多少和らいでいるが、玄関前に立つと案内してくれた小鬼ゴクリンが表情を不快気に歪める。彼らの表情は読み取り辛いが、これはきつとそのままの表情だろう。

小鬼が扉をノックする。反応がない。諦めずに、二度三度と叩いた。

しかし相変わらず反応はなく、不在なのだろうかとモモンが問うと小鬼が首を横に振った。

「これは研究に没頭し過ぎているか、寝不足でぶつ倒れたかのどちらかですね。万が一倒れていたらヤバいんで、開けて入っちゃいませう」

そう言つて無遠慮に扉を開け放つ。

瞬間、粘膜という粘膜を突き刺すような刺激臭が襲つた。

家屋の外に漂う異臭など残り香でしかなかったようだ。家の中に籠つたその匂いは強烈で、流石のモモンも兜の中で表情を険しくした。小鬼は慣れているのか、顔の前で手を払いながら中に入っていく。

「ンフィーの兄さん、客人を連れてきましたぜ！」

大声を張り上げると、部屋の中で鈍く響いた。

すると小走りする音が聞こえて来た。部屋の奥の扉が開き、前髪で目元を隠した少年が口到人差し指をあてながら出て来た。しー、と静寂を求める彼に従い一人と一体は押し黙る。

「ごめん、今ちようどおばあちゃんを無理やり寝かせたところだからさ」

「まあたぶつ倒れそうになるほど研究してたんですか、リイジーさん？」

「そうなんだ、困ったもんだよね……つていうかゴウ——じゃなくてモモンさん!? どうしてこちらへ？」

「お久しぶりですンフィーレアさん。大雨に降られてしまい、この村に一晩お世話になることになったので、挨拶をさせていただこうかと思ひまして伺いました」

ンフィーレア・バレアレ。

元は凄腕薬師リイジー・バレアレの孫ということと、希少な生まれながらの才能持ちということとでエ・ランテルで有名だった人物だが、色々あつて祖母と共にカルネ村に移り住んだ少年だ。『漆黒』のモモンが冒険者として初めて受けた依頼の主でもある。その後は顔を合わせていなかったが、縁のあることは間違いない。

「そんなわざわざ挨拶だなんて。本来ならこちらからお伺いすべきなのに、すいませ

ん」

「いえ、本当に偶然立ち寄っただけなので、そんなお気になさらないでください」

ただ一度依頼を介して知り合った相手、という割には腰の低いンフィーリア。

小鬼は前髪の間から見える彼の瞳に憧憬の念を見て取り、そういうものかと納得する。

「んじゃ、旦那にンフィーの兄さん。オレは戻りますね」

「道の案内をありがとうございますました」

「うん、ありがとう。えつと……カイジャリさん」

「気にしないでください旦那。ンフィーの兄さんも俺たちを見分けられるようになったみたいで」

「エンリほどじゃないけどね」

雨外套を被り直し、小鬼が雨の中へ消えていく。

逆にモモンは雨外套を脱ぎ、玄関へと置かせてもらった。長居をする用はないのだが、すぐに仲間たちが待つ家屋へ戻れない事情がある。バレアレ家の二人が生業とする水薬製作に興味があると言って、工房を見せてもらうことになった。

普通の部屋に、無理やり専門の器材を敷き詰めるように置いたそこは『雑多』という言葉がふさわしい。怪しい色をしたお茶を淹れて来たンフィーリアに丁寧に遠慮の断

りを入れ、モモンはとある器具に目をやった。彼は詳しい知識を持つているわけではな
いたためその器具の正体を正確には掴みかねたが、水薬や錬金アイテムの製造に関わるも
のであることは間違いなかった。しかし、他の器具たちと比べて異様な雰囲気を感じ取
れる。デザインからして技術レベルが突出しているように思えるのだ。

まじまじと眺めていると、ンファイレアが申し訳なさそうに言う。

「すいません、まだソレの使い方は完全に把握できてないんです」

「私に謝ることなんてありませんよ」

「そう言っていただけと……さて、他に誰もいなくなりましたしおばあちゃんも寝て
います。それでは本題に入りましょうか。今日お越しになられたのは進捗具合の確認
ですか？ でしたら一応こちらに今のところの成果があります」

液体の入った瓶をいくつも立てかけた棚の中から、二本の瓶が取り出される。

少し赤みの強い紫色をした液体が入っていた。

「ゴウン様がお貸しくくださった器材はやはり凄いですね。研究を進めれば進めるほど
水薬には、もっと改良の余地があることがわかりました。あの器具に関しても使い方は
まだ色々隠されていていそうですし」

瓶がモモンへ差し出される。

それを前にして、彼は沈黙し、動きを見せなかった。

「ゴウン様？　どうかされましたか？」

「……………いえ、なんでもありません。では拝見させてもらいますね」

「はい。前回お渡ししたものと大差はありませんが、色味が赤に近くなりました。効能は実験もまだなのでなんとも。ただゴウン様のご依頼である赤い水薬の再現に、僅かずつですが近付いているという感触があります。それと——」

ンファイレアは饒舌に新しい水薬について語る。

きつとそれは素人にはよくわからない話なのだろうが、それ以前に今のモモンの耳には届いていなかった。

彼が口にした名が頭の中を駆け巡った。

同じ名を語る化物を知っている。

同じ名をガゼフが挙げたことを憶えている。

その話ではゴウンなる魔法詠唱者マジックキャスターが、どこかの村で彼の窮地を救ったのだとか。

さらには先ほどの小鬼はカルネ村の防備を固めるために、とある魔法詠唱者が協力してくれたと言っていた。

あの化物が根城にしていたナザリック地下大墳墓は、この村のほど近くだ。

最後に、ンファイレアがモモンのことを「ゴウン様」と呼んだことを思い出す。

彼自身、漆黒のモモンという存在に対して理解しきれていない部分があった。

バラバラだった情報が一つに繋がり、モモンへ真相を提示した。

「———そうか………奴が………」

「えっ、奴………?」

「なんでもありません。ふむ、さすがはバレアレ氏。いい仕事をされる」

受け取った紫色の液体をまじまじと眺め、満足げに頷いて見せる。

「キミに会いに来た甲斐があつたというものだ」

「お褒めに預かり光栄です」

「では一度これはお返し———いえ、やはり成果としてこのまま受け取らせていただきますでしょう」

「はい。また進展がありましたらルプスレギナさんを通して連絡させてもらいます」
「よろしくお願ひします」

受け取った水薬の瓶を丁寧に布で包み、割れてしまわないように収納する。

別れを告げ、また雨外套を被る。雨はさらに激しさを増しているようだった。

そろそろ女性陣が着替え終え戻ってもいい頃だろう。

しかし、彼は一人肩を竦め別の方向へと歩を進めた。

雨を嫌い村人たちは皆家の中にいる。酷く目立つ偉丈夫も、この時ばかりは誰の目にも晒されない。

そのまま村の隅へ——誰にも見つからない死角となる場所へ向かった。誘われた、というべきだろうか。

村の片隅には一人の女性が立っていた。

目を釘付けにするような絶世の美女だ。褐色の肌と三つ編みの髪が良く栄えている。それだけでも十分だが、美しい細やかな刺繍が施されたメイド服に、背に提げられた奇怪な武器がより彼女の存在感を引き立てていた。

モモンはまるで待ち合わせでもしていたかのような軽やかな足取りで彼女の前に立った。

「随分と熱烈なお誘いだな」

「この程度の殺気、アンタにはなんてことないっすよね？」

「お名前を聞いても、美しいお嬢さん？」

「しらじらしいっすよ……まあいいか。ルプスレギナ・ベータよ。ここに呼んだ要件は、言う必要あるかしら？」

間違いないじゃない

件の偽物がカルネ村へ侵入したことをいち早く察知したのはルプスレギナ・ベータであつた。

ナザリツク地下大墳墓の戦闘メイドチーム「プレアデス」の一員である彼女は、事態を重く受け止めずぐさま『奴』の対応を主より任されたデミウルゴスへと報告しようとした。しかし、連絡が繋がらない。彼は最近非常に忙しい身である。主に仕える全員が羨むほどに、重要な案件をいくつも任されて、それこそ休む暇もない——どころか第九階層の廊下を急ぎ足で進むほど多忙を極めていた。

最も迅速に行える魔法による連絡に応じないということは、盗聴などの対策をすぐさま行えないほど手の離せない状況ということだろう。デミウルゴスならばすぐに仕事を片付け、間もなく折り返しの連絡を送ってくるに違いないが、事は一刻を争う可能性がある。

ルプスレギナは迷ったが直接、主へ指示を仰ぐことにした。

すると奴へ接触し、少しでも情報を引き出すよう命が下った——もちろん安全重視、何かあれば即逃亡を厳命されている。

そして彼女は村の片隅で待つことにした。

ナザリックにとって重要人物であるとされるンファイアが住む家。その中へ入った者に向かつて殺気を飛ばす。

鈍く愚かな人間なら気付かないかもしれないが、奴の実力は忌々しいが保証されていた。

鬱陶しい雨だ。雨除けの魔法を自らにかけていても、至高の存在より賜ったメイド服が濡れて汚れてしまうのではないかとヒヤヒヤしてしまう。

だから、漆黒の鎧を纏った偽物が早めに現れてくれたのは喜ばしかった。

「随分と熱烈なお誘いだな」

軽い調子に苛立ちを覚えてしまう。

それも仕方のないことだ。なにせ奴は主より「漆黒のモモン」という外装を奪い、ナザリックの仲間他、彼女の姉妹を傷付けたのだから。

今すぐ襲いかかってその首を撥ねてしまいたかった。

だが実力的にも、なにより主から受けた命令的にもそれは許されない行為だ。

泡立つ心を鎮めるように息を吐いて、ちらと自らの足元へ目をやる。そこへ潜む「身代わりの盾」を強く意識し、鋭く偽モモンを睨み付けた。

「怖い目だ。美人が台無しだぞ」

「やめてくれる？ アナタにお世辞を言われても寒気がするだけ」

「つれないな……とりあえず、この村に来た理由辺りを話せばいいのか？」

「あら、意外と素直ね」

「天気も悪い。お互い下手な小競り合いなどしたくないだろう」

すつ、と彼の頭がバレアレ家の方角へと向けられた。

それで十分意味は伝わっただろう、と肩を竦めて見せてくる。

無言で頷く。

以前、カルネ村の重要性を説かれた彼女は互いの立場を理解できた。

「さて、理由が大したことじゃない。雨に降られたから宿を貸してもらっただけさ」

「……それだけ？」

「ウソだと言つて欲しいのなら、そう口にするのもやぶさかではないが」

「わかったわ。それで納得しましょう」

「それはなにより。ではこちらからも聞きたいことがある」

「答えるだけでも？」

「閉口するならそれで構わない。私もこれ以上は何も答えなくなるだけさ。最低限キミは聞きたいことを聞けて、私も伝えたいことは伝えた。平穏な夜を享受できるなら、それ以上を望むのはワガママだからな」

飄々とした態度。何もかも見透かしたかのような言い草は、腹立たしさを過熱させる。

ルプスレギナは自身が頭脳面で優れているとは思っていない。偽モモンに対して優位に立つのは難しそうだ。不安がある。この場に立つのが姉のユリ・アルファ辺りであれば、もつと毅然とした態度を貫き通せたのかもしれない。だが今は自分一人でなんとかするしかなかった。

これは好機だ。こちらが質問に答えれば、相手の情報をより多く得られるかもしれない。

もちろん嘘ということも考えられるが……話を聞いてから答えるかどうか選ぶこともできる。

ならば、と無理をしない範囲で踏み込むことを決めた。

「聞くだけ聞いてあげましょう」

「難しいことじゃない。アインズ・ウール・ゴウンはどんな奴だ？ キミから見た奴の人物像を教えて欲しい」

「……一体アナタはどんな言葉を望んでいるのかしら？」

「ありのままを。私が持つ奴の人物像と、近くで見る奴の姿。その擦り合わせをしたいだけだ」

ルプスレギナの警戒心は最大にまで引き上げられる。

質問の答えを知ったことで相手が得られるメリットをはかりきれない。自身の考えが至らないことで致命的な情報を与えてしまう可能性がある。故に、口を開くことを躊躇う。

もうここで切り上げるべきか——そんな迷いを見抜いたように偽モモンがまた口を開いた。

「ではこうしよう、私の推測を聞いて間違っていたら指摘してくれ」

答えを待たず、彼はつらつらとアインズ・ウール・ゴウンへの評価を語り始める。

そしてその評価は、的確と言うしかなかった。

絶対的支配者に相応しい圧倒的力を持ち。

堂々と佇みながらも、荘厳な気配を纏う。

冷酷、残酷でありながら慈悲深く。

時には虫けらにまでも、救いの手を差し伸べようとする。

強いて指摘するのなら、さらに他の追隨を許さぬ叡智を宿していることぐらいか。

そんな主、アインズ・ウール・ゴウン。

至高の四十一人をまとめ上げた、最高の支配者。

「——とまあ、こんな感じであろうと思っただが、どうだ？」

「……そこまで……そこまでわかつていながら」

はらわたが煮えくり返りそうになっていた。

どうしてこの偽物は、ここまで人の神経を逆撫でするのが上手いのだろう。

「どうして……アナタはアインズ様が如何に素晴らしい御方であるかを理解している。なのに何故、あの御方に逆らうような真似をするの!? わかるでしょう、至高の四十一人すらもまとめ上げたアインズ様に支配されることこそが、全ての者にとつて幸福になる道。逆らうな、従え。その首を差し出せと求められれば黙って跪き首を垂れるべきなの。それこそが正しい選択よ」

なんとか激情を抑え込もうとする。

だが返ってきたのは、嘲るような笑い声だった。

「何が可笑しいのかしら?」

「失礼……あまりに狂っていたもので、ついな……おっと、勘違いしないでくれ。キミの奴への崇拜を否定するつもりはない。どれだけ狂つていようが、何を信じ、何を胸に生きていくかはそれぞれだ。間違いじゃない。正しくもないだけで。私だって同じだ。だから勝手にすればいい」

だが、と彼は続ける。

「そいつを他者へ押し付けるべきじゃない。キミが奴を崇拜するように、他の者も何か

大切なものを胸に抱いて生きているんだ」

「それこそが間違いなのよ。アインズ様こそが至高の絶対、それ以外の塵芥も同然だわ」
意見が平行線を辿ることは目に見えていた。

だからルプスレギナは冷たい視線を決して偽モモンから離さず、彼もまたどうしようもないと肩を竦めた。

「もうこの話はいい？ だったらこつちの質問。さっきも言ったけど、どうして逆らうの？」

「困っている人がいて、助けたらキミたちと敵対した。それだけだ」

「それだけ？ ナザリックから、アインズ様からモモンの鎧を奪っているくせによく言うわ」

「それに関しては奴が悪いとしか言えない。そもそも私が現れる時点で、モモンという存在が導く可能性は潰えていた。ゴウンは英雄には相応しくないと判断されたんだらう」

「……誰がそんな勝手な判断を？」

「さてな、それは私も知らない」

嘘を吐いている様子は……ないように思える。

だがいくら注意深く観察しても、のらりくらりと真意を感じさせない態度には疑いの

目を向けざるを得ない。

「わけのわからないことを」

「私だってわからないことだらけさ。だから自分の意志に従って行動している」

「誰かに命じられていたり、協力者がいるわけじゃないの？」

「どう思う？」

「質問を質問で返すのは礼儀知らずのすることだわ」

「それもそうだな、ならずつと質問するのも不公平だと思わないか。平等にいこう、私からもまた一つ聞きたい。キミが先ほど口にした『至高の四十一人』とは何者だ？」

「ッ——！」

喉が引つかかるような音を発した。ルプスレギナは自身の失態にやっと気付いたのだ。

感情の荒ぶりを抑えたつもりでいたが、無意識に余計な言葉を口にしてしまっていた。まるで穴倉に籠っていたはずが、誘い出されたところを一刺しされたような気分だった。

——至高の御方々の存在を知られるのは致命的か？

否……のはずだ。彼らはもういない。ナザリックを離れ、姿を御隠しになられた。

現在大墳墓に残り、ルプスレギナたちを支配するのはアインズ・ウール・ゴウンただ

一人。

——ならば、問題はない。

そう思いたかった。

しかし——目の前にいる漆黒の戦士へ目を向ける。

憎き相手であるが、それ以上に奴と話していると異様なほどに感情を揺さぶられる。いや、感情なんて表層のものではない。そのさらに奥、心や魂と呼ばれる根源が偽モンの言葉や仕草一つ一つに熱を帯びて反応を示している。

デミウルゴスなどが持つ精神に働きかけるような特殊技術^{スキル}などではない。

彼の存在や在り方というものがそうさせるのだとルプスレギナは感じた。

「答えたくないなら、また私の推測を聞いてくれ。話しぶりから察するに、ゴウンと同格の存在でキミたちが崇拜していた相手だ。だが今はもうゴウンを残していなくなった……亡くなったのか、なんらかの理由で離れていったのか？ 少なくともナザリック地下大墳墓からは姿を消した」

どうだ、と問うてくる声が嫌味のように聞こえる。

忌々しい。本当に、忌々しい。

この男、言葉だけでなく表情を僅かな身じろぎからすらも情報を掠め取っているようだ。

でなければ短いやり取りの中で、あれほどの確な推測をたてられるはずがない。

——これ以上はもう無理ね。

ただ此処に立っているだけで、ナザリックに不利益をもたらしかねない。

それは御免だ。失望され、もし最後まで残ったアインズにまで姿を隠されたら——

想像しただけで血の気が引く。目の前が真っ暗になる思いだ。

ルプスレギナ含め、至高の存在に想像された者たちが最も恐れる事態。

その原因をつくるわけにはいかない。

淡く崩れそうになる精神を立て直し、彼女は努めて仮面を被った。

「チツ、チツ、チツ、そいつは教えられないっすね。私はそれでも仕事中にはできるメイド

！ 敵にむぎむぎ情報を与えてやるようなヘマはしないっすよ」

「……できるメイド相手なら仕方ない。これ以上聞くのは諦めるとしよう」

「賢明な判断っす。じゃあ私はこの辺で、村で悪さしちや嫌っすよ？」

「ああ……つと待ってくれ。大事な用を忘れるところだった」

空を飛んで村を後にしようとするルプスレギナをモモンが引き留めた。

彼は懐から何かを取り出す。見れば何かを包んだ布らしい。それを差し出される。

罨などを想定し訝し気な視線を送るが、そう警戒するな、と笑われる。

やはりイラツとくる奴であるが、確認もせず去るのは憚られた。

「なんつすかそれ？　もしかして指輪!?　求婚つすか!?　出会っていきなりプロポーズつすか!?　いくら私が超絶美少女だからって！　無理つす無理つす、私には心に決め人がツ！」

「いるのか？」

「……マジトーンで聞かないでくれる？　まあいいつすか。で、なんなんすか？」

「バレアレ氏の成果だそうだ。あの場で預かって、キミに渡した方が何かと都合が良かったから受け取っておいた。ゴウンに渡してやってくれ」

警戒しながら素早く包みの布をひったくった彼女は中身を確認した。

確かに、ソフィーレアたちが開発している水薬ポーションの試作品らしい。

「ついでに言伝も二つ頼む」

「おたくのルプー嬢を嫁に下さい、って伝えればいいつすか？」

「じゃあそれを含めて三つだな」

「……冗談じゃないつす」

べえ、と舌を出して拒絶する。それが可笑しかったのか、彼は肩を揺らしていた。

「クク……それで一つ目だが、ガゼフ・ストロノーフが礼をしたいと言っていた。手紙の一つでも送ってやれ、と」

「ふむふむ。それならまあいいすよ。もう一つは？」
「いつでもかかってこい。そう伝えてくれ」

それだけ言うとは彼は踵を返し、手を振り去っていく。

紛れもない挑発発言。だがあまりにもあつさりとし過ぎていて、ルプスレギナは一瞬呆気に取られた。

雨が強くなる。雷鳴も煩くて。

なんだか気が抜けた。

「一体何なんすかね、アイツ？」

盗聴、盗み見対策や防音の魔法を次々解いていく。直後にデミウルゴスの配下より《伝言^{メッセージ}》が送られて来た。やはり彼は相当忙しいようだ。魔法により空へ飛び上がり、念のため不可視化の魔法もかけておく。

暗澹たる雲の下で、次にしなければいけないことを考える。

まずはアインズへ報告。そして成果の提出。そして伝言。

だが、あの挑発を主へ伝えるのは如何なものだろうか？

うんうんと頭を悩ませ唸りながら、彼女はナザリックへの帰路を急いだ。

英雄

寝苦しい夜だ。中々寝付けない。

大雨は止みはしたが、地面が吸い大気が孕んだ湿気がジメジメとこの地域一帯を満たしている。夜であつても夏には暑い日があり、今夜はまさに猛暑。日中に大雨で涼しかった分を取り戻すかのように熱を発し、湿気が多いことも相まって汗が額に浮かぶ。息苦しさをすら覚え、これは一晩寝付けないかもしれないと覚悟させられるほど——とかそういうことは全然なく、ただただ胸が苦しくて乙女イビルアイは敷物の上でもんどりを打っていた。

——あああああああッ！ どうすれば、どうすればいい!? 助けてガガラン！

器用にも物音を立てずに転がり飛び跳ね回っているが、見るだけで騒がしい彼女の姿。

誰にも咎められないのは、他の面々は既に夢の中に落ちていくからだつた。

心中で助けを求めた相手も静かに寝息を立てている。普段は体力馬鹿であるはずの彼女だが、流星に大雨の中を馬に乗って長距離移動は疲れたらしい。それにしても初め

て訪れる村で熟睡とは警戒が足りていないと思うが、睡眠の必要ないイビルアイと、彼女が太鼓判を押す強者のモモンが傍にいるのだ。気が抜けてしまうのも仕方がないと言えは仕方がない。

時は夜中。実際は夏の夜にしては涼しくて過ごしやすい気温だろう。

心地よさそうなところを起こすのも忍びないが、まだ起きていて欲しかったのも事実だった。

しかし、と横道に逸れたことを彼女は考える。

これだけ数がいながら、自分含めまともな（と呼べるかは疑問が残るが）恋愛経験があるのがガガーランのみというのはどういうことだろうか？

「冒険に憧れる箱入り娘に、レズ、シヨタ好き……ついでに私か……」

改めて口に出してみても、どうしようもないメンバーだと思った。

他に頼れそうな奴はいないかと考えたが、自身と同じく齡二〇〇を越える老婆くらいしか思い浮かばなかった。

事情があるにしても狭い交友関係にため息を吐きつつ、周囲に目をやる。この空き家にベッドは備えられていなかった。冒険者は野営することも多く、床にそのまま寝ることとも可能であったが村長の好意で厚手の敷物を貸してもらった。元々持つてきていたものも合わせて、女性陣六人は敷物の上で身を寄せ合って寝ている。

ラキユースは姿勢正しく毛布にくるまり、ガガーランは腕を枕にしている。ティナとティアは抱き合うようにして面積の節約に努めていた。イビルアイは小さい分端の方で体を横たえて、その隣には無邪気な寝顔を晒すアルシエが寝ている。

この娘、存外に甘えたがりなのかもしれない。

先ほどまで眠りながらイビルアイの衣装の裾を掴んで離さず、困っていた。

アルシエに喝を入れてやった後、彼女自身の話を聞いた。色々あったようだ。

この世界は理不尽である。若くして多くを失い、大切なモノをその背一つに背負うことになるなど、そう珍しい話ではない。だとしても彼女は少し背負い込み過ぎていた。

家が没落し、親が借金をつくり、返済のために夢を諦め汚れ仕事に就いた。

幼い妹たちがいたこともあって、アルシエは無理にでも大人にならざるを得なかったのだろう。

抑圧されていた——とはまた違うのだろうが、抱えていた問題が一拳にモモンによって救われ一時手を離れたことで、精神的な振り戻しがおとずれたのかもしれない。

——それにしたって、甘える対象が私というのはどうなんだ？

仲間や近い者からはともかく、初対面やあまり関係のない者から見た自分の評価は良くないのは理解していた。拳骨のような言葉選びと、偉そうで生意気な態度。小柄な体と魔法詠唱者という一般人には得体の知れない役割を持つことで、余計に悪評が立つ

た。

アルシエに対しては、変わらない態度で接したつもりだ。いや、モモンが関わってるところもあっていつもより険があつたかもしれない。

少しばかり、アドバイスもしてやつたが……ほとんど彼女の気に入らない部分を指摘しただけ。

だというのに、以降妙に慕ってくる。くつついて来る。ちよつと鬱陶しくすらあつた。

……悪い気はしないが。

—— あんなのでいいのか？ そんなので心を開くのか？ チョロ過ぎないか？

ほんの少しだが、少女の行く末が心配になつた。

いつか悪い男に誑かされるのではないかと。

ただ、まあ。

「しばらくは、問題ないか……」

部屋の隅に視線を向けた。そこには壁にもたれかかるように座る漆黒の戦士がいる。

周囲に気を張りながらも寝る、という戦士職の者が時折やる器用な寝方だろう。剣を傍らに立てかけ、腕を組んでいるその姿は、たとえ寝ていても傍にいる者を三重の城壁で守っているかのような安心感を与えてくれる。

そんな彼を見つめていると……イビルアイは胸を押さえた。
痛い、苦しい、切ない。

二五〇年以上前に鼓動を止めたはずの心臓が締め付けられるような感覚。
これが吟遊詩人たちの語る恋煩いの症状。

長い時を生きていながら、この感覚を初めて知ったのはつい最近だ。

ヤルダバオトという強大な悪に晒されて、もうダメかと思つた時に颯爽と現れた騎士。

圧倒的な力を持つ化物を相手に、二本の剣で互角以上の戦いぶりを見せた英雄。

夢物語にしても出来過ぎであつたが、あの瞬間に彼女は汚れを知らぬ姫の如き乙女となつた。

かつては「国墮とし」と呼ばれ恐れられた吸血鬼ヴァンパイアがたつた一人の男に骨抜きとは。

昔の仲間たちが知れば、なんと笑つて笑うだろうか？

「ああ、想像したら気が滅入つてきた……外の空気でも吸おう」

いつまでも頭の中をピンク色に染め上げておくのも良くない。どうせこのまま悶々していても、無意味に時間が過ぎるだけだ。そういう考えもあつて、徐に起き上がったイビルアイは誰も起こさないように注意しながら外へ出た。

雨は止んでいるが分厚い雲はかかつたまま。

辺境の村にこの時間灯っている明かりなどなく、月も出ていないため真つ暗だ。

それでもイビルアイの目には十分な景色が見える。ちつぽけで、不思議な村である。

「小鬼ゴブリンと共存、か。こんな小さな村で、おかしなこともあるものだ……」

「そうだな。しかし、彼らは中々気の良い連中だぞ」

不意に背後から声がして跳び上がる。体だけでなく心もだ。

惚れた男の声であるのだから仕方ない。

「も、モモン様!」

「驚かせたか。悪かったな、私も少し夜風を浴びたくなつた」

闇夜に紛れるような鎧姿で、彼は空を見上げていた。

「起こして、しまいましたか?」

「いや。元々体を休めていただけで眠っていなかった」

「でしたら、お休みになってください。明日にはカツツエ平野で調査をする予定。貴方が

が万全を期すほど、我々の安全と依頼の成功率は高まります」

「心配はいらない。少々特殊だね、あまり睡眠が必要ないんだ」

そんなはずはない、とイビルアイは思う。「吸血鬼」である彼女は体力だけは疲れ知らずの体であるが、人間という種族はハッキリ言って劣等種だ。疲労を感じ、食事を必要とし、休息や睡眠は欠かせない。種族の枠を超越した強さを持つモモンであっても、

人間である以上は最低限その縛りが課せられている。

眠れる間に眠っておくに越したことはない。

適当な嘘までついた理由は、夜襲を警戒して？

ならば交代で見張りをすればいいだけだ。提案しなかったということは、イビルアイたちに負担を強いることを嫌ったのか、彼女たちでは相手にもならない存在を警戒しているのか。

——もしくは、人間じゃない……とかな。

まさかな、と脳裏に過った可能性を払拭する。

イビルアイは迷ったが、恐る恐る問うた。

「やはり、私たちでは心許ないかだろうか？」

「そんなまさか。頼りにしている。現にキミたちは私の悩みを一つ解決してくれた」

この男に悩みがあるなど、と失礼ながらも彼女は驚いた。

だが少し考えると、彼の相棒が少し前まで浮かべていた表情を思い出した。

「キミだろう、アルシエを導いてくれたのは。随分懐いているようだった。感謝する」

「……わかつていたのなら、モモン様から声をかければ——」

「私ではダメだ」

「そんな、貴方のように素晴らしい御方なら人を導くことなど造作もないでしょう」

モモンは静かに首を横に振った。両頬付き兜に隠され、その表情はわからない。だがどうしてか、彼が少し物悲しそうな表情を浮かべたのがわかった。

「イビルアイ、私はただの英雄なんだ」

「それは……」

知っている。誰よりも。

彼女はその目で、彼の偉業を見届けたのだから。

「誰かが困っていたら助けるのは当たり前——そんな綺麗事が私の根本だ」

「そう自分を卑下するようなことを言わないでください。素晴らしい志だと思えます」

「ああ、素晴らしい言葉だ。だからこそ、モモンという英雄の根本になり得たのだろう。けれど私は、この言葉に対して真に相応しい英雄とは言えない。この言葉を初めて口にした人物がどうかはわからないが、少なくとも私は、ダメなんだ……」

英雄とは暴力装置だ、そんなことを彼は口にする。

「もちろん例外はあるだろう。しかし往々にして人々が想う英雄とは、その圧倒的武力を持つて事を成す存在だ。怪物を倒し、戦争に勝利をもたらし、未知を切り開く——常人には成し得ない偉業が英雄譚として語られ、喜ばれる」

彼が見上げる空は分厚い雲に覆われている。その光景が、そのまま今のモモンの心境なのではないか。そう思わせるような声色だ。

「私も同じだ。圧倒的な暴力で敵を蹴散らし、困っている誰かを救う。そこまではいい……いや、そこまでしかないから問題か」

「自身の意志で弱者を救う。それ以上に素晴らしいことなんてない。それで良いではないですか」

「単なる英雄としてならな。だが、私の胸にある言葉はそれだけでは満ち足りないんだ」
そつと視線が落とされ、小柄なイビルアイが彼の視界に収まる。

些細なことだが、たったそれだけのことで彼女の心はざわついた。

「道端で困っている老人がいれば手を貸そう。親とはぐれ泣いている子供がいれば手を引いて共に探そう。暴力に苦しんでいる人がいれば、その相手を殴り返してやろう。モンスターに大切なモノを奪われた者がいれば、せめて仇くらいは討ってやりたい。それくらいは私にもできる」

だが、真に困っている人はそれだけなのか？

答えは否だ。

自問自答を口にし、彼は続ける。

「私には人々を導くことはできない。心にある迷いや悩みを解決してやる方法がないんだ」

「そんなことはない！ 王都の一件でも、貴方がいたおかげで心を救われた者がいた。

勇気を貰い、己を奮い立たせて戦いに挑んだ者もいた。私だつて……他にも貴方の英雄譚を聞き、人々を守るために英雄を目指す者も絶対にいるはずだ。それは、人々を導いたということではないのか？」

イビルアイは胸に手を当て、押さえる。

胸を締め付けられるような苦しさがあつた。それも強く、万力で締め上げられているような。

これがただの恋慕からくるものでないことは、なんとなくわかつた。

だが、目の前の男に対する感情であることは間違いない。

何故だか、涙を流したくなつた。

とつくに枯れ果てていたと思つていたものが、内より溢れ出そうになる。

仮面で隠され全てを見たわけではないだろうが、そんな彼女の様子にモモンは小さく笑つた。

本当に小さく、自嘲的な色を含んだ笑い声。

「クク……いや、すまない。なんでもないんだ。大した奴がいたものだ、と思つてな」

「何を、言つて……？」

「キミの気遣いは嬉しい。ただ私がまた同じようなことを成しても、それは導いたとは言えない。ただ結果的に良い影響を与えたというだけだ」

「……どう違うのでしょうか？」

難しいな、と彼は眩きしばらく沈黙した。

流れる様子もない雲をじっと見つめ、やがて何かを思いついたのだろう。

指を二本立て、見せるように言った。

「強いて例えるなら、子供に読み聞かせる絵本とモノを教える教師の違いだろうか」

「……？」

「微妙な違いだ。絵本はその在り方で子供心に影響を与え、教師は自らの意思で良き方向へ子供を導く。そんな感じだよ。私は前者はできるが、後者ができない」

「そのくらいのこと、貴方なら——」

「できないんだよ。私はそういう存在だ。現に身近にいた少女の悩みに気付いていながら、私はなんの言葉もかけてやることもできなかった……」

彼は掌を握り込み、開いて、また握る。そんなことを繰り返す。

まるで、自分に掴めるものとそうでないものを確かめるように。

「だから私はキミたちを羨ましく思う。英雄でありながら、人としてありのままに生き、誰かを救い導けるキミたちが。眩しく見えて仕方ない」

「私たちなんて、モモン様に比べれば大したことはない」

「私はそうは思わない。所詮私は、人々が想うただの英雄でしかないだから」

寂しげな彼の言葉は、イビルアイの耳に届き、あとはこの世界の彼方へ掻き消えた。もしかすると、それは誰にも聞かれることなく最期を迎えていた本音なのかもしれない。

「……………つまらない愚痴に付き合わせてしまったな」

「いえ、少し、嬉しいです」

「そう言ってもらえると助かるよ。だが、さっきまでの話は二人だけの秘密にしておきたい」

「構いませんが、どうして私にそのような話をしてくれたのですか？」

「そうだな……………それは多分——」

あまりに自然な動きだった。

ゆつくりと、しかし淀みなく。警戒心など欠片も抱かせない軌道を描いて、モモンの手がイビルアイから仮面を剥がした。

「同じく顔を隠し、何やら秘密を抱える者同士、だからかな」

素顔が外気に晒されても、彼女はしばらく呆然とした。

その生気がない白い肌が、赤い瞳が、人でないことを示す牙が、彼の目に映る。

「気付いて…………」

「少し前にな。中々可愛らしい顔だ、成長しないのが惜しい」

そう言つて、彼女の顔に仮面を被せる。

ズレがないように優しく彼女の顔を両手で包む彼は、まるで悪戯が成功した小僧のようであつた。

顔が見えないなど関係ない。少し弾んだ声が、無邪気な子供を連想させた。

以前会つた時、感じていた彼の印象とはかけ離れた一面だ。

王都で再会した際から、僅かに心に引つかかつていたものがあつた。

元々そこまで長い付き合いでなかつたため、気のせいだと思つていた。

だが今、同行するモモンという男に感じていた違和がハッキリと浮き彫りになつた。

不快なモノではない。

ただ、そのままにしておくのは躊躇われた。

無意識に、イビルアイは問うていた。

「——貴方は、だれ？」

「……私は、漆黒の英雄モモンだ。それは間違いない」

ハツと我に返る。

一体何を聞いているのかと、恥ずかしくなつた。

誤魔化すように、他の話題へと切り替える。

「え、えーと……そ、そうだ！ モモン様、どうしてナーベとコンビを解散したんですか

？」

「漆黒として、私と旅をしていられなくなつた。まあ色々事情があるんだ」

「あれほどの魔法詠唱者、引き止めなかつたのですか？」

「その資格は私にはない。彼女は、彼女の意志でモモンから離れていった。」

「……アイツがその道を選んだのなら、多分それでよかつたのでしよう」

ああ、と彼は短く答えた。

そこにどんな感情が込められているのか、イビルアイには読み取れない。

ふと気付くと、彼はまた空を見上げている。

「何か気になることでも？」

「いや、どうにか星空が見えないものかと思つてな」

「生憎の空模様ですしね……好きなんですか、星が？」

「星、といより夜空が好きだ。宝石箱みたいで綺麗だろう」

昔、むかし、遙か昔。

イビルアイがまだ人間の少女であつた頃、同じことを思つていたような気がする。

霧

カツツエ平野は濃い霧に覆われていた。

「なに、これ……？」

白く、白く、白い世界だった。

実りのない荒野だけがこの地に広がっているはずだった。しかし今、眼前に広がる光景は濃密な霧に覆われた白色の世界。風に揺られ、不定形の白い幕が漂う。どこまでも、どこまでも、変わらぬ景色が続くように思えた。

この地は呪われている。

アンデッドが多発する地帯であり、戦争が起こる僅かな期間を除き、年がら年中霧が覆っていた。

だがここまで濃く、視界を無意味にするほどのものではなかった。

少し離れた丘の上からアルシエは目を細め、自分の視力では何も見通せないことを理解して仲間たちの方を見た。馬から降りじつと霧の世界を見つめるモモンには動揺は見られない。『蒼の薔薇』の面々は、最初こそ驚きを露にしたがすぐに状況の分析へ移行する。

「これじゃあ視界が全く利かないわね……」

「魔法で一時的に晴らすこともできるが、効果は薄いだろうな。魔力の無駄だ」
「私たちなら音である程度の索敵はできる」

「視覚もここでなら少しは働く。けど、中に入ればわからない」

「しかしこの霧の中にやべえアンデッドがいるんだろ。ちつとマズイな……」

あれやこれや、と意見を言い合う五人。その光景にかつてワーカーとして働いていた時のことを思い出す。

未知が目の前に広がった時、アルシエもまた仲間たちと色々話し合っていた。緊張感がありながらも、少し楽しい一時でもあった。

彼女たちに交ざるべきか、と迷った。

だが今の自分の立ち位置は、違う場所にあると自覚し相棒の隣へ向かった。

「モモンさん、どうしましょうか？」

「厄介だな。視界不良による不意打ちは警戒を怠らなければ対応できるが、このレベルの霧だと戦闘にも支障が出る」

「はい。しかもこんな中から正体不明のアンデッドを探すととなると……」

「困難を極めるだろうな。時を改めるべき……だろうか？」

彼の提案は悪いものではない。だが問題の解決にならないのではないか、という疑問

も浮かんだ。

おそらく彼自身もその考えに至っているが故、何処か歯切れの悪い物言いをしているのだろう。

フォーサイトとして活動していた時、アルシエは何度もこの地を訪れている。

アンデッドは狭い範囲でその数を増やすと、さらに強力な個体が生まれるという性質がある。そのためカツツエ平野に現れるアンデッドを狩ることで、国より報酬が支払われる制度があるのだ。彼女たちは指名の依頼などがない時はこの地を狩場として、金銭を稼いだりもしていた。

その際も、この地を覆う霧に何度となく悩まされたがちよつと面倒程度。

これほど濃い霧が出ていれば狩りは中止されただろう。真つ直ぐ歩いて進むことも難しい。しかし幾度も此処を訪れたが、一度としてこれほどの濃霧を見たことはない。どころか、話にすら聞いたことはなかった。この地の歴史について調べたこともあったが、思い当たる記載もなし。

つまり、これは明らかな異常事態だ。

特殊環境変化と呼ばれる現象なのかもしれないが、その原因も不明。考えられる可能性を挙げ連ねて行けば、自然と謎のアンデッドの目撃情報にいき着く。モンスターの中には魔法の力などで霧を発生させるものもあるらしい。件の存在が、そういった能力を

持っている可能性はある。

もしこの濃霧が時間が解決してくれる自然現象であったなら一度退くべきであろうが、その保証もない。その上アンデッドが関わっている以上悠長に構えてはいられない。アンデッドたちが増殖し手に負えない強力な個体が生まれて、最悪近隣の町や都市に多大な被害が出ることも考えられるからだ。

故に人類最高峰のアダマンタイト級の冒険者である彼らは、どうしたつてこの霧の中へ踏み込まなければならぬ。多少先送りにもできるが、意味はないだろう。今できるのは不測の事態を想定し、対応策を話し合つて練つておくくらいだった。

「彼女たちはさすがだな」

モモンの視線は“蒼の薔薇”に向けられていた。短い時間の内に幾つか出た案を素早く検討し、可否を決めている。あの濃霧への対策として、すでに何やら実験を試みようとしているようだ。

未知と遭遇した時の適応の早さも、冒険者としては求められる能力である。

「私たちも交ざつて、一緒に話し合った方が良いのではないのでしょうか？」

「ああ。だがその前にアルシエ、新しい装備の感触にはもう慣れたか？」

新たな杖を持つ手に力が籠る。

彼の言葉に気負っているからではなく、その感触を改めて確かめるため。

以前愛用していた魔法用の杖は、ナザリック地下大墳墓にて喪失した。さらにはローブやグローブなどの他装備もアインズ・ウール・ゴウンたちの追跡のきつかけになってもつまらない、とエ・ランテル滞在中に新しく買い替えている。デザインや性能こそ大きな違いはないが、当初は確かに違和感があった。

本来ならゆつくりと鍛錬するか、力量にあつた実戦を繰り返すことで体に馴染ませる。

だが腰を落ち着けて鍛錬する環境でもなければ、実戦と呼べる遭遇もほとんどなかった。

なのでこれが新装備になつての初実戦になるのだが、アルシエは力強く頷いた。

「問題ありません、十分です」

本当はまだ僅かに慣れきっていない。だがそんな弱音を彼の前で吐くわけにはいかない。

戦闘を行うには十分であり、足りないなら考えればよい。

彼の隣に立つのだ、それくらい一人で何とかしなければ。

「そうか、だが無理はするな。なるべく私から離れないように気を付けろ」

二人で行う連携を最低限確認し、霧の中に何かのアイテムを投げ入れている五人へ合流する。

一体なんの実験だろうかと疑問に思っていると、爆発音が連続して聞こえ、それに合わせるように白い霧のスクリーンに閃光が灯り照らした。

「何をされているのですか？」

「実験。音の伝達と、光が届く距離の」

ティアが先ほど投げ入れていた球状の道具を見せながら言う。

爆音と閃光を撒き散らすもので、本来は敵の視覚と聴覚を阻害する目的の使用らしい。これを霧の中で起動させることでどの程度音と光が情報伝達手段として有効かを調べているのだそうだ。

「私たちが投げて届くくらの距離なら、音は十分有効」

「光もそれなり。ガガーラン、よろしく」

「任せろ。思いつきり投げればいいんだな？」

道具を受け取ったガガーランは力を込めて遠投した。丸い影はすぐに霧の中に消え、ややあつて小さな音が聞こえる。だがアルシエの目には光が瞬く光景は見えなかった。

「うーん、私の目には光は見えないわ」

「私たちも同じ。音もかなり小さい」

「多分この霧、音の伝達率もかなり悪い。遠くにはぐれると、まずいかも」

ラキユース、ティナ、ティアの目にも霧の中から光を見つけることはできなかったよ

うだ。ガガーラン、イビルアイも特別反応を示してないことから同様だろう。ただ一人、モモンだけが別の反応をした。

「微かにですが、私は見えました」

「あの霧の中で？」

「モモンさん、目が良い？」

「ええ、まあそうですね。目はいい方だと思います」

ティアとティナが驚き半分、呆れ半分のような表情を浮かべる。

彼女たちは盗賊系の職業であるため、索敵や罫察知などに利用する感覚が鋭い。そんな彼女たちよりも優れた視力を持つているというのは驚嘆に値する——それが半分。もう半分はこの英雄なんでもありか、という呆れであるようだ。

「と言つても、本当に微かです。これ以上離れた場合はさすがに見えないでしょう」

「もっと強烈な光や音を出せる道具は、手持ちには無い」

「じゃあもし遠くにはぐれちまったら、自力でなんとかするしかねえな」

「そうならないよう、戦闘中も気を付けましょう」

実験の結果や意見をまとめ、調査の方針を固める。

最終目的は謎のアンデッドおよびアンデッド師団の殲滅。霧の中における調査は全員で固まって動き、戦闘になった際も極力距離を離さず行える連携を中心とする。もし

離れてしまった場合、先ほどの道具を各人に分配して使用することとなった。それでも孤立してしまった場合は、なんとか自力で霧の外を目指すことになる。

「とりあえず、今日の所はあまり奥まで進まずに調査しましょう」

「進んだルートに目印を付けければ、帰り道の確保は可能」

「最悪目印も見失った場合でも、霧の外に出るだけなら私がなんとかしましょう」

「流石モモン、頼りになること言ってくれるじゃねえか。まっ、その時は任せるぜ」

カルネ村を出たのは朝早く。そこからほとんど休むことなくカツツエ平野に馬を走らせ、現在はまだ日が出ている時刻。しかしのんびりとしていては夜になってしまう。

一行は早速、と準備に取り掛かった。

「馬や荷物、野営地での見張りは俺とティアでやっておく」

「ええ。夜になったらそこで切り上げて戻って来るわ」

「しかし面倒だぜ。できれば今日中に見つかって始末をつけられるのがベストなんだがなあ」

「そう上手くもいかんさ。何日かかりの調査になるかもわからん、野営地の設置はしっかり頼むぞ」

ガガーランとティアの二人がカツツエ平野を見渡せる丘の上で野営地の準備で待機することになった。

モモンたちを含む五人で霧の中を調査するのだが、アルシエがふと感覚の優れた三人が平野の方向を注視していることに気付いた。

「モモンさん、ティアさんにティナさんも……どうしたんですか？」

「妙だと思つてな」

「……妙？」

「先ほどの実験で光や音を無作為にばら撒いた。アンデッドの中には音や光に反応する個体もいる。ならもう何体かはこちらに寄つて来てもおかしくないはずだ。だがその心配がない」

「音が届く範囲にアンデッドがいなかったとかじゃ？」

「可能性はある。けど——静かに」

ティナが手で話し声を制し、静寂を求めた。

澄まされた耳と鋭く細められる双眸は、霧の奥に何か動くのを捉えたようだ。

「……何かこつちに近付いて来る」

「あれは……人でしょうか？」

「人型のアンデッドの可能性もあるけど足音は走ってるみたい。なら多分人間」

三人で何やら話しているが、アルシエにはこれっぽっちも見えない、聞こえない。

だがしばらくして、彼女の目にも人影が映った。そのシルエットは走つてはいるが酷

く不格好な走り方で、体力の底を尽きても無理やり前に進んでいる様子に見えた。

もう少し様子を見るべきかと迷っていると、モモンが飛び出した。

ほぼ同時、走る人影も霧を抜け出た。男のようだ。野伏レンジャーのような恰好をしている。明瞭な景色が見え彼は表情を変えたが、昨日の雨によつてぬかるんだ地面に足を取られ盛大に転んだ。そこで彼を突き動かしていたものが尽き果てたらしい。寝そべったまま動かず、荒い呼吸で体を揺らしていた。

泥まみれになった脱出者に駆け寄り抱え起こし、モモンは水薬《ポーシヨン》をその体にかけた。

アルシエも慌てて後を追う。野伏風の男に見覚えがあつたのだ。

「大丈夫か、霧の中で何があつた？」

「あつ……あああ……」

見るからに精神的に不安定な状態になっている。目の焦点は合つておらず、怯えるように視線がせわしなく動き続けている。唇は震え、呂律は回っていない。モモンの声もほとんど聞こえていないのだろう。

「モモンさん！ 私はその人を知っている。帝国のワーカー」

「知り合いか？」

「何度か顔を合わせたことがあります。名前までは、憶えていません」

かつての記憶にこの野伏風の男——いや、野伏の男と言葉を交わした記憶がある。

酒を飲んだ時のフォーサイトのリーダー以上に軽薄な態度であり、女性陣から受けは良くなかったが、生まれつき耳が良く優れた野伏であると評判だった。チーム自体は白金級に匹敵するとされていたが、彼自身はアルシエたちと同じミスリル級の実力だろうと仲間の誰かが言っていた。

それほどの実力者がここまで怯えた姿を晒すとは。

「ごくり、と息を呑みアルシエは霧の奥に隠れた存在に警戒心を募らせる。

「リーダーを連れて来た」

「その人は一体……酷い恐慌状態ね、任せてください。〈獅子のごとき心〉」

ティナとティアに連れられたラキュースが信仰系魔法を唱える。

精神が錯乱し恐慌状態になった者を落ち着かせる効果があるものだ。

ゆっくりと、彼の呼吸が整っていく。荒れ果てた精神が落ち着きを取り戻し回復していった。

やがて顔色も正常になった彼は周囲を見回し、知っている顔であるアルシエに目を止める。

「キミは、確か……フォーサイトの……」

「今は王国の冒険者をやってる。それで、何があつた？」

「ああ、えつと……」

まだ呂律が不確かなままだが、彼は事の成り行きを語り始めた。

曰く、帝国で冒険者たちにカツツエ平野でのアンデッド狩りを自粛するように勧告が出ているそうだ。理由は濃霧が酷く危険であるためとされ、他の者がいない間に自分たちだけで狩りまくって稼ごうという意見がチーム内で出た。血の気の多い彼らは誰もそのことに反対せず、濃霧の中へ入っていった。そこで、見たのだという。

「ば、化物だ……あんなアンデッド見たことねえ！俺はちゃんと警戒してた。あの化物の気配だって察知して、すぐに逃げ出せるようにしてたはずだ！でも、間に合わなかった！……み、皆やられちまって……ああッ！」

頭を抱えて蹲る野伏を見てラキユースはこれ以上聞き出すのは無理だと判断したのだろう。

目を瞑り首を横に振った彼女を見て、全員が同意した。

それよりも、と重要な情報がもたらされたことに全員が互いの視線を交差させる。

精神がまたも不安定になった男を野営地まで運び落ち着かせると、七人は再び集まった。

「まず間違いなく、私たちが探しているアンデッドでしょうね」

「そう遠くない所に来てるかもしれないねえってことか。千載一遇の好機だな。霧の中を探

す手間が省ける」

「そのアンデッドを倒せば、霧も薄くなるかも」

「アンデッド師団の殲滅も楽になる」

「ここで動かない手はないな。アンデッド相手には速攻でケリを付けるべきだ」

“蒼の薔薇”の方針は固まったらしい。リーダーであるラキユースがモモンに視線を投げる。

それに頷いた彼は、アルシエに言った。

「気を引き締める。いきなり最終決戦となるかもしれない」

「はい！」

幽霊船

地面に書き残した印が三〇〇を超えた。

真っ白な世界でも、探せば見つかるようにくつきりと刻まれる。

歩く速度に合わせて、視界の端からその印は後ろへと流れて見えなくなる。また先行きの見通せない白い世界を、アルシエはやや覚束ない足取りで歩く。ふと、不安に振り返りたくなる時がある。そんなタイミングで、目の前を先導するティナが手に持った棒切れで、地面に進行方向を表す印を地面に刻むのだ。

等間隔。いつそ気が狂いそうなほど正確な間を持って、彼女は己の仕事をこなす。

だからこそ、三〇〇という数字は時間として重くのしかかった。

「もうじき夜になる」

誰の眩きだったか。アルシエは思わず空を見上げる。

その視界は前を向こうが、横を向こうが、上を向こうが、霧の色だった。濃密なミルクのような色は彼女の五感を一つほとんど奪ったと言っても差し支えない。だが明暗くらいは識別できた。六人で霧の中へ——カツツエ平野へと足を踏み入れた時より、段々と薄暗くなっている。

今はまだ縦一列に並び進行する六人全員の姿を、視覚でなんとか確認できている。

そのことには安堵できるが、時を経るごとにアルシエたちは目を奪われてしまう。完全に空が夜に墮ちれば、この白い世界は黒い靄に覆われた絶望的な光景に変わるだろう。

生者にとっては恐怖の檻。

死者にとつては安寧の楽園、だろうか。

眼球が腐り落ちた、あるいはそもそもから存在しない奴らにとつて霧など関係ない種も多い。

こんな環境下で正体不明のアンデッドを探し出すのは、危険と困難を極める。とはいえ、そう簡単に退き返すわけにもいかない事情がある。目標がすぐ近くにいてもかもしれないのだ。この機を逃せば、霧に覆われた広いカツエ平野で次に遭遇するのはいつになるのかわかったものではない。多少無理をしてもその手掛かりを掴みたい場面であった。

ただ、発見できる気配がない。真っ直ぐ歩いているだけとはいえ、それなりの距離を進んだ。痕跡一つ見つからなかった。他のアンデッドも群れではないスケルトンが一体近寄ってきただけ。それも戦闘を進むモモンが剣を抜く動作すら惜しんで拳で対処した。

印がさらに五〇ほど上積みされた。

暗さは増し、ちようど日と夜の境目の時間うへを歩いていることをアルシエは自覚した。

——この辺りが限界。

誰かが言わずとも、皆同じように考えている雰囲気があった。

ガガーランが苦々しく舌打ちをする。人一倍正義感が強い彼女は、事態が深刻化する前に決着をつけたいと思っていた。そんな彼女の後ろ——最後尾に着くラキユースも無念そうに息を小さく吐く。テイナも気持ちは同じだろうが、微かにも態度に出すことはなかった。

「モモン様、すいません。これ以上は私の仲間たちの危険が増してしまいます」

切り出したのは漆黒の鎧の後ろをちよろちよろと歩いていたイビルアイだった。

彼女の声にモモンは足を止めた。ほんの少しの沈黙。彼は言った。

「そうだな。あまり遅くなつて、外で待たせているテイアさんを不安にさせるのも悪い」

「も、もし良ければ夜でも私が一緒に調査しましょう！ その……私は夜目が利きますから」

「そこまで深追いするつもりはない。これだけ進んでも気配一つ感じられないなら、多分ターゲットはもうさらに奥深くへ行ってしまったのだろう。危険を冒してまで探す

意味は——なんだ？」

赤いマントを揺らす背中から言葉が途切れ、途端に警戒の色が強くなる。

アルシエの目の前にいるティアも、同時に身構えるような仕草を見せた。

「どうした？　なんか見えたのか？」

「はい……巨大な影が、一瞬だけ」

彼の視線は前方へ油断なく向けられている。アルシエたちもそちらを向いていたはずなのだが、彼が言うようなものは見えなかった。しかし感覚の優れたティアまでも警戒を強めたことから事実であることは間違いないさそうだ。

「巨大な……例のアンデッドかしら？」

「違うリーダー。さっき見えたそういうのじゃない」

「私には船のように見えませんでした」

「船だあ!?　おいおい、この平野には湖どころか池もねえんだぞ。まさか昨日の雨でできた水溜りに浮かんでるなんて冗談じゃ——」

「まさか、カツツエ平野に現れ霧の中を泳ぐという幽霊船か」

小さく呟いたイビルアイの声に、全員が耳を寄せた。

怪談じみた噂話らしいが、知る者には良く知られた話らしい。帝国にいたアルシエもまた、その噂は小耳にはさんだことがある。

「聖王国辺りから流れてきた噂が形を変えたものだと思っていたのだが、実在したとは

な」

「たしか乗っているのは死者の大魔法使いや従えたアンデッドだったはず」

「その通りだアルシエ。さらに海辺の国々の伝承によると幽霊船が現れる前兆として濃い霧に周囲が包まれる」

やがて、白い霧の奥より誰にもわかるほど明確な影が浮かんだ。

その影はたしかに船の形をしている。そして何より巨大で、ガレアス船ほどもありそうだった。

「つまり目標のアンデッドとの関係は不明だが、この煩わしい霧は幽霊船の仕業かもしれない」

「へえ、そいつはいいね。やるべきことが明確なのは好きだぜ」

「皆、戦闘準備よ。ここで逃す手はないわ」

魔剣キリネイラムが鞘から引き抜かれた。バスターソードほどもあるその魔剣は、刀身が漆黒の夜空を思わせる輝きを帯びている。伝説に語られる十三英雄の一人がかつて振るっていたという、漆黒の剣の内の一本。その現所有者であるラクユースは、背に携えたマジックアイテム浮遊する剣群を起動して万全の構えを見せた。

神官でもある彼女は仲間たちへ全体支援魔法をかけ、アンデッド相手に有効と思われる手段をすべて打った。それに応えるように彼女たちも構えを取る。イビルアイは

〈飛行〉^{フライ}により地より足を浮かび上がらせ、ティナはくなくを取り出した。鉄砕^{フェルアイアン}きなる長大な刺突戦鎧を両手に持ったガガーランが凶悪な戦士の笑みを浮かべ戦気を高揚させる。

一直線だった行進陣形は崩れ、前衛後衛に分かれて真正面から敵を迎え撃つ陣形を作る。

たつた四人ながらも冒険者として最も様になった姿がそこにある。

振り返り隙のない布陣を一瞥したモモンは相棒を自身のやや後ろに置いて、その背より二本のグレートソードを抜き放った。ゆつたりとした淀みのない抜剣。しかし圧倒的な臂力を持って片腕で構えられる大剣の重みに潰されるように、周囲の霧が払われた。

接敵に備え杖を強く握りしめたアルシエの目へ明瞭に映った英雄の背中。

ただそこに在るだけでどんな強敵が来ても大丈夫だ、と安心感を与えてくれる。

「——来るぞ」

霧の世界が突如、拓かれた。薄っすらと不明瞭な視界ではあるが、その中心に在る存在はハッキリと視認できる。

まさしく幽霊船であつた。船体も、帆も、マストも、すべてがボロボロで見るに堪えない有様だ。大穴が空いている箇所も散見され海に浮かべればそれだけで沈んでしま

いそうである。帆は破れ風を受ける役目を放棄し、代わりに太く長いオールが左右に突き出て大気を搔いている。船は人の胸の高さほど地上から浮いていた。

船首の舳先も折れて不格好な姿であるが、その下にある衝角だけは磨かれたように綺麗で、異様に突き出している。魔法のような朧げな光が宿っており、朽ち果てた船体とのチグハグさが余計に不気味さを増させていた。

奇怪にして異様な造物に、五人の喉がゴクリと鳴った。

同時、ゆつくりと進んでいた幽霊船がその動きを止めた。

船首に人の影が現れる。いや、アレは人ではない。

元は豪華なローブであったのだろう。そう思わせるボロ布で骨と皮だけの身体を包む。腐敗し、醜悪な表情を浮かべる顔。邪悪な叡智を示すようにその体よりたち昇る負のオーラ。まさしく魔法詠唱者マジック・キャスターがその手に持つであろう捻じくれた杖。

物語において古城を根城とし、幾千のアンデッドたちを統べる支配する者としても語られるモンスター。

「死者の大魔法使い……」

『霧の世界へようこそ、忌々しき生者諸君』

人間や亜人が放つものとは違う、腐った声帯を震わせるしわがれた声。耐性のない者が耳にすればそれだけで恐怖をかき立てられ、肌が粟立つだろう。

そんな嫌悪感をまるで気付いていないかのように、饒舌に語るアンデッド。

『何をしに来たのか、などとつまらないことを聞くつもりはない。私も、ここで何をしていいのか教えるつもりもないからな。だから代わりにこう言おう——死ね!』

宣言と共に「^{ファイヤーボール}火球」が放たれた。人の頭ほどの火の玉は、一直線にモモンたちへ向かって飛翔する。この魔法は着弾すると同時に炎が巻き起こり周囲を焼き尽くす範囲攻撃である。陣形を組みひとまとまりになっている人間ならば、これ一つでまとめて始末できるだけの威力があつた。

おぞましい顔を歪め、死者の大魔法使いは勝利を確信しているようだ。

しかし、火炎に吞まれる現実よりも速く、モモンが剣を振るつた。

鈍い光沢が世界を薙いだ。

その軌跡に巻き込まれた火球は二つに別れ、その火の手を伸ばすことなく掻き消えた。

『……貴様、何をした?』

「別に何も。ただ斬つただけだ」

死者の大魔法使いだけでない。「蒼の薔薇」とアルシエも、魔法を両断するというあり得ない技に驚愕する。物理的な現象を捻じ曲げる魔法という理の現象を、無理やりねじ伏せるような荒業。

そんな絶技を当たり前のように扱い、肩に剣をのせ余裕を漂わせるモモン。

「アンデッドは生者を憎んでいる、だつたか？ まあ、それはお前たちの在り方であるし、私がとやかく言うつもりはない。だがそれにしたつてご挨拶じゃないか。来客にはもう少し丁寧に接するべきだ」

『ふん！ その減らず口きけなくしてやるわ！』

並の冒険者にとって死者の大魔法使いは難敵とされる。

その理由は数あるが、何よりも〈火球〉を連射できるという点が特筆される。

高位の範囲攻撃系位階魔法を息の絶え間なく撃ち込まれれば、たとえ防御に徹していてもいつかは崩れ、焼き尽くされる。だから多くの冒険者は反撃の暇がなくなる前に、勝負をかけるべくと距離を詰めるのだ。

だが、モモンと死者の大魔法使いの物理的距離は大きく離れている。

次弾が放たれる前に距離を詰めることは不可能。無理に詰めようとすれば火球の連打が押し寄せる。堪えて機会を伺えば火球の波に押し潰される。

今度こそ、と邪悪に笑みを浮かべたアンデッドはあらん限りの速度で〈火球〉を連射した。

絶え間なく、隙間なく、まるで数珠が繋がるように火球が飛び連なる。

流石にこの猛攻はマズイと思つたのだろう。ラキュースたちが援護に動こうとする。

しかしアルシエが手で制した。

—— 必要ない。

まだ組んで短いとはいえ、彼女は知っている。

モモンという男の力を。彼が振るう剣の凄まじさを。

暴風が巻き起こる。その中心で振るわれる二本の大剣は、淀みなく美しい軌跡を描き、飛来する火球をことごとく斬り落としていく。討ち漏らしもない。彼の背後には火の粉一つ届かない。絶対の防御壁でも張られているかのように、火の猛威は彼の目の前で途切れていた。

『な、なんなんだ貴様は!?!』

「生者を守る剣——つまりは英雄さ。お前の敵だよ、だから遠慮なくかかってこい」
火球の嵐が止む。挑発を口にすると共に、モモンはその手に持つ剣を投擲した。

引き絞り放たれた矢の如き速さを持って、剣は船体を貫きマストに突き刺さった。ベきベき、と朽ちた木が軋む音がする。

「言っておくが、その船では盾にもならないぞ?。」

『……ククク、なるほど。恐るべき強者、というわけか。これまで霧の中で狩り殺してきた者共とはわけが違うな。いいだろう……我らが持つすべてを持ってして、貴様を殺してやろう』

不気味な笑い声が木霊する。幾重にも、幾重にも、幾重にも。

アルシエが違和感を覚えた瞬間だった。これまで油断なく船首に目を向けていたはずのモモンが、何も見えない周囲の霧の中へと視線を走らせた。

『気付いたか?』

「多いな……一千、いや二千? まだ増えるのか」

背後でティアも声を上げた。

「リーダー、最悪。凄いや数のアンデッドが此処を取り囲むように近付いてる」

「件のアンデッド師団ね、数は?」

「わからない。最低でも千は超えている……」

中々お目にかかれるものではない、凄まじい数だ。

だが彼女たちはアダマンタイト級冒険者。一山いくらのアンデッド雑兵がいくら来ようとも、その全てを打ち倒せると豪語できる英雄である。

「モモンさん、私たちは迫っている大群を相手します! 幽霊船をお任せしても?」

「はい。そつちはお願ひします」

『いやいや、それには及ばんよ……』

突然のことだった。宙に浮かび停止していた幽霊船が急に動き出した。

しかも、その速度は尋常ではなくアルシエが認識できたのは、モモンによって巻き込

まれないよう突き飛ばされた後だった。

硬質な物同士がぶつかる音が響く。

泥まみれになったアルシエが身を起こし、はたと見る。

凄まじい推進力を持って幽霊船がその衝角をもつてモモンへ体当たりを繰り返したのだろう。彼はそれをグレートソードを両手で構え受け止める。

一瞬の拮抗。巨大な船を受け止めるだけの馬鹿げた臂力が彼にはあった。

もしかすると、そのまま船を押し留めることも可能だったのかもしれない。

だが、不幸だったのは昨日が大雨であったことだろう。ぬかるんだ地面は、彼らの力の拮抗に耐えられなかった。モモンの足が埋もれ、そのまま彼の体を後退させてしまふ。いくら彼が堪えようとしても脆弱な地面が許さない。

「ぐっ——」

『この船の体当たりで耐えるとは……まあ良い。協力されても面倒だ。このまま貴様を遠くへ運び孤立したところで殺してやる』

一度拮抗が破れ動き始めると、その速度は加速度的に増していく。

アルシエにはどうすることもできなかった。

「モモンさんッ!!」

「アルシエ、キミはキミのやれることをやれ！　すぐに戻るッ！」

あれだけ巨大な船体が、あつという間に見えなくなった。

深い霧が周囲をまた覆う。じりじり、と数多の足音が濡れた地面を踏みしめる音が鼓膜を揺らした。

「モモン様……クソツ、やるぞお前たち！」

「だがアイツ一人にしちまっていいのか？」

「信じろ、彼ならあの程度のアンデッドにやられはしない。それよりも——」

「——何か、来る」

ティナが何者かの急速な接近を感じ取った。

この平野を駆け抜ける足音は、やがてアルシエの耳にも届いた。

「オオオオアアアアアアアア!!」

人の恐怖を駆り立てるような咆哮だった。周囲に殺気が撒き散らされ、ビリビリと空気が震える。

彼女たちが数多の経験を乗り越えた者でなければ、それだけで身を竦め動けなくなつたかもしれない。

そんな絶大な恐怖を孕んだ叫び声。その主は一体、と全員が一方へ目を向けた。

巨大な人影に見えた。鎧を纏い、マントをたなびかせる、巨躯の騎士に見えた。

その印象はある意味正しい。だがその正体は、そんな生易しいものではない。

白い霧を振り払い、黒い疾風が姿を見せた。

その巨体は黒い全身鎧に包まれていた。真紅の血管のような模様が施され、鋭い棘があちらこちらより突き出た攻撃的で禍々しい意匠が凝らされている。悪魔の角を生やした兜より覗くその化物の顔は、腐り落ちた人間のそれ。ぽつかりと空いた暗闇の眼窩に、憎悪の炎を燃やした光が二つ灯っている。

左手には巨大な盾——タワーシールド。

右手には拍動するおぞましきオーラを纏った波打つ刃——フランベルジェ。

ボロボロの漆黒のマントをはためかせ、剣を振り上げるその姿はまさしく『死の騎士』であった。

この世界で自然発生した個体が確認されたのは過去に一度だけ。対処に当たったのはバハルス帝国のみであり、『逸脱者』フルーダー・パラダインとその高弟たちを持つてしてなんとか捕縛した伝説級の化物。

つまり、帝国内層部しか存在を知らない謎のアンデッドである。

名はそのまま——死デス・ナイトの騎士という。

船上の舞踏会

どれほど離されてしまったのか。

衝角を剣で受け止めながら、モモンはこのままカツツエ平野の外まで押し出されるのではないかと考えていた。

抵抗しようにも船の推進力は凄まじく、何よりやわな足場のせいで踏ん張りがきかない。不安定な体勢で受けたせいで、横に逸らして逃れることも叶わない。つまり彼は、足が何かに引かれるか、この幽霊船が止まらない限り永遠このまま押し続けられる状態にあった。

「……どこまで運ぶつもりだ？」

『そうだな、距離は十分にとった。この辺りで良いだろう』

幽霊船が急ブレーキ。ピタリと止まった。

モモンは慣性に従い、さらに少し後ろへ移動したがやつと止まった。彼の両足が辿った経路がレールのように二本の溝としてくっきり残っている。距離はあるが、合流は容易そうだった。問題があるとすれば――。

「さて、合流を急ぎたいんでな。そのオンボロ船をさっさと叩き壊させてもらうぞ」

『そう焦るな。ゆつくりと、翩り殺してやるから……』

ゲタゲタと不快感を起こさせる笑い声を死者の大魔法使いはあげる。

木乃伊なのか骨なのかも判別が難しい指を鳴らし、何者かに合図を送る。

その受け手はすぐに現れた。甲板の上より、船体に備えられた窓より、船底に空いた穴より。押し込められていた中身が溢れ出るような勢いで。あるモノは高所より飛び降り、ぐしやりと潰れたがそのまま立ち上がった。またあるモノは独特な身体の構造を利用して、ゆつくりと不気味に身体をくねらせながら降り立つ。

カツエ平野、その大地におびただしい数のスケルトン系やゾンビ系アンデッドのアンデッドが姿を現した。

その数は千ではきかないだろう。果たして巨大とはいえあの船内に収まりきる数なのだろうか。

まるで地面を覆い隠す絨毯のような密度で、化物共はモモンの周囲を囲んだ。

「次から次へと……」

『どうした、流石にこの数には絶望したか?』

「ああ。さすがにウンザリしてきたところだ」

周囲を見渡す。そこにあるアンデッドの種類は様々だ。

ただの骸骨に、弓兵、騎兵、魔法師。百足上の骸骨と集合する死体の巨人がチラホ

ラという。他にも動死体ソシビや腐肉ガスト漁り、内臓オーガニエツの卵など下級のアンデッドの姿が見られた。どれもこれも、モモンにとつては敵ではない。彼が剣を一薙ぎすれば片付くような相手ばかりだ。

しかしその数は厄介この上ない。

『——やれ』

短い号令と共に、アンデッド共が襲いかかってくる。

眼前に迫る骨と腐肉の壁を一息に斬り払った。それだけで前方にいた一〇体のアンデッドが吹き飛び、碎けて消滅した。同時、背後よりさらに多くの敵が迫る。モモンは先に斬り払った剣の勢いを殺さず、むしろ利用して体を回転させる。そのまま流れるように背後の接敵へと対応する。

——一閃。

大量のアンデッドが塵となって消えていく……だが。

「どうした、もつと激しく踊ろうじゃないか。まさか部下がむぎむぎやられるのは忍びない、なんて博愛を口にしないだろう？」

『安い挑発だ。言っただろう、ゆっくりと捌り殺してやると』

舌打ち一つ。視線を周囲へ回すと、彼を取り囲むアンデッドたちは殺気を漂わせているが下手に襲いかかって来ない。嫌らしい距離感を保ちながら、モモンの出方をうか

がつている。さらに先ほどの一斉攻撃、アンデッドの群れとすれば驚嘆に値するほど連携ができている動きだった。

物量で押し潰すように一気に責め立てることこそ、奴らにとって一番勝率が高い方法だ。

それをしてこないのは――。

「……時間稼ぎか」

『それもまた然り。今ここにある戦力だけでは貴様を殺すのは難しいだろう。だから先に強大戦力で貴様の仲間を殺す。その後、この雑兵に体力を削られた貴様を殺す。その強さに敬意を示した結果だ。感謝しながら仲間たちの危機に焦りを抱き、絶望と共に死んで逝け』

腐った皮膚がその顔から剥がれ落ちそうなほど、奴は表情をぐしゃぐしゃにして笑う。

知性と呼ぶべきか――邪悪な叡智を宿す分、アンデッドの中でも悪趣味だ。

「ふむ、悪くない手だ」

『そうだろう、そうだろう！ 当ぜ――』

「だが一つ思い違いをしているぞ」

『……なに？』

「どれほど強力な存在を用意しようが、私が間に合わせればその悪趣味な悲劇は全て英雄譚へと転じる。それに何より、彼女たちはお前が願うほど弱くないぞ」

『ツ———思い上がるな人間風情がツ!!』

火球が飛ぶ。一つ、二つ、三つ。モモンはすべてをなんでもなくように斬り飛ばす。

グレートソード一本を片手に、幽霊船へ向かって踏み込んだ。当然、アンデッドの群れが壁となつて存在する。その中へと潜り込み、破壊の暴風を巻き起こす。

爆弾が爆ぜたような光景だった。

彼が剣を一つ振るえば骸骨が吹き飛び、二つ振るえば塵と帰す。三つ———剣を地面へと突き立てれば、周囲の足場が破裂して取り囲んでいた腐肉共が宙に舞った。

しわがれた声の号令が飛ぶ。

少くない数の駒が、漆黒の鎧へ殺到する。だが足りない。量よりも、質が。

どんな数も、どんな連携も、彼が剣を振るえば無に帰った。

圧倒的———されど彼は不満を覚えた。手数が足りない。

剣を振るい、拳を突き出す。ついでに蹴りを放ち薙ぎ倒すが、しつくりこない。

やはりモモンという英雄は、馬鹿げた大剣を両手に構えてこそなのだ。剣一本ではどうしても時間がかかってしまう。二刀一对の片割れは今———。

モモンは上へと跳躍する。空を飛べる個体が邪魔をしようと横から飛来するが、ヒョ

いと躲して蹴落とす。その衝撃もまた足場とし、彼はさらに高く跳ぶ。そして甲板へと着地した。

『き、貴様——』

動揺する死者の大魔法使いなど気にも留めず、彼は船上を駆け抜け、朽ちたマストを駆け上がった。その半ばに投擲したもう一本のグレートソードが突き刺さったままになつていた。柄を掴み、力任せに引き抜く。ボロボロだったマストは軋み、ついに耐えきれなくなつてベキリと折れた。

マストが折れ、その負重が偏り合わせて船が大きく傾いた。

甲板に足をつける者はたたらを踏んで姿勢を崩す。倒れてしまわぬように船べりにしがみつiki、死者の大魔法使いが視線を船上へ彷徨わせる。だが腐った瞳に漆黒の男は映らなかつた。

『どいへ……』

そんな眩きに応えるように、彼の元へ影が落ちる。

頭上。影よりも黒い鎧が、二本の剣を携え飛来していた。片方の剣が高々と掲げられ、上段へと構えられる。繰り出されるは振り下ろし。この上なくシンプルで、極めればそれ一つで武器ともなる基本中の基本。

その極致にまで至つた一振り、見上げて目を見開くアンデッドの脳天へ——。

「人間風情、か……まあ間違いではないが、正しくもない。私はただの英雄だよ」
鈍く水つばい音が、霧の中で響く。

斬った、というよりは叩き潰したという表現が正しい。

死にながらも動いていた——今は動かぬ残骸から剣を引き抜く。刃に張り付いた汚物を振り払い、一瞥もくれてやることなくモモンは船室へ目を向ける。

おそらくこの死者の大魔法使いが船長のような役割を担っていたのであろうが、他にも指揮を執れる存在がいけないとは限らない。空中へ浮かぶ船の下にはおびただしい量のアンデッドが未だ動いている。見下ろすと辟易するが、頭脳さえいなければ殲滅は容易く後回しにしても構わない。

「さて、優先すべきは船の破壊か。もし他に支配者がいるのならついで見つかるだろう」

今のところ目撃した中で「漆黑」や「蒼の薔薇」にとつて脅威になり得るのは、この幽霊船という存在のみであった。衝角を突き出した体当たりの衝撃は凄まじいものだった。あの威力にモモン以外が餌食となれば、きつとただでは済まない。

万が一を考えると、ここを離れる前にこの船だけは破壊する必要がある。

造船の知識などがあれば手早く効率的に解体できただろうに。

そう惜しむ彼の頭には、専門的な知識は入っていなかった。

だからガムシヤラに剣を叩きつけよう——そう考えた時だった。ふと気付く。傷がない。

剣を投擲した際、貫いた船体の傷が消えていた。

ミシミシ。ベキベキ。

木材が軋む音がする。見れば、折れたはずのマストが物理法則を無視して持ち上がり、元あつた場所へと戻ろうとしている。砕け散った破片も寄り集まり修復が行われているのだ。

「まさか、こんな見てくれのくせに自動修復機能が付いているのか?」

『その通りだ』

聞き覚えのある邪悪なしわがれた声が反響しながら聞こえた。出所は捉えられない。振り返る。だがそこには潰された残骸があるだけで、動く気配もない。

『ククク……さすがの英雄もこれには驚愕するか』

『しかし我らはアンデッド』

『生者に抱くは憎悪と殺意』

『生者に求めるは絶望と死』

一つではない。幾つも、幾つも、同じであるが微妙に差異のある声が響く。

その主たちは物陰から、マストの上から、船体に空いた穴から、舳先の裏側から、姿

を現した。

——死者の大魔法使いが四体。

「驚いたな。五つ子か？」

『そうだと言え、貴様は嬉しいか、悲しいか？』

「六つ子でなかつたと喜ぶでしょう」

『そうか。ならそんな貴様にもっと嬉しくない知らせだ』

足場が揺れる。モモンは体勢を崩さず留まるが、瞬間に船が猛烈な速度で進行し始めたことを察知した。

白い霞がかつた世界が流れていく。だが霧の外へ出るのではなく、延々とこの煩わしい世界を航海するつもりらしい。嵐の海の荒波に揉まれるように、船体が大きく揺れて傾く。

咄嗟に剣を突き立て支えとする。不安定過ぎるこの甲板の上で、人間が這いつくばらずに済むにはそれしかない。鋭い視線がアンデッド共へ向けられる。すると奴らは魔法で僅かに足を浮かせ、平然と平衡を保っていた。

『大変そうだな、人間』

「心配には及ばない。刺激的で悪くないクルージングだ」

『ククク、強がりを使いよる』

『ほれほれ、のんびり航海を楽しんでいいのか？　すぐに仲間たちの場所がわからんやうになるぞ。間に合わなくなってしまうぞ。いいや、もう遅いか』

船が移動したことにより、元いた場所へ戻るための足跡を見失ってしまった。

凄まじい速度で蛇行し、不規則な航路を取っている。この霧の中で見つ出すのは困難であろう。

「……面倒なことになったな」

『もちろん、これだけではないぞ？』

船室の扉が勢い良く開かれた。明かり一つなく肉眼では見通せない闇の奥より、何か飛び出す。

事体を持たぬ霧のようなアンデッド——死霊レイイスが濁流のように、開け放たれた扉の奥より幾体も甲板の上へと飛び出した。扉からだけではない。ポロポロの船体に空いた穴からも、モモンの周囲へ引き寄せられるように一〇〇を超える死霊が殺到する。

その体には足はなく、ガスのように宙に揺蕩う。互いの体を絡ませるようにクネクネと揺らしながら、獲物の周囲に円を描くように旋回する。

ある意味幻想的で、おぞましい光景だ。

『骸骨スケルトンや動死体ゾンビだけかと思つたか？』

『この船内にはまだまだ生者への憎悪を滾らせた者共が蠢いておる』

『終わりはないぞ。終わりはないぞ』

『この世全てを絶望と死で埋め尽くさない限り、我らは止まらない』

笑う。晒う。嗤う。

醜悪な者共が、愉快そうに嘲った。

『降りたければ降りればいい。地上にいる死者が絶え間なく寄ってくるだろうよ』

現在、船の周りに蠢くアンデッドはいない。

だが地上に降り立ったまま自動修復する幽霊船を破壊しようとするれば、その間に続々と集まってくるだろう。そうなれば時間だけが浪費される。仲間の位置を少しでも早く発見しなければならなくなった以上、余計な時間はかけていられなかった。

この死者の大魔法使いは、そんなモモンの思惑を読み切っているのだろう。

『常に揺れ続け不安定な足場。魂を歪ませ精神を狂わせる死霊。深い霧の中で焦燥を駆り立てる仲間の安否……揃えたぞ。揃えてやったぞ、貴様をじわじわと鬨り殺すための要素を。さあ楽しめ、そして愉しませてくれ。心身ともに疲弊し、仲間の死を知った時が貴様の最期だ』

漂うだけであつた死霊共がモモンへ襲いかかる。

当然、剣で応戦する。通常の武器では実体を持たない死霊は倒せない。しかし彼のグレートソードは容易く霞の如き化物を両断した。魔法を斬って見せたのだ、それくらい

では驚きは起きない。

それどころか死霊共の勢いが増す。仲間がやられたことに対する復讐、などという高尚なものではないだろう。

揺れる足場で剣を振ることで崩れる体勢。それを隙と見て、襲つて来るのだ。

モモンは剣を振るう。体勢が崩れようがお構いなしに、その巨大な剣を振るう。

『足掻け足掻け足掻け！』

紙一重。そう表現できるギリギリの死線の上で彼は無傷を保つ。だがそれも、時間の問題。

いくら強者であつてもモモンは人間。疲れを知らぬアンデッドではない。

だからいつか、無理な反撃に体力を削られ疲弊する。

『頑張るな。だが無駄だ、死霊はまだまだ船内に孕んでおる』

もはや起きているのか、倒れ込んでいるのかもわからない。

立って剣を構え直す隙も彼には与えられない。

そうして、いつか――。

『無様だな、滑稽だな。生にしがみつく姿というのは』

剣が空振り、甲板が破壊される。砕け散った木片が高々と舞つた。

無防備になった鎧の男へ死霊の腕が殺到する。その指先にでも触れれば、人間の精神

など簡単に掻き乱せる。

そして、いつか——。

『ほれ、もう諦めたらどうだ？ 楽になるぞ』

彼は転がるように回避する。その回転にも剣の一振りを合わせて二、三の敵を屠る。だがまだまだ数はある。斬り落とされる度、どこからか新しい死霊が集まっていた。

そしていつか——。

『ククク、ハハハハハハ!!』

剣が閃く。死霊が消え、また新しく殺到する。彼は回避し、また剣を振るう。

そんなことの繰り返し。いつかは生者に終わりが迎えに来る、救いのないリピート。そう。いつかは限界が来るはずだ。

いつかは……いつかは——。

『ハハハハ………んツ?』

誰かが気付いた。いつまで経ってもモモンは傷を負わない。

どんなに紙一重に見えても、必ず切り抜けている。

いやむしろ、時が経つにつれその動きは繊細さを持ち始め、無駄がなくなっていく。立ち上がることも、膝をつくことも、倒れて転がることも、剣を振ることも。

全てが、計算され尽くした動きであるように。

まるでダイナミックな舞踏を演じているかのようには——。

「それで、これでネタ切れか？」

『なっ……!?!』

数々の猛攻をしのぎ、動き続ける男の口から息一つ切らせていない声がある。

「要は舞踊^{ダンス}と同じだ。不安定な足場なら、それに合わせたステップを踏めばいい。足だけで難しいのなら、身体全体、武器も支えにして踊る。社交界のパーティーには出たことではないのでな、中々苦勞したが慣れればどうということはない」

もはや彼の動きは戦士のそれに戻っていた。倒れ転がることもなくなり、剣を構え重心移動によつて二本の足で揺れ動く船上に立っていた。

「感謝しよう。これでダンスに誘われても恥をかかなくて済みそうだ」

『ふざけるな！　ありえん……貴様、本当に人間か!?!』

「その答えはもう口にしたはずだが？　それよりもまだ隠し玉があるのなら今の内に出しておけ。悪いが時間がないんだ、お互い出し惜しみはナシでいこう」

いつしか数えるのも億劫なほどいたはずの死霊が目に見えてその数を減らしている。

対してモモンに疲労の色は欠片も見当たらない。あれだけ策を弄し、全てを万全に機能させたはずなのに、彼の底がまったく見えてこない。

深淵の奥底にある穴を覗き込んでいるような、途方もない感覚。

死者の大魔法使いたちは悟った。自分たちが殺し合いを吹っ掛けた相手が、真正正銘の怪物であることを。

「私のやることは変わらない。この船を破壊し、仲間たちのもとへ戻る」

『む、無駄だ……この船は自動修復機能が——』

「ならば修復が追いつかない速度で破壊し尽くす。いくら何でも木端微塵にされても戻るといふことはないだろう。どこかに核があるか、耐久限界があるはずだ。邪魔をするなら好きにしろ」

淡々と語られる最適解。

それは理論上は正しいというだけで、困難を極める方法だ。

しかし、このモモンという男を前にして死者の大魔法使いたちはたじろぐことしかできなかつた。

相変わらず揺れ動く幽霊船。その上で破壊の権化は、二本の大剣を携えて一步前へと踏み込んだ。

「こういう時、なんと言おうのだったか……ああ、そうそう。確かこうだ、シャルウイダンス踊りませんか？」

蹂躪が始まった。

魔法詠唱者

「くっ……馬鹿みたいな怪力しやがって……」

「退がってガガーラン！——はあああッ!!」

魔剣キリネイラムの漆黒の輝きが白い世界に閃いた。だがその一撃も巨大なタワーシールドに防がれてしまう。信仰系魔法によって筋力が強化され、今のラキユースの膂力は人類の中でも最高クラスになっている。そんな彼女の攻撃をいとも容易く止めてしまう圧倒的パワー。人間という種がどれだけ劣等な存在であるのかを痛感させられる。

だがそこで止まるわけにはいかない。彼女は人類最高の冒険者である。

重さで足りないのなら数と速さで押す。戦法を瞬時に切り替える強かさを持つていた。

背より離れ展開される浮遊する剣群フロートイングブレードを交え、ラキユースはあらん限りの速さで連撃を

叩き込んだ。これで行く、盾を持った敵が怯んだ。その隙に、振り下ろされたフラインベルジユを受け止め押し込まれていたガガーランが、剣を押し返し反し圧力の拘束から脱出。離脱際にがら空きの脇腹へと刺突戦鎚——鉄砕フェルアイアンきを叩き込んだ。

呻き声のようなものが漏れる。明確なダメージが入った印。

だが本来なら——敵がアンデッドであることを加味しても——最高クラスの戦士職であるガガーランの一撃を受けて、それだけで済む方がおかしい。

「ふざけた耐久力をしてるわね。ガガーラン大丈夫？」

「ダメージは負っちゃいねえ。だが、こいつは王都以来の強敵だぜ……」

「蟲のメイド悪魔と比べてどうだ？」

「あれほどじゃねえとは思うんだが、何とも言えねえな」

イビルアイがラキユースとガガーランの前に立ち、問うと歯切れの悪い答えが返ってきた。

理由は見当がつく。王都でヤルダバオトが悪逆の限りを尽くした際に「蒼の薔薇」のメンバーでガガーランとティアが一度死亡している。その後ラキユースの〈死者復活^{レイズデッド}〉により復活したのだが、この方法で蘇ると生命力を失い、死ぬ前よりも弱体化してしまうのだ。

事件が一段落し、失った生命力を取り戻すための行動はしてきていたのだが、それでもまだ甘く見積もって八割程度。死ぬ前に一戦交えたメイド悪魔との戦力差を測ろうとしても、基準となる自身がズレているためハッキリとは明言できないのだろう。

——だが、それにしても……。

いくら全盛期の力が戻っていないとはいえガガーランは強い。英雄の領域には届いていないが、それでも英雄と肩を並べて戦うことはできるほどに。そんな彼女を一方的に抑え込み、切り返して反撃を試みる隙すら与えないとは。

イビルアイは霧の中より疾風の如く現れた敵に目を向ける。

死の騎士——そう表現する他ない出で立ちのアンデッド。

その禍々しい姿から溢れ出す殺意は、同じアンデッドであるイビルアイですら寒気を感じてしまう。二〇〇年を超える経験から、間違いなく英雄と呼ばれる存在でやっとな手のできる伝説級の相手だと感じ取った。

「——だが、私より弱い」

「イビルアイ……」

「心配するな。慢心でもなんでもない。確信を持った自信だ」

仮面の奥で、少女の顔が微笑む。

「蒼の薔薇」という冒険者チームは、現在の「漆黒」ほどではないが歪な集団であった。

人類最高クラスの戦力が揃っているが、その中でも人間ではないイビルアイだけが突出した力を持っているのだ。もし彼女一人と他の四人が戦えば、勝つのはイビルアイであると明言できるほどに。力量の格差がありながらどうしてチームを組んでいるのか、

という理由は諸々あるが今は関係ない。

イビルアイは強い。極大級魔法詠唱者なんて仰々しい自称をしても誰も口を挟まない。

さらには長い年月を生き、濃密な経験に身を浸したことで得てきた膨大な知識も拍車をかけている。慎重とは言い難い振舞いをするのが玉に瑕だが、それでも彼女の戦力分析は中々正確だ。

そんな彼女が冷静に敵との彼我の差を口にしたのだ。

仲間たちが疑うことはなかった。

「ティナ、ここに向かっていているアンデッド師団はあとどれくらいで到着する？」

「第一波はあと一分くらい」

「十分だ。速攻で勝負をかけるぞ、いつもはやらない私主体のフォーメーションだ」

「あれ嫌い。イビルアイが無茶苦茶するから、合わせるの大変」

「グダグダ言うな。それが一番良いのは間違いないし、何より——」

小柄な身体が振り返り、一人の少女をその視線で射抜いた。

絶対の安心感を与えてくれる相棒と引き離されながらも、パニックになることなく油断なく杖を構え自身の役割を全うしようとしている未熟な恋敵^{こゝろはひ}。

「アルシエ、今は魔力を温存しておけ。代わりに良く見ている。超一流の魔法詠唱者^{マジックキャスター}の

戦い方というやつを」

そう言うといビルアイの体が〈飛行^{フライ}〉の魔法によって浮かび上がる。

アルシエはその光景を見た時、まず魔法詠唱者として基本的な戦術である空へ飛び魔法を撃ち続けるという戦術を思い浮かべた。だがそんな考えを読んだかのように、少女の声が響く。

「空中から一方的な蹂躪なんて、そんなつまらんものじゃないぞー！」

その小柄な体がロープをはためかせ、宙を駆ける。迷いなく、一直線に死の騎士との距離を詰めた。

唸り声と共にフランベルジュが振り上げられる。タイミングは完璧、波打つ刃がイビルアイを迎撃するため動く。アルシエの目には微かにその軌跡が映るだけの剣速。

だが、獲物の姿はそこに無い。身を捻り、最小限の動きで迎撃を躲していた。

背後へとまわり、魔法を詠唱すべく手を前へ掲げる。

死の騎士は振り返りざまに剣を横へと薙いだ。しかしまた空を切る。

今度は頭上、飛行能力を魔法で得ているからこそできるアクロバティックな体勢で、彼女は練り上げた魔力を放った。

「〈水晶騎士^{クリスタルランス}槍〉。まず一つ、魔法詠唱者は何があっても冷静さを失うな！」

水晶で出来た騎士槍が勢い良くアンデッドの脳天へと突き立てられる。だが貫くこ

とは叶わず、その凶悪な角の生えた兜を凹ませるに留まった。

「戦士は熱くなることで戦意を高揚することもできる。だが魔法詠唱者は違う。いったって頭はクールに保たなければならぬ。何故なら魔法詠唱者はチームによる戦闘において攻撃、支援、防御、その全てを請け負うことが可能だからだ」

反撃の剣が振るわれるが、彼女はそれを全て躲す。

つかず離れず、波打つ剣の間合いよりもさらに内側へ潜り込む。宙を舞いながら、まるで攻撃を先読みしているかのような身のこなしだ。時折、隙を狙って放つ魔法によって死の騎士の体が削り取られていく。

「戦況に応じ、瞬時瞬時の役割を分析し実行する。熱くなればその判断が鈍る。だから、薄皮一枚で危機が迫ろうとも決して冷静さを失うな。臨機応変に対応しろ」

アルシエが頷くのを視界の隅で確認する。彼女の言葉は確かに少女に届いているようだ。

その近くで仲間たちが生暖かい視線を向けてくるのが気になったが、そちらへ注意を払えるほど余裕のある相手ではない。

イビルアイは冷静に死の騎士の動きを予測し身を捻る。〈飛行〉を使った超接近戦はかなりの高等技術になる。体躯の大きいモンスターなどに纏わりつくように飛行し、相手が大きな隙を見せた瞬間に魔法を放つ。タイミングがシビアで経験豊富な彼女で

あつても基本的には回避に注力し続けなければ手痛い反撃を貰う、諸刃の剣のような戦い方だ。

これをアルシエにできるようなれ、とは思わない。

だが、近いことはできるようなった方が良い。

モモンと一緒にいる以上、アルシエの役割は彼のサポート——強敵の取り巻きを相手取る露払い——が主になるだろう。となれば強敵との一対一を強いられる状況になることは十分に考えられる。〈飛行〉を用いた高機動戦闘は魔法詠唱者にとつて生命線とも呼べ、多少の戦力差を覆すことも可能だ。

既に第三位階魔法の使い手で、それなりに実戦を経験している彼女ならある程度までは習熟しているであろうが、まだまだ可能性のある技術なのだとして欲しかった。

剣だけでは追いつかないと学んだのだろう。死の騎士はその巨大な盾をも鈍器として振り回す。

イビルアイはその小柄な体を活かして相手の股下を抜けるように回避した。

「二つ目！ 純粋な攻撃魔法のみに頼るのは二流だ。さつきも言ったが臨機応変に対応しろ。敵戦力を分析し、攻撃、支援、防御という手札を最高のタイミングで切れ。それだけで魔法詠唱者の戦術は際限なく広がる！」

手を敵の背中へ向ける。攻撃の意図はなく、戦況をさらにこちらへ偏らせるための一

手。

「サンドフイールド砂の領域・対個」

砂が発生する。海の波のようにうねりながら、死の騎士の体を包み込んだ。その巨軀に纏わりつく砂を振り払おうと剣や盾を滅茶苦茶に振り回し、雄叫びを上げるが効果は薄い。砂は払われてもアンデッドの腕や足に絡みついて動きを阻害する。完全に封じ込めることはできないが、それだけでイビルアイの動きを捉えるのはほぼ不可能となった。

もがく姿を目の前に、イビルアイは地面に降り立った。

「ここまでやれば後は好きに料理するだけだ」

彼女は魔法を唱え、高威力の水晶の礫をいくつも打ち出す。

腐り果てた体を抉り吹き飛ばすその攻撃に、苦痛に喘ぐような声が漏れ出した。

効いている。イビルアイは死の騎士を圧倒していた。だが、それでも火力が足りていない。

もうすぐ無数のアンデッドの群れがこの場に集まってくるのだ。それまでにこの強大な個体であるアンデッドを倒してしまいたいが、このまま彼女の魔法で削り続けただけでは間に合わないだろう。

そんな瀬戸際でも、彼女は落ち着き払った声で言う。

「さて、三つ目。これが一番重要だ——」

煩わせていた砂の妨害が消滅した。それを好機と見た死の騎士は叫びをあげてイビルアイへと突撃した。

漆黒の疾風——凡人の目には残像すら映るであろう速力で距離を詰める。あつという間だった。凶悪なフランベルジュの間合いに、華奢な体が収まった。

アルシエはその光景を目にしていながら、反応できなかった。

一瞬、脳裏に凄惨なイメージが浮かぶ。ついに声が出た時には、その凶悪な剣は振り下ろされていた。

「危な——」

「——仲間を信じろ。まあ、言うまでもないか？」

惨劇は訪れない。少女の体へ向かった剣は、漆黒の刃によって阻まれた。

さらに、二本の光り輝く鎖が地面より生え出でて、剣と盾を持つ両腕を拘束した。

「やっぱり無茶苦茶する」

「合わせるこつちの身にもなりなさい」

ラキユースとティアがなんの合図もないしにイビルアイの考えを読み取り、即座に行動へ移したのだ。文句を垂れながらも、そのタイミングは絶妙。死の騎士は無防備にその胴体を晒す。

仮面の奥でほくそ笑んだ少女は、水晶の騎士槍を撃ち出し突き刺した。だがまだ浅い、凄まじい耐久力を誇る相手の致命傷には至らず。

だから、トドメは一步出遅れたように駆け出しているガガーラン。

いや、出遅れたわけではない。飛び出す瞬間を僅かにズラすことによって、彼女は最高のタイミングでの追い打ちを可能とした。すべては計算通り。合図も作戦指揮もなく、各々の信頼を軸にして即座に最高のコンビネーションを発揮する。

「畳みかけるガガーラン！」

「応よ！ 喰らい、やがれッ！」

剛腕が喰る。壁に杭を打ち込むように、騎士の腹に刺さった槍へ刺突戦鎚を叩き込んだ。

轟音が響き、衝撃が大気に広がった。白い霧の世界が歪む。

深く、強く、水晶の杭が食い込む。

そこで終わらない。勢いを一切殺さず、ガガーランは二撃目を同じように水晶槍へと放った。

流れるように三撃目、四撃目。疾風怒濤の猛攻が加速する。

全十五連撃。アダマンタイト級冒険者ガガーランが切り札とする、複数の武技を同時に発動させ放つ超級連続攻撃。その全てが一寸の狂いもなく水晶の騎士槍へ叩き込ま

れ、頑丈な杭を死の騎士へと深く突き刺す。

「——ツツ!!」

無言の気合いと共に放たれた十五撃目。会心の手応えに、彼女は確信する。

貫いた。一撃毎に水晶の槍を喰い込ませていった連撃は、ついに槍の先端を背に貫かせアンデッドの腹に巨大な空洞を作り出したのだ。

時間が止まる。強敵を前に、大技を使ったガガーランは緩慢な動きで戦鎚を構え直す。

戦闘継続か、そんな疑問が漂い始めた頃、死の騎士はその両膝をぬかるんだ地面へと着けた。

「——ぶはっ! はあ……やったか?」

「腹にこんな大穴を空けられても動いたら、それはもうアンデッドの範疇には無いな」

イビルアイの言葉に、一同から安堵の声が漏れる。

圧倒したとはいえ、あれだけの殺気を振り撒く強敵を前に張り詰めていたのだろう。

ただ見ていた、それだけであつたアルシエも大きく息を吐いた。

濃密な時間であつた。アンデッドの大群がすぐそこまで迫っているため余韻に浸っている暇もないが、イビルアイが見せた戦い方、そして“蒼の薔薇”の連携は彼女の中で小波を立て、大きく波及しようとしている。

彼女たちを見つめる瞳に、憧憬の光が宿っていた。

ふと、後輩に見られていることに気付いたイビルアイは肩を竦め、歩み寄ってきた。

「どうだアルシエ。あれが超一りゆ——」

「すごい……イビルアイは凄い！ とてもカツコよかった！」

「わっ!!? ちょ、抱き着くな——抱き上げるな!! オイおかしいだろ！ 今は私が

講釈を垂れる、そんな場面だったろ!! 降ろせええええッ!!」

小柄とはいえそこまで背丈も変わらないアルシエに子供のように抱き上げられ、ジタバタと足掻くイビルアイ。とても超級が付く魔法詠唱者には見えない。彼女へ向けられる仲間たちからの視線も、幼子に対しての微笑ましいものに近かった。

けれど、アルシエにとっては違った。

モモンのように、遙か彼方に佇むような常識外れの傑物でもなく。

アインズ・ウール・ゴウンのように、乖離した化物でもなく。

等身大で、手を伸ばせば届きそうでやっぱり届かない、そんな高みに輝く存在。背中が見えるくらいに前を歩き、未来へと導いてくれる——そんな当たり前の英雄としてアルシエの目には映ったのだ。

第二ラウンド

第一波は容易く捌いた。数も精々三〇程度。足が速いだけが特徴のアンデッド共だった。

おかげで、第二波が到達するまでにまた少し空白の時間ができた。

「誰か傷を負ったりは、まあしてないわよね？」

「ああ、問題ナシだ。イビルアイとアルシエの魔力もいい感じに温存できてるしな」

「順調。次来るのはおよそ一〇〇秒後……そのまま本隊が雪崩れ込んでくる」

「休憩できるのは今が最後ね。数も多いし、長丁場になるわよ」

「つつても厄介な大物は先に倒しちまったしな。さすがに後は雑魚ばかりだろ。モモンがああ幽霊船にかかりきりになっちまっても問題ないねえと思うぜ」

依頼書にあつた謎のアンデッドについてほとんど情報がなかったため確証はないが、先ほど倒した死の騎士であると結論付けていた。派遣された帝国の騎士たちが全滅したというのも頷ける強敵であつたが、あのクラスの化物がそうポンポンと発生するとも考え辛い。

ガガーランの言葉は油断しているようにも思えるが、積み重ねた経験から出たもので

ある。

同じだけの経験をしてきた仲間たちも同意し、過熱気味の戦闘意欲を一つ落とした。長期戦を見込むなら、気を張り過ぎるのは無駄に体力と気力を消耗してしまふ。

長く息を吐いて熱を冷ますラキユースは、気にかけるべき少女がいることを思い出す。

モモンの新しい相方、アルシエ。彼女の目から見て、少女の実力は自分たちと比べて二段ほど劣っている。戦況に合わせて魔法による援護を任せられるだけの能力はある。だが調子をこちらに合わせている以上、無理はしているだろう。

「アルシエさん、あんまり無理はしないでね」

「い、いえ。大丈夫です、まだまだ……すいません、後ろから簡単な援護しかできなくて」
「それで十分よ。初めて組むんだもの、魔法職にガンガン前に出られる方が困っちゃう。アダマントタイト級の中でもイビルアイは特別……というより変な部類だから」

「おい、変とはなんだ、変とは!？」

抗議の声を携えて、件の変な奴がズカズカ足音を近付けて来る。

「確かに私の戦い方は一般的には理にかなっていないが、それは弱者が強者の真意を理解せずに真似だけしようとするからであって——」

「はいはい。それをできちゃうイビルアイは凄いわ」

「適当にあしらおうとするな！ アルシエからも何か言つてやれ！」

「でも確かに、イビルアイは変だと思ふ」

「……薄々思つていたんだがお前、私にだけ妙に馴れ馴れしくないか？」

カルネ村で喝をくれてやった後くらいからだつたらうか。アルシエの態度がイビルアイと他の「蒼の薔薇」のメンバーとで明らかな違いが出ていた。ラクユースたちには丁寧^{マジツクキヤスター}に接しているのに、イビルアイには親し気な間柄のような感触で話してくるのだ。

確かに、呼び捨てでいいと言つたのは彼女自身である。

しかしだ。こう砕けた調子でこられると、先達者としての威厳が問題となってくる。

自分の見てくれを全く考慮に入れていない二五〇歳越えのヴァンパイアは、二〇にも満たない小娘魔法詠唱者に詰め寄つた。

「同じ等級とはいえ私の方が先輩だ。もっとこう、敬うとかなにかあるだろう!?!」

「うん。尊敬してる、私もイビルアイみたいに凄い魔法詠唱者になりたい」

純粹、とでも表現すべきなのだろう。アルシエの言葉は真つ直ぐ過ぎた。

少し捻くれた生意気小娘なイビルアイにとってはある意味予想外で、たじろぐしかない。

「……なんか違う気がするが、まあいい。ラクユース、コイツには私から連携の細かいこ

とを覚えておく。お前はガガーランたちの話をまとめてやれ」

「ええ、任せるわ」

使える時間は短い。イビルアイは手短に、効率的に言葉を選択する。

先ほどのおさらい。要点の中の要点。今から必要になる連携と、そこからの応用。基本など抑えるつもりもなく、限られた者しか理解できない話し方。着いて来れないならそれでよかつた。事態が収束した後、ゆつくり時間を取ってみつちり仕込む。そのくらの面倒は見るつもりであつた。

だがこの少女、中々に筋が良い。

魔法を学問として捉えた時の学習、吸収速度は目を見張るものがあつた。

そもそもこの歳で第三位階魔法まで扱えている時点で天才と呼ばれる部類だ。才能のつぼみがどこまで花開き、これからどこまで伸びるのかまでは流石にわからないが、全体的に悪くない。たとえ現在の時点で打ち止めだとしても、彼女の理解力があれば努力次第でイビルアイの真似事を一欠片くらいはやって見せるかもしれない。下手に第四位階に足をつつ込むよりは、そちらの方が実戦で使える人材になる。

「——以上。質問は？」

「わかりやすかつたから、大丈夫」

「そうか。なら難しく考えず、伝えた通りにやればいい」

手をひらひらと振って、話を区切る。ちようどラキユースたちから声がかかった。接敵間近、戦闘準備を求められた。頷くまでもなく、二人は陣形を組むために三人へ駆け寄る。

意識して見ずとも、霧の中に蠢く無数の影が確認できた。

「うへえ……わかつちやいたんだが、目で見るとスゲエ数だぜ」

「まだ見えていない分も合わせれば全部で多分三〇〇〇くらい」

「おい待て、さつき言ってたよりなんか増えてねえか？」

「もしかしたらもつと増えるかも……」

ティアの言葉にガガーランが表情を歪め、やだやだと首を横に振る。

だがその短い動作で感情を切り替えたのだろう。戦士としての表情が浮かび、薄っすらと口元へ笑みが滲む。

「なんとか囲まれないように立ち回しましょう」

「ところでラキユース、あのアンデッド共の中心に魔剣の暗黒エネルギーをぶつけることはできないのか？」

イビルアイの問いかけに、ラキユースは目を見開く。

「ヤルダバオトの時も聞いたがあの時はまた今度と言っていたしな。全力で魔剣キリネイラムの力を解放すれば一国を飲み込むほどの力なのだろう？ だったら一割でも使

えるのなら——」

「あつ、あああアレは無理！　ちよつと無理！　条件が、えつと、天気とか、暦とか、そういうのがアレがアレしてこうだから……今は使えないのよ！　また今度また今度！」

アルシエは首を傾げる。先ほどまで凜とした面構えであつたはずのラキユースが狼狽えるように目を右往左往泳がせ、顔を真っ赤にしているからだ。その額にはどつと汗が浮かび、話を区切つてからも呼吸が妙に乱れている。

そういえば、と暗黒エネルギーという単語に彼女は憶えがあることを思い出した。

あれはまだアルシエが帝国魔法学院に在籍していた時だ。同じく学院に籍を置く男子生徒の何名かが、そのような言葉を口走りなにやら怪しげなポーズを取つて密談していたりした。

その光景を見た年上の先輩女学生が、なんとかという病気であると評していたが……はて、なんと言つただろうか。

とにかく、アルシエにはよくわからない話だつた。

突然の不意打ちがラキユースを襲うトラブルなどもあつたが、迎え撃つに問題はな
い。

各々の武器を構え、前方から迫る第二波に備える。霧のベールに隠されていた骸骨やら、腐肉の姿がありありと目視で確認できるようになった。前衛を務めるガガーランと

ラキュースが、群れの中央を押し返すために突撃せんと脚に力を込める。

その時だった。背後から気味の悪い音がした。瞬時に「蒼の薔薇」が振り返り、少し遅れてアルシエも続く。全員の表情が驚愕に染まった。視線の先に、倒したと思っていた死の騎士が再び立ち上がる姿が映ったのだ。

「ウソでしょ、まだ動けるの!?!」

「しごと過ぎんだろ……」

「もしかして不死身?」

「いや……しまった! おそらくそういう特殊技能だ。一度つきりか、回数制限か、致命傷に耐えられるとかそういう能力だろう」

「でも、もう見るからにボロボロだから。あと一撃で倒せそう」

アルシエの言葉通りだった。立ち上がっても腹に空いた穴が塞がるわけではない。数々の猛攻に晒されボロボロになったその肢体は弱々しく、か細い糸一本に吊られているかのようだ。もはやイビルアイが警戒するだけの気配もない。

ならば、と手を前に掲げ狙いをすませる。

「こいつで終わりだ。誇つていいぞ、お前は強かった。この極大級魔法詠唱者が保証してやる」

〈水晶の短剣〉

水晶で出来たナイフが打ち出された。

その鋭い刃先が騎士の体に突き刺されれば、今度こそ倒れる。それは間違いない。回避の前兆はなく、巨大な盾を持ち上げる余裕も見られない。

決着はついた——そう確信し視線を外そうとした瞬間、何か水晶の短剣の軌道
を塞ぎ、弾いた。

それは白い壁のようであった。突如地面より生え出て、死の騎士を守る立ち塞がる。だがよくよく見れば、それが人骨を組み上げて構成されたような手であることに気付く。それも爬虫類のような鋭い鉤爪だ。

手一つで壁と感じるほどのサイズ感。

地中に埋まったままの本体の巨軀を想像し、アルシエは正体に思い至った。

スケリトル・ドラゴン
「骨の竜!？」

「チツ、こんな時に。……ガガーラン、任せるぞ!」

地面が盛り上がり、人骨で形成された怪物が姿を現す。首が長く、四足で大地を踏みしめる翼を持った存在。その名に相応しく、竜を模ったような造形。一体どこから発声したのか、一丁前な咆哮を轟かせ赤く輝く憎悪の瞳を獲物たるアルシエとイビルアイへ向ける。

二人の反応は険しいものだ。

骨の竜——その強さは白金級の冒険者でも倒せる程度。だが魔法を無効化するとい

う耐性を持ち、魔法詠唱者にとっては天敵とも呼べる存在であった。

スケルトン
骸骨系のモンスターに有効な殴打武器を持つガガーランが対応へ動く。

入れ替わるようにしてイビルアイが距離を取り、遠距離から死の騎士を狙おうとする。だがそこで気付く。いつの間にか騎士の傍らに、ボロ布のようなローブを纏った姿があつた。

その人影がなんであるか、何をしようとしているのかを察知してイビルアイは叫んだ。

「死者の大魔法使い!? クソツ、まずい!」

おぞましい顔を愉快そうに歪めたアンデッドが魔法を唱える。その手より光が伸び、死の騎士の体を禍々しいオーラで包んだ。

レイ・オブ・ネガティブエナジー
〈負の光線〉。本来であれば負のエネルギーを対象へ送り込む攻撃魔法である

が、アンデッドに使用した場合傷を癒す効果に転換される。

見る見るうちに、腹部に空いた傷が塞がっていく。

迷っている暇はない。冷徹な思考を持ってイビルアイは回復しきる前に勝負をかける。高威力を孕んだ魔法を放つ。だが今度は上空より白い塊が降り立ち遮った。巨大な竜の形を模した人骨の集合体。ガガーランが現在相手取っているものとは別の個体。

「二体目だ?!」

役割

状況は最悪と呼ぶほかない。

アルシエ目がけて飛んで来る矢の数々を躲しながら、彼女は歯噛みした。

まず戦力差からして隔絶している。こちらは「蒼の薔薇」の四名にアルシエを加えた五人。対して襲い来るアンデッドの大群は三〇〇〇以上の数を持ち、魔法詠唱者にとっては天敵である骨スケリトルドラゴンの竜が二体。さらには厄介な魔法を使える死者エールの大魔法使いダーリツチに、英雄級の強さを誇る死の騎士。もしこれが人間相手での戦力差なら、潔く白旗を挙げることも一つだったろう。

だが相手は生者を憎むアンデッド。降参したところで未来はない。

何より人類最高の強者である彼女たちが、そう易々と闘争を諦めるわけにもいかない。

幸い、食らい付くだけの実力はあつた。

咆え猛る雄叫びを放ちながら、その辣腕が振るわれた。

ラキユースは浮遊する剣群フロートイングソールズを巧みに操りアンデッドの大群を抑え込み、魔剣キリネイラムを振るって着実に数という戦力を削っていった。その背後でティアが忍術を駆使

し、敵の進行を妨げながら仲間たちへの支援も行っていた。ガガーランは怒涛の猛攻を仕掛け、一刻も早く骨の竜を穿ち砕かんとした。イビルアイは特に忙しく、死の騎士、死者の魔法使い、骨の竜——厄介で強大なアンデッドを三体も相手取り、仲間たちへその毒牙が向かぬように絶妙な距離を保ちながら戦闘を継続。

それぞれが自らにできることを最大限こなす。最も難しい“当たり前”を高水準で成し遂げていく。信頼の上に成り立った、合図不用の連携によりなんとか戦況は互角を保っていた。

もしも、いま彼女たちが相手しているのがただ強く数が多いだけのアンデッドなら、あるいは巻き返せたのかもしれない。美しき蒼薔薇の英雄譚がまた一つ紡がれ、語り継がれることになっただろう。

だが、この世界はどうにも意地が悪い。

ローブに隠された死者の大魔法使いの口元が歪んだ。そのまま何かを呟いたのをアルシエは見た。

途端に事態が急変する。アンデッド共が明らかに動きを変えたのだ。

数にかまけて押し潰そうとするだけだった一団が一度距離を取り、いやらしくも弓や魔法を放ってきた。前衛を張っていたラキュースは自前の運動能力と魔法の加護だけですべて振り払う。しかし問題となったのは後衛。むしろ支援に徹していたティアの

方を集中して狙い、彼女の動きを封殺しにかかった。

当然、余力のあるラクユースが援護に下がろうとするが、その呼吸を見計らったかのように接近戦を主とするアンデッド共が攻勢に詰めた。

「蒼の薔薇」の連携にはころびが開始する。

その影響をモロに受けたのはガガーランだった。ティアの忍術による援護で多少の攻撃を無視して捨て身のような特攻を仕掛けていた。だがその支援が切れた瞬間、呼吸が乱れ骨の竜の前腕の攻撃をまともに受けてしまう。壁に叩きつけられる——いや、逆に壁を叩きつけられるような雑ぎ払い。

前衛職だけあって彼女のタフネスはその程度で崩れない。膝をつくもすぐさま立ち上がり、続く追撃を華麗にいなした。そのまま深く踏み込んだ。無理をしたおかげで彼女が相手取る骨の竜は弱っている。あと少し、あと一押しで倒せるところまで追い詰めていた。

——この一体を始末すれば戦況は好転する。

強い確信を胸に、焦燥を隠しながらガガーランは剛撃を振るう。

直撃——その寸前、横やりが入った。

轟々と燃え盛る火球がガガーラン目がけて放たれていた。咄嗟に転がり躲すが、地面に着弾した火の玉は火柱を上げ辺りを舐め回す。その範囲の外までなんとか抜け出し

邪魔者へ野獣の如き眼光をくれてやるが、邪悪な叡智を宿したアンデッドには涼しい風と変わらないようだ。

枯れた小枝のような指先が向けられ、フレイヤボール「火球」が連射された。

たまたま走って距離を取り、追うように火の手が伸びる。ガガーランがそのまま前線から引き離されれば、連携は完全な崩壊を迎え押し潰されかねない。死の騎士を翻弄していたイビルアイがその手を止め、死者の魔法使いへ攻勢に出た。フライ「飛行」による頭上からの急襲。朽ちた肉体程度なら一撃で葬れる高火力魔法を放つが、行くてを阻むように白い壁が遮った。

骨の竜——魔法を無効化するイビルアイの天敵が、自らの身体を盾にし司令官を守ったのだ。

仮面の奥であと一歩及ばない歯痒さに顔をしかめる吸血鬼。そんな少女へ骨の竜が咆哮し、腐った翼を羽ばたかせて襲いかかった。魔法詠唱者に迎撃の手段はない。身を捻り、紙一重で天地を入れ替えるように回避。

そのまま——せめて一撃を、と。

手の平を油断しきっているロープ姿のアンデッドへ向けた。

だが、それよりも速く疾風の如き剣がイビルアイを背後から襲った。

死の騎士、その一撃は重く鋭い。彼女がその身を魔法の防壁で守っていなければ容易

く両断されていたと確信できる。

吹き飛ばされる華奢な身体を追うように、竜がその罅を広げた。

イビルアイは〈飛行〉の効果でなんとか体勢を立て直し、間一髪で噛み砕かれる未来を逃れる。

危機を脱したが、その心境は驚愕に激しく揺れていた。

アンデッドたちの動きが最低限連携と呼べる代物であったからだ。

普通アンデッドは徒党を組むことはあっても連携を取ることはない。一部を除き知力が低いことが原因で、指揮を執っても上手くまとまらないか粗末な団体行動程度しか結果を出さなはずだった。しかし今日の前にいる一団は死者の大魔法使いの下で息を合わせるような動きを見せた。

疲れを知らず、恐れも知らないアンデッドたちが連携を成す。つまり不死の軍団を築いたのだ。

これがどれだけ厄介かは、劣等種たる人間ならば痛感できる。

連携は弱者たる彼女たちの武器の一つであった。その専売特許が侵されたということは、大きなアドバンテージを失ったに等しい。

練度は低いにしても、圧倒的な数の暴力と個の強さで補って余りある。

なんと互角に留めていた「蒼の薔薇」であったが、ついに全員の顔に苦い色が走っ

た。

大きく崩壊はしない。けれど、ギリギリと確実に追い詰められていた。

そんな中で、アルシエという少女は――。

「私は……何も……」

――何もできていない。

白色の空を駆け、魔法を撃ち下ろし、有象無象の数を減らす。

単調にそんなことを繰り返した。でも、それは無意味だ。なんの価値も見出せない行為だ。

「どうして……」

――自らの非力が憎い。

彼女がどれだけ敵の数を削っても、無限に湧いてきそうですらあるアンデッドの大群には焼け石に水もいとこらだ。彼女が魔法を一つ放つ間に、霧の向こうより新たな影が五体現れる。骨が擦れ、腐肉が蠢く不快な音は静けさを尊重することなく、一層この空間を満たした。

「どうして……」

弱いことは嫌でも自覚していた。足りないことは、もう受け入れていた。

それでも、まだやりようはあるのだと教えてもらった。

——だから、こんな自分でも何かできるんじゃないかって。

「モモンさん……イビルアイ……私は、どうすればいい……う。」

紙一重を潜り抜ける蒼き薔薇の英雄たちの闘争において、アルシエは蚊帳の外だった。

際どくも完成された連携の中に、顔を合わせたばかりの少女が入り込む余地はない。ならばせめて少しでも彼女たちへ向かう矛先を減らそうとしても、圧倒的数の前には困が一つ飛び回ったところで意味を成さない。

いてもいなくても変わりはない。戦況に影響を与えない獲物にアンデッドたちも興味が失せたのか、やがて矢も飛んでこなくなった。命令がなければ本能に付き従う地を這う虫のような有象無象だけが、宙に浮かぶ彼女の足元で蠢いていた。

だらり、と杖を構えていた腕から力が抜ける。

結局、アルシエは遠巻きに英雄たちの奮闘と苦境を眺めていることしかできない。

気付けば『蒼の薔薇』は取り囲まれ、互いに背中を預けるような立ち位置になっていた。

四方八方より飛びかかる雑兵を斬り払い、撃ち落とす。そこへ全員まとめて踏み潰さんと、骨の竜がその巨大な前足を振り上げた。

迎撃としてラキュースの魔剣が閃く。

刀身の夜空に浮かぶ星々のような輝きが膨れ上がり、一度振るえば漆黒の爆発が放たれた。

暴風が吹き荒れる。無差別的に空間を飲み込んだ魔剣のエネルギーは、骨の竜を弾き飛ばしたただけでなく周囲のアンデッドたちを多数巻き込み、霧の世界を僅かに切り拓いた。

凄まじい威力だ。アダマンタイト級の冒険者の切り札に相応しいくらいに。

だが足りない。大技一つで覆るほど、彼女たちを取り囲む状況は易しくない。

ぼつかりと空いた敵の布陣は、後ろから押し出されるように次の兵が埋め立てた。

視界の通る空間も、ものの数秒で再び霧に覆われた。

むしろ、深い霧の世界が一層白く不明瞭になった気がした。

もはや、自らが目蓋を開けているのかどうかもアルシエには定かではなかった。

波一つない水面をたゆたうような意識がぼんやりと浮かび、その中にかつての記憶が映る。

フォーサイト。

彼女がかつて所属したワーカークリームであり、恩人たちと出会った“居場所”だった。穏やかな記憶の中で、三人の仲間たちは微笑をアルシエに向けている。

もう二度と見ることはできないであろう光景。

彼女が失ったモノ。

その面影が、いま危機に陥っている仲間たちに重なり――。

「いやだ……もう嫌……」

小さく呟くと、アルシエは敵陣の中央に突っ込んだ。潜り込むと、ガムシヤラに魔法を放つ。

倒しきる必要はない、ただ吹き飛ばす。温存していた魔力の使いどころだとばかりに、腐肉と骨で出来た蠢く壁を破壊した。

考え無しの行動だった。次の一手を繰り出せるわけではない。

だから息切れた瞬間に襲いかかった一撃に、彼女の華奢な体は何も備えることはできなかつた。

巨大なアンデッドの腕だった。無防備な腹部を大槌で叩かれたような衝撃が走る。堪えるという選択肢さえ用意されていない。

軽いボールのようにアルシエは吹き飛ばされた。獲物に群がろうとするアンデッドたちの上に落ち、幾度か跳ねて、ようやくと地面に転がればイビルアイたちの足元まで運ばれたようだった。

「おい、大丈夫か!? ラキユース回復を――」

「だい……丈夫、だから。それよりも……」

「馬鹿言え、魔法で防御も何もしてなかっただろ！ 致命傷じゃないのが奇跡だぞ」
迷惑はかけられないと無理やり体を起こして両足で立った。いたるところ痛むが、まだ動くことはできそうだ。

「なんであんな無茶をした？」

「何もできないのはもう嫌だから……もう、目の前で大切なモノを失いたくない」

「ツ——」—— だったらもつとやり方を考えろ！ 魔法詠唱者の役割は無謀な特攻をすることじゃないぞ！ 折角目をつけられていなかったんだ、その間に逃げてモモン様を探しに行くこともできただろうが!？」

言われて、ハツとする。

どうしてそんな簡単なことを思いつかなかったのか、と。

「だめ……やっぱりは、貴方みたいになれない」

「甘ったれるな。悪いが今は弱音に付き合ってやる余裕はない—— だがまあ、丁度よかったか」

「イビルアイ……?」

不穏な気配を感じ、アルシエは眉根を寄せる。

漆黒のローブに包まれた小柄な体が〈飛行〉によって浮かび上がる。

「覚悟を決める時だな。足止めはしてやる、全員逃げろ」

「おい待て、まだ諦めるには早いだろ」

ガガーランが怪訝な声で言う。

「かもな。だが私の魔力も無限じゃない。悪足掻きしたおかげで魔力が不足して時間が稼げませんでした、じゃ話にならないだろ。安心しろ、私だって死ぬつもりはない。お前らを逃がすだけすれば、その後は転移で離脱するさ」

余裕を湛えたような声。だが短い付き合いのアルシエにだって仮面の下に浮かぶ表情がわかった。

イビルアイが決死で挑むことなど容易に想像がつく。自分の転移を考慮に入れた立ち回りなどするつもりはないのだろう。

「逃げるなら一緒に——」

「それができるならとつくにやってる」

「だったらせめて、私も残って——」

「お前なんか役に立つか。それに……お前の命は、一人で勝手に使い道を決めてもいいものなのか？」

アルシエは視線を足元へ落とすことしかできない。

イビルアイの言う通りだ。彼女の命は、もはや彼女一人のモノではない。

未来を託してくれた仲間たちがいる。

歸りを待つてゐる妹たちがいる。

返しても、返しきれない恩だつてある。

そんな当たり前のことを、覚悟に決めたはずのことを――。

結局は何も変わつていない。アインズ・ウール・ゴウンと出遭つたあの時から。

ナザリック地下大墳墓という地獄で、一人逃げたあの瞬間から。

それが悔しくて、情けなくて、苦しくて、辛い。

俯き唇を噛み締める。そんな彼女の頭の上に、優しい手がのせられる。

「さつき教えたこと、絶対に忘れるなよ。日々の鍛錬も怠るんじゃないぞ。あの方の傍にいれば命をかけるような時も来るだろうが、それまでは大切にしろ」

「……」

「行け」

イビルアイの声に三人の仲間が頷き、アンデッドの群れに猛攻を仕掛ける。

雑兵だけならばどれだけ数がいても彼女たちの敵ではない。まるで塵の山でも吹き飛ばすように、群れの一部が瞬時に消し飛んだ。

きつとこの隙が、包圍網を脱出できる最後の機会だろう。

だがアルシエは動かない。その瞳を今から死のうとしてゐる少女へ向けていた。

「おい、何やつてる？ 早く行け、遅れるな」

「……やつぱり、いやだ」

「いい加減にしろ。ガキのワガママには——」

「私は貴女に死んでほしくない。モモンさんだつてきつとそう思っている」

彼の名前を出すとイビルアイが一瞬口ごもったが、私情をこんな時に挟むほど愚かではなかった。すぐに憤りに染まり叫ぼうとするが、それが彼女の優しさなのだ。アルシエは理解する。

「お前は——」

「イビルアイは言った。考えろつて、だから頑張つてみる」

「はあ？」

目を瞑り、全員生き残れる方法を探す。

今それだけの余裕があるのはアルシエしかない。

——考えろ、アルシエ・イーブ・リイル・フルト！ 私にはそれしかない！

少女は心に喝を入れる。昂ぶれ、咆え猛れと。

不可能という壁が目の前にある。それを覆さなければならぬ。

越えるか、ぶち破るか——いかなる方法も届きそうにはないが、ならば考え続けるしかない。

どんなに苦しくても、どんなに辛くとも。

それが、あの英雄の隣に立つということなのだから。

時間はない。必要な情報を頭の中でかき集め、条件と照合して選びまとめる。

すると答えは案外簡単に出た。

「……イビルアイ。モモンさんはこの軍勢を前にしても勝つと思う？」

「当たり前だろう。こんな雑兵がいくらいたところで、彼が負けるものか」

「うん、私もそう思う」

「何を今更。彼を信じなくて他の誰を信じると言うんだ、お前は？」

「ううん、イビルアイの言う通り他にいない。だから、信じようと思う。モモンさんはとつくに幽霊船を破壊して、私たちを探そうとしている————きっと気付いてくれる、と」

言うなり、アルシエは空へと駆け上がった。白い世界を切り裂いて、上へ、上へと。突如抜け出すような行動をした彼女を飛行能力を持った個体が追い、無数の矢が射られる。

回避行動など取りはしない。ただ真っ直ぐ、ひたすら真っ直ぐ天へ向かう。

——モモンさんに期待されている。

イビルアイが彼がアルシエを仲間にした理由として、そうでないかと語っていた。

そうであつたらいいな、と思う。そうであつてほしい、と願う。

もし本当にそうなら、モモンがいま彼女に望むことは何か——。
「私も守りたい」

きつとそれが彼の期待に応えることだ。

内より湧き出るような感情がアルシエを突き動かす。

その想いは強く、曲がらず、止まらず——たとえ打ちつけられた体が悲鳴を上げても、アンデッドの攻撃が掠めても、無数の矢の内一本が深々と腕を射抜いても。伝う赤い血の熱感に耐えながら、霧の世界を駆け上がった。

白と色彩の世界の境界付近で、彼女の飛翔が止まる。

振り返り見下ろせばわらわらとアンデッド共が追って来ていた。

その一団の中央へ、アルシエは指先を向けた。

〈電撃〉ライトニング——第三位階の攻撃魔法を用意する。その名の通り、一直線に貫く槍の如き

電撃を放出する魔法である。

詠唱は終わり、十分な魔力は練り上げられた。

だがアルシエはまだ電撃を放たない。過剰なほどの魔力を練り込み留める。彼女の指先には、過剰供給によって暴走した魔力が渦巻いている。それを二度三度と繰り返し、荒ぶる魔力は奔流と化した。

通常、魔法の威力を底上げするのは特殊スペシャル技術か支援魔法の分野である。

しかし他にも威力増加を図る方法もある。

それが今彼女の行っている魔力の暴走。

必要以上の魔力を込めることでブーストするのだ。

だが決して良いものではない。普通の魔法詠唱者はこの技術は使わない。魔法を教える者ならば禁忌とすら定めることもあるほどだ。込めた魔力に対して威力の上げ幅が小さく、非効率なことが原因であった。さらに放つ前に魔力を押し留めることに失敗し暴発すれば、その破滅的な威力はそのまま術者を襲う。

無理な行使は負担も大きく、諸刃の剣にもならない捨て身の賭けだ。

そんな賭けにアルシエは残る全てをつぎ込んだ。

魔力は底を尽いた。足りない分は命を削る。空へ浮かぶための《飛行》も効果が切れた。途切れそうになる意識と一緒に落下していく体。それでも歯を食いしばり、彼女はついに最後の一撃を放った。

電撃——そう呼ぶにはその魔法は巨大過ぎた。

いくら非効率な強化であっても、アルシエが全てを注ぎ込んだ一撃は天雲より大地を穿つ雷の如き閃光だった。

正確な狙いがあったわけではない。

空中に追って来た敵の何体かが巻き込まれ、仲間たちへ当たらなければそれでいい。

そしてそれは叶い、白い世界は瞬く光に染められた。

強烈だが、ほんの一瞬だったろう。瞼一つ開ける力の残っていないアルシエの霞んだ意識の中では確認することもできない。彼女は真つ暗な世界に落ちていく。

抵抗はない。ただ願った。

—— 届け、と。

真つ白な世界で、彼女は漆黒を望んだ。

彼が絶対の英雄であることに賭け、全てを救うことを願ったのだ。

「も、モン……さん……」

小さな言葉は掻き消えた。彼女を意思を届けるには霧は分厚過ぎた。

それでも、彼女が全てを賭した閃光は——。

不意に、風が吹いた。途端、それは暴風に変わった。

白い世界を斬り払い、真つ二つにかち割った。

正常な視界の世界が広がる。その中にいた者は一つの例外もなく動きを止め、思考する。

—— 一体何が、と。

答えを求め「蒼の薔薇」の面々は風上へと視線を向けた。

遠い——目に映る明瞭な光景、その奥に小さな黒点が見えた。

光を呑み込むような光沢を湛えた漆黒。

この場にいる人間の誰もが見望んだ、英雄を示す色。

彼は片方の大剣を振り下ろした姿勢のまま、その剣圧で斬り裂いた光景を見据えた。

そして、閃光が走るような速さで駆け出し跳躍した。その先には力なく落下している

仲間の姿。

気を失っているようだった。

きつと無理をしたに違いない。

そうさせてしまった己の不甲斐なさを恥じ、そしてそんな素晴らしい仲間期待され

ていることを誇りに思った。

優しく、アルシエの身体を抱きとめる。

穏やかなその表情に、彼は語りかけた。

「ありがとう、おかげで間に合った——あとは任せろ」

逸話

英雄というものに憧れていた。

幼心に叔父の冒険譚に心躍らせていたのは、貴族である両親からすれば面白くないものだったのかもしれない。健康であることは良いが、ハツラツとし過ぎたのは貴族の娘としてあまり褒められたものではなかっただろう。きつと淑女らしく育つてほしいと願われていた。

それでも彼女は、ラキユース・アルベイン・デイル・アインドラは冒険者となった。溢れ出る生命力と意志を行動に変え、家を飛び出したのだ。数々の冒険を繰り返し、人々に英雄として称えられ、齡十九にして最高位であるアダマンタイト級にまで上り詰めた。

命の危機に瀕したことは数知れず。

ただ昔に憧れたような、心躍る冒険も同様に。

頼れる仲間たちとも出会い、伝説に語られるような魔剣を手にし、幾つもの困難を乗り越えて今を生きている。

きつと瞬きの間にその生涯を閉じることになったとしても、彼女は己に関して満足

できただろう。

——自分はずっと、かつて憧れた英雄のようになれたのだ。

「ウソみたい。これは夢かしら……」

だが、目の前の光景は一体何だろうか。

彼女は自分の中のナニかがひび割れていくのを感じる。

話には聞いていたが、目で見るとそれはとても信じられなくて。

思わず目を逸らしたくなる。瞼を閉じたのは、そんな感情から浮かび出た反応だった。

再び世界を見据えると、未だ白い世界の中にありながら、漆黒の破壊が眼前を横切った。

ゆっくりと目で追う。だもうそこに彼は存在しない。蹂躪され尽くした跡だけが散らばっている。

「ねえ、ガガーラン……」

「ああ……バケモンだ。とても同じ人間とは思えねえよ。まずもって剣圧でこの分厚い霧をかち割るなんざ、どんな怪力してりや出来る芸当なんだかわかんねえ」

彼と同じ戦士職であり、人類最高峰の一人でもある仲間の口から出た言葉は重みがあつた。

失礼なことだと両者とも理解していても、思わずにはいられない。
漆黒の英雄モモン。

その実力を過小評価していたつもりはなかった。短期間に幾つもの偉業を成し遂げ、瞬く間に彼女たちと同じアダマンタイト級にまで上り詰めた冒険者。かの大悪魔ヤルダバオトへ一騎打ちを挑み、見事撤退せしめた傑物。

その英雄譚は王国にあれば吟遊詩人の詩にのつて勝手に耳に入ってくる。

実際の活躍はイビルアイから耳にタコが出来るほど聞かされた。

同格であると自惚れることはしなかった。

仲間たちと努力し続けなければいつかは追いつけるのではないかと、そんな風に思っていた。

——甘かった。

両手に握られた二本のグレートソードが、棒切れのように振るわれる。

あまりに簡単に振り回すものだから、実はハリボテじゃないかと邪推すらしてしまう。だが、結果起こる竜巻の如き破壊がその下らない考えを否定する。直接その刃が両断したものは勿論のこと、周囲にいた存在もまた剣圧という野太い殴打武器によって吹き飛ばされ、塵へと還る。

そんな破壊が延々と続く。止まることなく、迫るアンデッド師団の波をたった一人で

迎え撃つ。端から端へ、まるで閃光の如き動きで駆けまわり三〇〇〇を超える数の暴力を押し返して見せる。

現実を受け入れるよりも、まず夢ではないかと疑うような光景。

その離れ業は、人間の領域を越え、彼女たち英雄の領域も飛び越し逸脱している。

——これが英雄。これが本物。

今まで憧れを抱いて来たモノたちはなんだったのか。

ラキユースは魔剣の柄を握る手に力を込めた。

「やめとけ。モモンの奴は一人で十分だと言ったんだぞ」

「でも……」

「事実、あれから一体も俺たちに手が届いてねえ。精々飛び散った残骸くらいだ」

モモンが合流した後、彼は『蒼の薔薇』に休むように言つて屍の大群へ突撃した。

彼女たちが口を挟む間もなかった。

そして宣言通りになった。亡者の呻き声と生々しい破壊音が絶え間なく聞こえるが、それ以外は体を休めても問題ないくらいに彼女たちの周囲は平和なものになった。

それが、歯痒い。

いつそ、ヤルダバオトのように隔絶した敵が相手ならば割り切れる。

だがアンデッド師団を構成する下級のモンスターたちは、ラキユースたちにとつても

片手間で倒せるような相手だ。殲滅を手伝うことだってできる。だが彼の動きは完璧で、一切の無駄がないように思える。おそらく彼は高速で動きながらも全体を見渡しているのだろう。

そこへ下手に割り込んでも邪魔にしかならない。

手が届きそうに届かない、そんなもどかしさに息を吐いた。

「力不足がこんなにも悔しいなんて……久しく忘れていたわ」

「嫉妬か？」

「……言わないで。余計に情けなくなるから」

「まあ、いつもは俺たちが嫉妬と羨望を向けられる側だからな」

だから仕方ないことだと思う、とガガーランはそんなつもりもなさそうに慰めの言葉を吐く。

肩を竦め、ちらと隣を見た。

「やっっちゃえモモンさまー!!」

「イビルアイうるさい。アルシエが起きる」

その姿相応な様子ではしやぎ声援を送る仲間と、地面に座りその太ももに少女の頭をのせている仲間。ラキユースが目をやったのはその両者ではなく膝枕をされている少女だった。

傷は魔法によつて癒されているが、それにしてもこの状況で随分と穏やかな表情で寝ている。

「凶太い神経をしているようにも思えるが、きつと違う。彼女はきつと普通の人間だ。当たり前前のことを考え、当たり前前のことを感じる。そう確信しているからこそ、今にして思うことがある。」

「悪いことしちゃったのかもしれないわ……」

「何がだ？」

「アルシエさんもきつと同じような気持ちだったんだらうなつて。ちゃんと気を配っているつもりだったけど、全然ね。結構こたえるわ、コレ」

「でもアイツはモモンの相棒として役割を果たした。じゃあ、お前はどうかラキユース？」

「どうだ、と問われてもそれこそ『何がだ』と返すしか思いつかない。」

「しかし真剣な彼女の目を見て、問われているものを自覚した。」

「ガガーランとはかれこれ長い付き合い合いだ。初期の『蒼の薔薇』メンバーであり出奔した当時、助けてくれた恩人である。そんな間柄だからこそ、何を問われ、何故そんな問いを今投げかけて来たのかもわかる。」

——良い仲間を持った。

信心深く生き、日頃善い行いをしてきたおかげだろうか。

そんなことを半分冗談に考えながらも、ラキユースは胸を張って答える。

「決まっているでしょ。前進あるのみ！ もつともつと強くならなくちゃ。目標が大きくなったんだからその分ね」

「ハッ、そうだな。さすがは俺たちのリーダー、そうでなくつちやいけねえ！」

片や生命の魅力が溢れ弾けんばかりの笑顔を浮かべ。

片や野獣の如き力強くも頼もしい笑みを湛える。

くよくよしている暇はない。こんな所で心が折れ、諦められるくらいなら幼い時に両親を困らせることはなかっただろう。今こうして笑える彼女であるから、最高位まで上り詰めることができた。そしてこれからも、目標に向かって仲間たちと高め合っている。

ラキユース・アルベイン・デイル・アインドラとはそういう人物である。

そんな彼女の傍らに、静まった破壊の権化が着地する。片方のグレートソードを地面に突き刺し、辟易したように息を吐いた。

「終わりが見えないとはこういうことなのでしょうね」

「やはり手をお貸ししましょうか？」

「いえ、それには及びません。恰好を付けた手前、なんとしても一人でやり遂げたいとこ

ろでして……ただ、代わりと言っては何ですが、アインドラさんに一つお願いしたいことがあります」

もちろん、と彼女は頷く。

内容をまだ聞いてはいないが、彼からの頼みならば断わる理由はない。

だが、続けて彼の口から出た言葉には一瞬耳を疑った。

「その魔剣をお貸しいただけませんか？」

「——えっ？ キリネイラムを、ですか？」

「はい。魔剣キリネイラムをお借りしたい。ダメでしょうか？」

自分の武器を他者に貸すというのはどうしても躊躇してしまう。

しかし相手はモモン。頼みを無下にするのは引け、武器を貸しても問題ないと思えるくらいには信頼できる人物だ。

数秒、僅かな葛藤はあったが彼女は魔剣の柄を彼に差し出した。

「ありがとうございます」

「しかし何故？ キリネイラムは良い剣ですが、モモンさんの剣とそう差があるとは

……」

「単純な性能比較なら総合してみるとおっしゃる通りですが、この魔剣には私の剣には無い能力がある」

モモンの言葉に持ち主であるラキユースが思い浮かんだのは、キリネイラムに備わる能力——超技・暗黒刃超弩級衝撃波だった。魔剣に魔力を注ぎ込むことで無属性のエネルギーを爆発として放つことができるのだ。

この威力は注ぎ込む魔力の量に比例する。

もしも超級の魔法詠唱者と同等の魔力量を持つ戦士がこの剣を振るえば——。

「ですが、その能力は使いません。私では使いこなせませんし」

「えつと、ならば何を？」

「似たようなことですが、今回はこの剣の『逸話』を前借させてもらいます」

意味が解らない。だが彼はそれで説明しきったつもりになったようだ。

また群れを押し返すべく前へと踏み込み、片手に持ったグレートソードと同じようにキリネイラムを振るう。その破壊痕を見ていると、彼が何を狙っているのか少しだけわかった。

「包囲が、崩れている……」

「マジだな。アイツ、敵を押し返すだけじゃなく敵の布陣を崩してやがったのか」

四方八方から押し寄せていたアンデッドの群れは、いつの間にか前方に集中していた。

円周の半分の外側を埋め尽くすように並んでいる。配置を切り崩し、一方向へまとめ

ることで彼はなんらかの範囲攻撃によって一気に殲滅するつもりなのだろう。

そして、その形が納得いくものになったのか彼は再びラキユースたちのもとへと戻ってきた。

「さて、近くに我々以外の生者がいないことも確認しました。仕上げといきましょう」
モモンはもう一本のグレートソードも地面に突き立て、両手で魔剣キリネイラムを握る。

ゆつくりと淀みない動きで上段に構える。すると魔剣に変化が起こった。

剣の内側より漆黒のエネルギーが溢れ出したのだ。驚いたのもつかの間、周囲に広がったエネルギーが渦巻き再びキリネイラムを中心に収束する。

——その光景は夜空に流れる星々の河を思わせた。

幻想的で美しい。だがその美麗さとは裏腹に、剣に集まる圧力は暴力的だった。

漆黒のエネルギーが圧縮される。その度、世界そのものが軋むような異音がする。周囲を覆う白い霧が霧散していく。

思考をほとんど持たないはずのアンデッドたちからも、どよめきが起こった。

彼はそんなこと一切気にも留めず、天に掲げた剣をそのまま腰の高さで横に引き絞るように構え直した。

瞬間、溢れていたエネルギーが全て魔剣の内へと収まった。

それが何を意味するのか、理解したのであろう。死者の大魔法使いが叫んだ。

応え、大群の後ろに控えていた二体の骨スケリトルドラゴンの竜が飛び出し、死の騎士が中央よりアンデッドたちを吹き飛ばしながら猛然と駆け出してきた。

並の冒険者ならそれだけで心臓が竦み上がるような圧力を感じるだろう。

だが、この英雄がその程度で揺れるはずもなかった。

「もう遅い」

冷たい声が響いた。

引き絞られた剣が放たれる。横へ薙ぐような一閃。

剣の軌跡に合わせ、漆黒の閃光が白い世界に走る。

一瞬であった。漆黒のエネルギーは長大な刃と化して放たれ、彼の前に立ち塞がった。全てを両断した。

破壊の音はない。ただ、崩れ去る音だけが響く。

後にティナが語るには一〇〇〇以上。

吟遊詩人が謳うは三〇〇〇以上。

膨大な数のアンデッド共を、強弱まとめで一振りで屠り去った。

漆黒の英雄モモンの英雄譚がまた一つ生まれた瞬間。

そして、かの十三英雄の一人の武器とされる伝説の魔剣キリネイラムにもまた、新た

な逸話が書き加えられた。

「——ふむ。やはりいい剣だ」

偉業を成し得ながらも当の本人はなんでもないように、漆黒の刀身を眺め褒め称える。

啞然とし声一つ発せられずにいたラキュースたち。ただ魔剣の持ち主である彼女だけは、モモンが愛剣を持つ光景に僅かな違和を目で捉えていた。

——刀身の色味が強くなっている？

「ありがとうございます。アインドラさん。お返しします」

「えっ、あつと……はい」

返還され、受け取ったラキュースはまずその握った柄から感じる変化に驚いた。

魔剣キリネイラムに宿っている力が強くなっているのだ。

原因は不明。だがまるで別物と呼べるほど、強力な魔力が宿っているのを感じる。

それでいてこれまで通り手に馴染むのは、不可思議でならなかった。

「モモンさん……一体何を？」

「そうですね、言葉で説明するのは難しいのですが……強いて言うのなら、その剣に眠っていた力を解放した———というところでしょうか？」

モモンは慎重に言葉を選ぶようにゆっくりとそう語った。

するとラキユースの表情が固まり、ガガーランが称えるように口笛を吹いた。

「へえ、それってえとつまりさっきのがラキユースの言ってたやつか。すげえな、国一つ飲み込むつても納得だ。しかしモモン、大丈夫なのか？」

「何がでしょう？ この通り五体満足で元気ですが」

「いや体じゃなくて。精神を乗っ取られたりしてねえか、闇のモモンとかに？」

「闇の、モモン……？」

「ラキユースの奴がたまに一人の時に会話してるみたいなんだよ。暗黒の精神が——」

「あああああああああああああああああああああああああああああああああッ!! それ以上はダメえええええええええええええええええええええええッ!!」

突如絶叫を上げ、顔を真っ赤にしてラキユースが再起動した。

事情を知らないモモンは首を傾げるしかなかった。

知らない天井

見知らぬ天井を見上げる。どうやらベッドの上らしい。

この目覚めの感覚は懐かしかった。

ワーカー時代——もっと言えばフォーサイト加入当初、慣れない経験に疲弊し帰路の最中に倒れ、気付けば何処かに横たえられていたなんてことがあった。ヘツケランやロバーデクに背負われ、安全な街まで運ばれていたらしい。

情けない記憶だ。

そして、今回も同じだろうとアルシエは悟った。

濃密な霧の記憶。最後に憶えているのは自らが放った雷の閃光。

目が眩むような光の中で意識が暗転し、落下していく感覚だけが微かに残っていた。

そうして今、木目調の天井を見上げていることを考えると、全て丸く収まったらしい。肝心な場面を目にはしていないが、彼女の願いは確かに届いたのだろう。

——みんなは無事だろうか？

いらぬ心配をする。彼女が生きている以上、彼は間に合ったに違いない。

ならば何を心配する必要があるのか。馬鹿らしいことだ、と思考を笑い飛ばして上体

を起こす。

視線を左側へ。室内を見渡せば、簡素で使い心地の良さそうな内装であった。

どこかの宿屋の一室にも思えるが、印象としては家屋に設えられた客室の方が近い。あまり主張をしないインテリアに、元貴族でもあつた彼女は新鮮という感想を持った。

彼女の身は冒険用の装備は脱がされ、肌着だけになっていた。

色々と迷惑をかけてしまったらしい。そう考へてため息を吐くと、声が出た。

「知っているか？　ため息を吐くほど幸せは逃げるらしい」

驚きに肩が跳ねる。右側、先ほど部屋を見渡した方向と逆からの声。

振り返ると漆黒の鎧がベッドの傍らに置かれた椅子に腰かけていた。

アルシエがパクパクと口を開閉していると、彼は立ち上がりカーテンを引いて窓を露わにした。そこから見える窓の景色は黄昏時だった。

「よく眠っていたな」

「ぐっすりと……はい……」

そこで彼女は今自身がどんな姿をしているかを思い出した。

慌てて足元の毛布を引っ掴み、肌色を晒す体を覆い隠した。

「お見苦しいところを……」

「……ふむ。ではまず何から話すべきかな？」

「えつと……とりあえず、ここはどこでしょう？」

「エ・ランテルさ。冒険者組合長殿の御宅にお邪魔させてもらっている」

モモンはまた傍らの椅子に座り、部屋の内装に目をやった。

アルシエは未だ治まらぬ気恥ずかしさに目を伏せるしかない。

「彼の厚意に甘えさせてもらった。奥さんの手料理は中々美味だったよ。また後で食べ

させてもらおうといい」

「そ、そうですか……」

「他に何か聞きたいことはあるか？」

「……もしかして、眠っている間ずっと傍にいてくれたんですか？」

「アインズ・ウール・ゴウンへの警戒も忘れるわけにはいかないからな」

「ご迷惑をおかけしました」

「美人の寝顔を眺めていただけだ。迷惑なんかじゃない」

また歯の浮くようなセリフを吐く彼に、彼女は伏目がちの視線を送る。

言葉にして問いたいものがある。だが、怖くもあつて切り出せない。喉にまで出かけていて引つかかる言葉に、結局情けないままだと自嘲する。そしてまた一つ、ため息を吐こうとする。

その直前に、彼は立ち上がった。

「さて、私は少し組合へ顔を出してくる。キミはもう少し休んでいるといい」

「はい……ありがとう、ごさいました」

「明日の朝には王都に戻るために移動するつもりだ。その予定で考えておいてくれ」

はい、と短く返事をする。

モモンは頷くとその場を後にするよう、ドアに手をかけた。

扉が押し開けられる。隙間から茜色の陽光が部屋に差し込んだ。

その眩さに彼は足を止めた。そして振り返り、アルシエへ言葉を投げた。

「アルシエ、よくやった。これからもよろしく頼む」

短い、たったそれだけの言葉。

冒険者としてならきつと仲間たちから何度となく聞くもの。

だがそれは、アルシエが聞きたかったことへの答えだった。

彼はそのまま部屋を去った。残された少女は一人、しばらく呆然とベッドに座っていた。

ゆっくりと、頭の中で咀嚼する。

聞き間違いではなかったか？ 意味の取り違いでもなかったか？ そもそも幻覚で

は？

ネガティブなことばかりが先行して頭に浮かぶが、どれも違う。頬をつねれば確かに

痛んだ。

じんわりと熱いものが広がる。ほっぺたと、胸の奥に。

「そうか……私、ほめられたんだ……」

そうしてやっと実感が湧く。彼我の差は激しく、蒼き薔薇たちのように英雄としては振舞えない。それでも彼女は努めた。苦しく辛いあの瞬間を、諦めず考え続け打開した。

——報われた。

彼の隣に立つ者だと、認められた気がした。

おそらく、きつと、彼はそんな面倒なこと頭にも無いだろう。

だがそれでも……。

「——やった」

大声をあげて歓喜に震えるのは恥ずかしくて理性が抑えた。溢れ出した分は両の手を握り締め、噛み締める。普段感情を表に出すタイプでないため、誰かが見ておらずともはしたくないことに思えたのだ。そしてその判断は正しかった。

扉が開く。見れば、最愛の存在が顔をのぞかせていた。

「ウレイ！ クーデー！」

「お姉さま起きたー！」

「おはよう？　こんにちわ？　……お帰りなさいお姉さまー」

小柄な二人の妹が勢いよく抱き着いてくる。しっかりと受け止め、その温かさを感じる。

そういえば、とモモンが此処は組合長の自宅であると言っていたことを思い出す。妹たちを預けた者の家なのだから二人がいるのも当然だ。ずっと眠ったままだったため、少し心配をさせたかもしれない。

「ただいま。元気にしていました？」

「はい、お姉さま。毎日一杯寝て、一杯お勉強をして、一杯食べてる！　おばさまの作るお料理、とつても美味しいの！」

「そう。じゃあ、お利口にはしてた？」

「おばさまのお手伝いしてるの！　お皿洗いに、お掃除。あとお洗濯も！」

妹たちはつらつらと近況を語る。まだ離れ離れになつてからそれほど時間は経っていない。だが二人の口からは次から次へと日々あったことが出てくるのだ。それはとても楽しそうで一安心した。一応は貴族の生活をして二人だが、順応性は高く変化した生活も満喫できているようだ。

アルシエはコクコクと相槌を打ち続ける。

明日にはまた妹たちの傍から発たなくてはならないからこそ、今この一時を大切にし

たい。

「——それでね、それでね……あれ、お姉さま？」

「どうしたの？」

「お顔、変だよ？」

「へん……？」

「なんだか……とつても嬉しそう」

「お姉さま、何かいいことあったの？」

モモンの後姿が頭に浮かんだ。

アルシエは微笑む。

「うん……とつても嬉しいことがあった」

——あれでよかつただろうか？

「どうしたんだいモモン君、何か悩みでもあるのかな？ 私でよければいくらでも相談

にのろう」

「いえ……誰かを導くのはやはり難しいことだと。そう考えていただけです」

「冒険者を引退したら教師か教祖にでも転職するつもりなのかい？」

「それもいいかもしれませんね」

「キミならすぐに大人気だろう」

「どちらも向いていませんよ、私には」

冗談めかした会話を交わす。

机を挟み対面に座る冒険者組合長のアインザックは、少し納得のいつていない表情を浮かべていた。頭部全体を覆う兜を被っているのに変化を見抜かれる辺り、よほど変わった雰囲気であるのだろう。モモンは自嘲的なため息を一つ吐いた。

「ふっ……アルシエに忠告しながらこれとは」

小さく呟く。

幸せが一つ逃げたことにまた一つ……息を吐きそうになって、やめた。

英雄にため息は似合わない。

「しかし良かったのかい、彼女の傍を離れても？」

「先ほど目を覚ましました。問題ありません」

「そうではなく……傍にいたいと言っていただろう」

「警戒は怠っていません。追手がこの都市に侵入すれば私は感知できます」

淡々と言うモモンに、アインザックは眉根を寄せる。やはり何か納得がいつていない様子だが、彼はその心中で考えを割り切り、首を横に振って整理したらしい。

「……まあ、君がそう言うなら私が出しやばるべきではないな。余計なことを言つてすまない」

「よくわかりませんが、お気遣いを感謝します」

扉がノックされる。受付嬢が茶を運んで来た。

冒険者組合の奥の部屋に通されたモモンは一応客人としてもてなされているようだ。

「それで、単なる報告だけなら受付に申し付けてくれればいいわけだ。いつもキミはそうしようとしていた。だが今回は珍しく私に直接——しかも我が家ではなくここで話したいと申し出た。もちろん私としてはキミから信頼されていると思えて嬉しい限りだが……何があつた？」

「彼女に聞かせたくない内容が含まれますので、念のためです」

「なるほど。大まかなことは『蒼の薔薇』からも報告を受けているが、折角だ。ゆっくり聞かせてもらおう」

アインザックはそう言つて自分の分のお茶を一口含んだ。

モモンは相変わらず全身隙間なく鎧に包まれ、出されたものに手を付けようとしなが、いつものことだった。彼は両手の指先を合わせ、記憶違いのないようにゆっくり出しながら語り始める。

その内容を頭の中で吟味しながら、アインザックは『蒼の薔薇』から聞いたものと擦

り合わせを行っていく。結果おおよそ同じ内容であり食い違いもなさそうであると判断する。ただし一つ大きく違っているのは、モモンの働きへの評価であろう。

「相変わらずキミは謙虚だ。もう少し威張っても誰も文句は言わないと思うが」

「そのようなつもりはないのですが……」

「彼女たちは実質キミ一人で解決したようなものだと言っていたよ」

「ならば彼女たちが謙虚なのでしょう」

「私はキミを信頼しているが、それでも目を輝かせながら申し訳なさそうにキミの英雄譚を語っていた様子と見比べれば、今回はあちらを信じざるを得ない」

謙虚も過ぎれば嫌味にしかない。

そう忠告した上で組合長は好意的な目を絶えずモモンへ向けていた。

「まあ、それも貫き通せば美点だ」

「お褒めに預かり光栄です」

「しかし中々信じ難い話ばかりだよ。アンデッド師団だけでなく高位個体が複数体、それに未確認の“死の騎士”と形容されるような外見のアンデッドか。しかもこの騎士はアダマントイト級冒険者チームを持ってしても苦戦は必至だとか……異常事態だ」

「はい、自然現象ということはありません。そして、ここからが本題です」

兜の中でモモンの表情が真剣なものを浮かべたのを感じ取る。

アインザックは真正面から見据えるように、耳を傾けた。

「事の顛末は先ほど語ったことです。『蒼の薔薇』の皆さんから聞いたことと大きな差異はないかと思えます」

「うむ、その通りだよ。キミが幽霊船を破壊し、一五〇〇にもものぼるといふアンデッドの群れをまとめて一振りで消し飛ばした」

「その幽霊船を破壊した時です。あの船には五体の死者の大魔法使いエルダーリッチが乗り込み指揮を執っていました。私は奴らを討伐し、最後に残した一体へ問いました」

—— 黒幕は誰だ？

未だ濃密な霧の中。仲間たちのもとへと駆けつけねばならない焦燥を抱えながらも、これだけは聞いておかなければならない。モモンは芋虫のように地面を這うしかなかった死者の大魔法使いへ剣先を突き付けた。

「答えは返ってきたのかい？」

「どちらとも言えません。ただ奴はこう言いました——『不死王、万歳』と」

それは何とも邪悪で皮肉ったような笑みだった。同時に心から心酔した対象へ向ける恍惚とした色も見受けられた。そしてそれ以上何も語らず、モモンは見切りをつけて刃を振るった。

「不死王か……そう呼ばれるような者には心当たりがある。王都に根を張り巡らせてい

る裏組織「八本指」。その中で警備部門最強の六人と謳われた「六腕」の一人に、そのような通り名の者がいたはずだ。直後に発生したヤルダバオトの一件でうやむやになった面はあるが、その者は死亡したと報告を聞いている」

モモンは頷き同意した。

王都で行われた八本指の重要拠点を制圧する作戦があり、アダマンタイト級冒険者である漆黒のモモンにも依頼が回ってきた。その際「六腕」に関する資料を読んでいる。不死王という通り名はそこで目にした事実がある。

だから最初、彼はその「六腕」のことを頭に浮かべた。しかし聞く話によると「不死王」はその名に反して、モモンが到着する前に謎の老紳士に倒されたという。まさか蘇って復讐すべく暗躍しているのか、とも考えたが否定する決定的な要素もあつた。

「直接会ったわけでもないのだから確かではないですが、生死以前に「六腕」の不死王では力不足でしょう」

「そうか。しかし他に心当たりはないな。モモンくんはどうだ？」

「……一名います。しかし、奴もまた違うかと考えています」

「理由は？」

「ぬる過ぎる。あの一団の発生が何を目的としたものかは不明ですが、何にしても奴が事を起こすならもつと周到に準備を重ね、強力な存在を置くでしょう」

ぬる過ぎる——その言葉にアインザックは目を見開くほかない。

王国最高戦力とも称される“蒼の薔薇”が、喰らいつくしかできなかつたと自嘲するほどの戦力に対しての物言いではない。

いや、だがしかし。アインザックはその発言を捨て置けない。

他でもない漆黒の英雄がそう言ったのだ。彼が最も信頼を置いている冒険者が。

ならばあり得ないという言葉で一蹴することはできない。

もしかすると本当に——。

モモンがアルシエという少女を気にかけていることと、その謎の存在が繋がる。悪寒がした。ただ座っているだけで威風堂々とした姿になること目の前の男が、もし本当にそれほどの存在を相手取っているのだとすれば……。

「なるほど……アルシエくんに聞かせたくないのはそれか」

「はい。私にとって奴は暫定敵対者しかありませんが、彼女にとつてはトラウマでしょう。彼女自身がいつかは乗り越えなければならぬ問題ですが、関係のないことで不用意に思い出させたくもありません」

「わかつた。ちなみに“奴”とやらの名前を出そうとしないのは、そういうことかね？」
「これ以上ご迷惑をおかけするわけにもいきませんから」

申し訳なさそうにモモンが言う。

迷惑というのはアルシエの妹たちを匿っていることだろう。

「キミと私の仲だ、気にすることは無い。二人も良い子たちだから手もかかっていない。私たち夫婦には子供がいなかったからね。むしろ最近妻が元気でね、料理に気合が入っていて逆に礼を言いたいくらいだ」

半分は本音である。二人の娘が手のかからない良い子であることは間違いない。妻も張り切っており、夫婦仲も少しばかり円滑になった。本当の娘として迎え入れたいくらいだと頭の片隅で考えている。

もう半分は企みがある。気にすることは無い——そう口で言っただけでも本心は恩に着せたくて仕方がない。アインザックはモモンに漢として惚れ込んでおり、どうにか彼にエ・ランテルに帰属意識を持つてもらいたいと願っている。ただ一筋縄ではいかない相手であることも理解していて、恩くらいでは縛り付けるのは難しい。なので血筋という面での束縛も考慮に入れた。もしモモンがアルシエと関係を持つことになれば本気で妹たち二人との養子縁組に取り組む所存であった。

そんな薄汚い思惑を表情の裏に隠しつつ、親愛を浮かべた笑みで組合長は続ける。

「面倒事が起きないように、今私の家には親戚の娘がしばらく預けられていてと広めておいた。これでおおよそキミたちとの関係を嗅ぎ付けられる可能性はなくなつただろう」
「そこまで手を回していただけるとは、ありがとうございます」

「礼なんていらさないさ……よし、本題に戻ろう。不死王の件だが、他に誰かに話したかな？ もし話していないのならあまり広めない方が良い類の話に思える」

「後ほど『蒼の薔薇』の皆さんには話すつもりですが……やはりそう思われますか」

「キミも同じ考えか。なるほど、だから私にだけ話したということだね」

漆黒の兜が頷いた。

彼は信頼できる地位を持ち経験も豊富なアインザックに、情報の扱いを相談するつもりだったようだ。

「よし、こちらの件も了解したよ。不死王の件、こちらで情報の共有を行っておこう」

「よろしくお願いします。それと可能であれば情報の収集もしていただきたい」

「もちろんそのつもりだが、キミはどうするつもりだ？」

「不死王も気にはなりますが、目下対処に当たるべきはヤルダバオトであると考えています。なので一度王都に戻りあちらの冒険者組合で依頼の処理を終えた後、その足で聖王国へ向かうつもりです」

魔神皇ヤルダバオトの強大さは聞いている。

あの邪悪な存在に太刀打ちできる人間はモモンだけであろうとアインザックも思っていた。

「しばらく王国へは戻って来れないかもしれません」

「ああ、その間に色々調べておこう。何かあれば早馬であちらの組合に手紙を出そう」
挨拶ではなく互いの健闘を祈って握手を交わす。

モモンは立ち上がり、部屋を後にしようとした。その後ろ姿をアインザックが呼び止める。

「そうだモモンくん。キミが持ち帰ったアレはどうする?」

「お預けします。もし加工が出来そうなら、教えてください」

モモンが去った後、アインザックは一息ついて部屋を出た。

向かった先は組合所の裏手にある倉庫。普段は彼自身が足を向けることの少ない場所であるが、今回は気にかかる物品がある。倉庫の奥の奥、最も人目につかない場所に安置された物体。

それは船に取り付けられるような衝角、その成れの果てであった。

鉋物でつくられたそれはモモンが破壊した幽霊船についていたものらしい。

もしそれだけであれば単なる戦果を示す証しでしかないのだが。

「アダマンタイトを超える謎の鉋物か……」

忙しくなりそうだと長年の勤が告げていることに彼は苦笑いしつつも、年甲斐もなく心躍っていた。